

美津島町文化財調査報告書 第9集

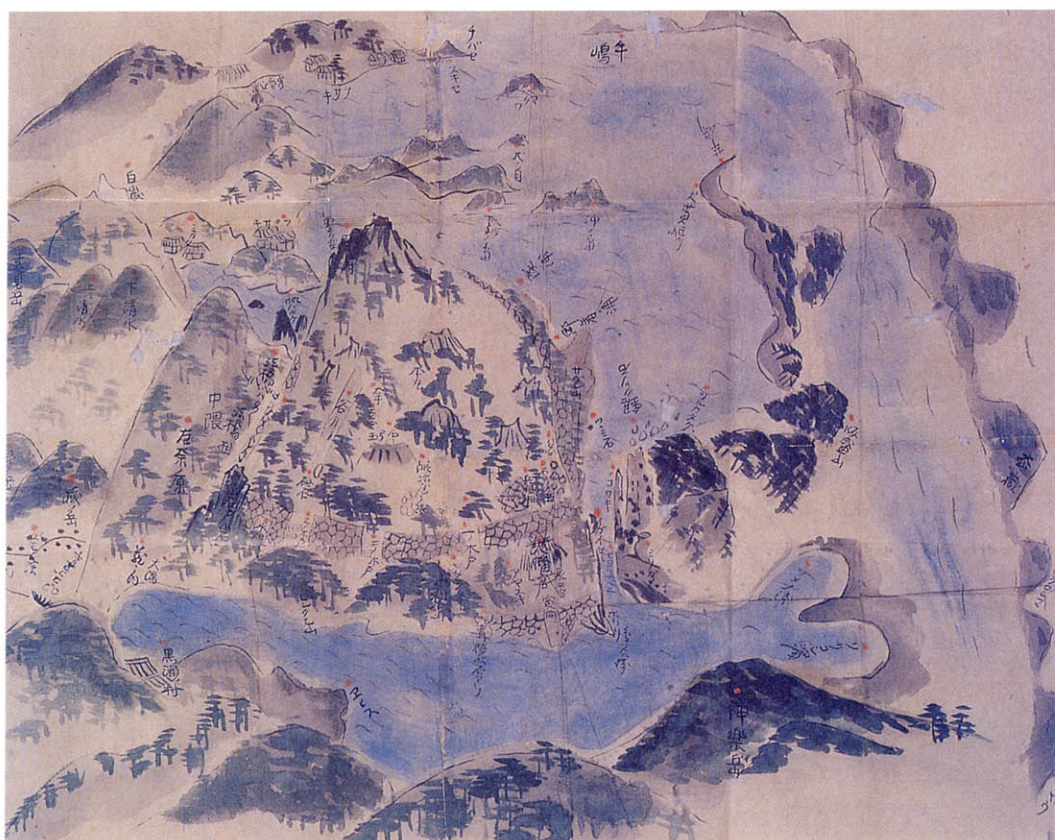
かね だ じょう あと
金 田 城 跡

2000

長崎県美津島町教育委員会



金 田 城



金田城絵図



一ノ城戸



二ノ城戸



三ノ城戸



二ノ城戸城門跡①



二ノ城戸城門跡②



二重の土塁

発刊にあたって

美津島町は、朝鮮半島に最も近い国境の島「対馬」にあり、西は朝鮮海峡に面し、古来より大陸文化の交流の窓口となった文化の薫りたつ町です。

このたび平成5年度より調査を開始しました国指定特別史跡「金田城跡」の調査報告書を発刊することになりました。

日本書紀の、卷二十七、天智6年（667）11月の条に「是ノ月ニ、倭国ノ高安城、讃岐国山田郡ノ屋嶋城、対馬国金田城ヲ築ク」と記載されており、金田城跡は朝鮮式山城の遺構もよく遺り、美津島町が誇る文化財として、学術上極めて重要な古代の遺産であります。

本史跡は昭和37年11月8日、「対馬城山」の名称で長崎県史跡として指定され、その後の度重なる調査により国の文化遺産として重要性が認められ、昭和57年3月23日付をもって特別史跡に指定されました。

今後、古代朝鮮式山城としての性格を明らかにし、史跡を永久的に保存するための歴史的・文化的・学術的観点からの整備、また、町民・観光客等が史跡を見学し、本史跡の歴史的 position、性格を理解できるような教育的、観光的な視点からの整備を図っていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の調査及び報告書の発刊にあたりまして、多大なご指導・ご協力をいただきました文化庁記念物課、整備委員会、長崎県文化課並びに発掘作業に従事されました関係者、地域の方々に対し心から感謝申し上げます。

本書を美津島の文化財保存・顕彰及び地域の学習資料として、活用いただければ望外の喜びとするところであります。

平成12年3月31日

長崎県下県郡美津島町

教育委員会教育長 川 本 初 實

例 言

1. 本書は、長崎県下県郡美津島町大字黒瀬および箕形に所在する金田城跡の整備事業ならびに整備に伴う発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、平成5年(1993)以降、毎年2ヶ月程度、実施してきているが、本書は平成11年(1999)までの調査成果を収録している。
3. 調査は、美津島町教育委員会が主体となり、長崎県教育庁文化課が援助した。
4. 本書は、田中淳也、古門雅高が分担執筆し、担当は目次に示した。なお平成5年から平成7年までの調査成果については本田秀樹（長崎県文化課）の結果報告がもととなっている。
5. 本書関係の写真撮影は、調査中のものは田中・本田・古門が担当し、遺物については古門がおこなった。
6. 製図は、本田と斉藤いづみ、古門がおこなった。
7. 本書関係の出土遺物と図面および写真は、美津島町教育委員会ならびに長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。
8. 本書の編集は、田中・古門による。

目 次

第1章 金田城の環境

第1節 地理的環境	(田中)	3
第2節 歴史的環境	(ク)	6

第2章 整備委員会および整備事業

第1節 調査にいたる経緯	(ク)	13
第2節 史跡の保存と活用	(ク)	14
第3節 年度別環境・保存計画	(ク)	16
第4節 整備委員会の組織と審議	(ク)	19

第3章 調 査

第1節 金田城の調査	(古門)	39
第2節 ビングシ山鞍部の調査	(ク)	42
第3節 ビングシ門付近の調査	(ク)	46
第4節 土塁の調査	(ク)	52
第5節 ビングシ山山頂部の調査	(ク)	65
第6節 ビングシ山南斜面の調査	(ク)	70
第7節 ビングシ山南西斜面の調査	(ク)	78
第8節 ビングシ山北斜面の調査	(ク)	85
第9節 一ノ城戸の調査	(ク)	88
第10節 二ノ城戸の調査	(ク)	92
第11節 二ノ城戸城門の調査	(ク)	100
第12節 まとめにかえて	(ク)	104

第4章 自然科学分析

第1節 自然科学分析	(ク)	107
------------------	-----	-----

第5章 測 量

第1節 測 量		113
---------------	--	-----

挿 図 目 次

第1図	金田城位置図①	3
第2図	金田城位置図②	4
第3図	金田城位置図③ (S = 1 / 25,000)	5
第4図	ビングシ山および周辺地形図①	7
第5図	ビングシ山および周辺地形図② (S = 1 / 15,000)	9
第6図	ビングシ山頂および鞍部の調査地の呼称 (S = 1 / 1,500)	40
第7図	ビングシ山頂および鞍部の調査区設定図 (S = 1 / 600)	41
第8図	ビングシ山鞍部の調査区 (S = 1 / 400)	42
第9図	ビングシ山鞍部の土層 (S = 1 / 100)	44
第10図	ビングシ山鞍部の旧表土 (S = 1 / 150)	45
第11図	ビングシ山鞍部出土遺物 (S = 1 / 3)	45
第12図	ビングシ鞍部およびビングシ門付近の遺構配置図 (S = 1 / 200)	46
第13図	ビングシ門遺構実測図 (S = 1 / 60)	48
第14図	D 1 ~ 3 区の遺構実測図 (S = 1 / 60)	49
第15図	A 区の土層断面図 (S = 1 / 80)	53
第16図	C 2 ・ 3 区遺構実測図 (S = 1 / 60)	54
第17図	D 1 区出土遺構実測図 (S = 1 / 60)	56
第18図	D 1 区出土遺物 (S = 1 / 3)	57
第19図	南土塁断面図 (S = 1 / 60)	59
第20図	南土塁の巨石並列遺構実測図 (S = 1 / 40)	61
第21図	N E 1 区の土層 (1 / 80)	62
第22図	金田城の土塁概念図	64
第23図	ビングシ山頂部調査区設定図 (S = 1 / 400)	66
第24図	E 3 区掘立柱建物跡実測図 (S = 1 / 120)	67
第25図	E 2 区柵列実測図 (S = 1 / 100)	68
第26図	S E 1 区実測図 (S = 1 / 60)	71
第27図	S E 2 区実測図 (S = 1 / 60)	72
第28図	S E 4 区の炉跡 (S = 1 / 30)	73
第29図	ビングシ山南斜面出土遺物① (S = 1 / 3)	75
第30図	ビングシ山南斜面出土遺物② (S = 1 / 3)	76
第31図	W 2 ・ 3 区地形測量図 (S = 1 / 200)	78
第32図	W 3 区遺構実測図 (S = 1 / 100)	80

第33図	W3区土層図 (S = 1 / 60)	81
第34図	ビングシ山南西斜面出土遺物 (S = 1 / 3)	83
第35図	ビングシ山北斜面遺構実測図 (S = 1 / 80)	86
第36図	ビングシ山北斜面出土遺物 (S = 1 / 3)	87
第37図	一ノ城戸第1トレンチ土層図 (S = / 60)	89
第38図	一ノ城戸出土遺物 (S = 1 / 3)	91
第39図	二ノ城戸調査区設定図 (S = 1 / 200)	93
第40図	二ノ城戸第2トレンチ土層図 (S = 1 / 80)	94
第41図	二ノ城戸第1, 3, 4, 5, 6トレンチ土層図 (S = 1 / 60)	96
第42図	二ノ城戸第3トレンチ東壁 (S = 1 / 30)	97
第43図	二ノ城戸出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	98
第44図	二ノ城戸城門跡実測図 (S = 1 / 60)	101
第45図	二ノ城戸城門跡 (S = 1 / 100)	104

図 版 目 次

図版1	整備委員会の状況 (平成10年度)	35
図版2	記者発表風景 (平成11年度)	36
図版3	ビングシ門礎石と礎石付近の遺構	47
図版4	D1～3区出土遺構	50
図版5	A区の土塁断面図	53
図版6	C2・3区の遺構	54
図版7	D1区出土遺構	56
図版8	南土塁の現状	58
図版9	巨石並列遺構と南土塁断面	59
図版10	南土塁の巨石並列遺構	61
図版11	E3区掘立柱建物跡	67
図版12	SE2区	73
図版13	SE4区と炉跡	73
図版14	W3区	81
図版15	ビングシ山北斜面の遺構	85
図版16	一ノ城戸第1トレンチ西壁	89
図版17	二ノ城戸の現状	92

第1章 金田城の環境

第1節 地理的環境

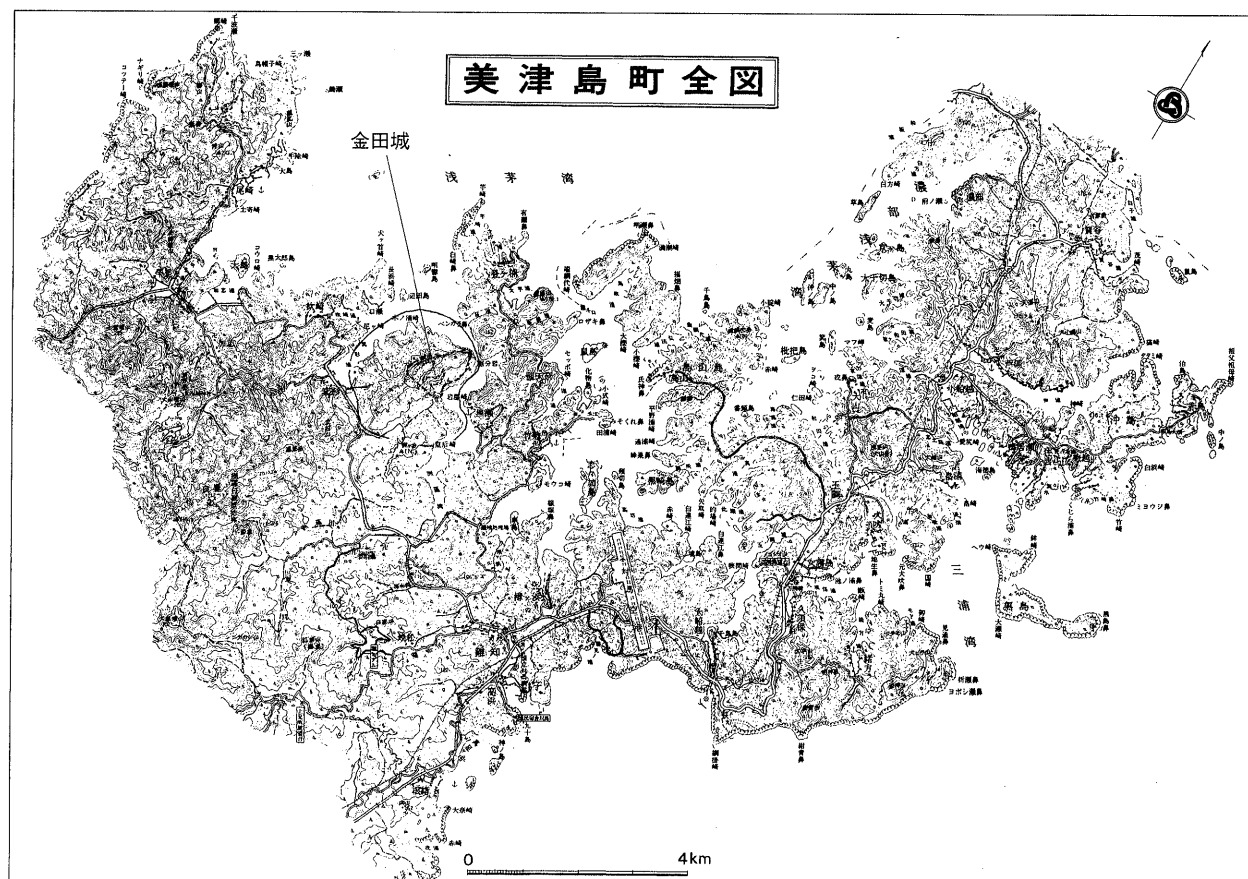
『魏志』倭人伝に記述された「居所絶島，六百百余里ばかり，土地は山険しく，森林多く，道路は禽鹿の如し。千余戸有り，良田無く海物を食して自活し，船に乗りて南北に市糴す。」の描写は当時の対馬の状況が的確に捉えられている。島を上下に分断する浅茅湾はリアス式海岸の特徴を顕著に現し，大小無数の入り江と島々からなる姿は景勝地の一つとなっている。本町の海岸線は延長275kmで日本一長く，しかも，湾入突出部が多く天然の良港である（長崎県教委 1996）。

南北約82km，東西18kmと細長く，東側は日本海及び対馬海峡，西側は朝鮮海峡に面し，中央に湾入した浅茅湾から万関瀬戸によって南北に分断されている。他の小島も合わせて全面積は709.77km²，緯度は北緯34度42分，南端が34度5分，経度は東端が129度30分，西端が129度10分となる。また，韓国釜山まで最短距離で49.5kmの位置にあり古来大陸と日本列島を結ぶ海路の要衝として知られてきた（瀬野・外山 1987）。

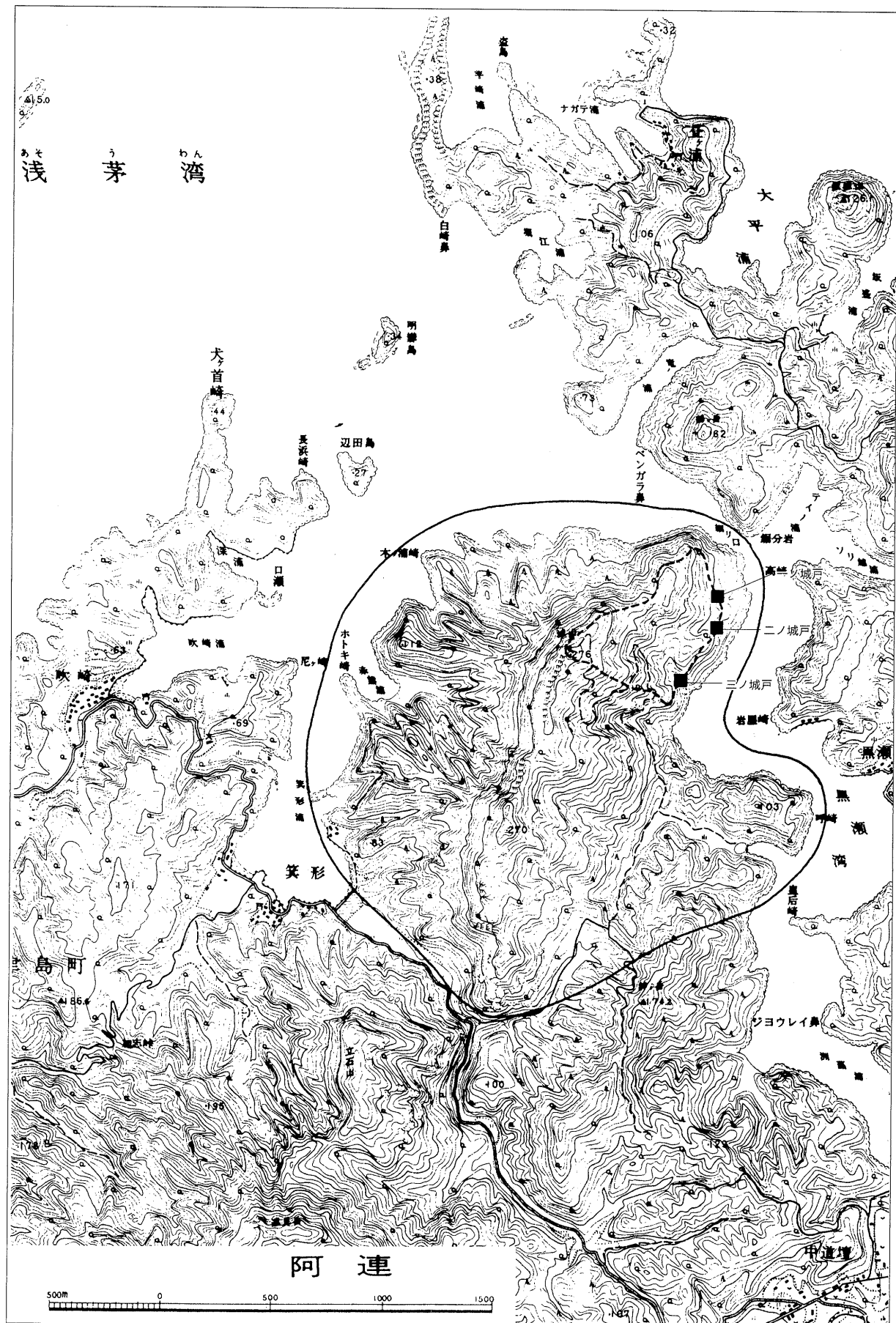
対馬は日本海性気候で一月の日照時間の平均は152時間あり他の地域より晴れる日が多い。大陸性気候の影響を受けるため，季節風は強く，空気は乾燥していて雪は降ることは少ないが，冷え込むことが多い。空気の澄んだ日には遠望所より韓国南岸の山々を望むことができる（長崎県教委 1996）。

また，地理的特殊性により大陸系や対馬特有の生物が数多く生息する。

古来より食糧の自給は難しく，『南北に市糴す』という「魏志倭人伝」の記述どおり，米穀を求め



第1図 金田城位置図①



第3図 金田城位置図③ (S = 1 / 25,000)

実線は指定範囲
破線は石塁線

て大陸や本土と交易を行っていたことがうかがえる。対馬は、古代より大陸と日本の接点として受け継がれてきた歴史的・文化的資源と風光明媚な自然環境から成り立っている（対馬支庁 1999）。

美津島町は、東部を対馬海峡に面し、西部は朝鮮海峡を隔て朝鮮半島と相對する。北部は浅茅湾を隔て一部は山嶺により豊玉町に、南部は上見坂山系の山嶺を分かち巖原町に相對する。海岸線の総延長は403.3kmで湾入、突出部が多いため、天然の良港が多い。陸地の87%は山林であり、標高はあまり高くないが、峻険な山岳が重畳し耕地が少ない。北部の山地は高岳がなく丘陵性のものであり、この地域に所在する大船越瀬戸は寛文年間に、万関水道は明治時代に開削されたものであるが、これは東南海域を結ぶ重要な航路となっている。南部の地域は、上見坂～白岳～遠見岳～城山を結ぶ一連の山系を中心に、それより裾を引き急傾斜となり海岸に迫っている。

河川は、地形的な関係でほとんどが急流河川であり、流路延長も短く流域面積の狭い小河川が多い。地質は大部分が古第三紀の堆積岩からなり、これを貫いて火成岩が南部の高地を形成している。

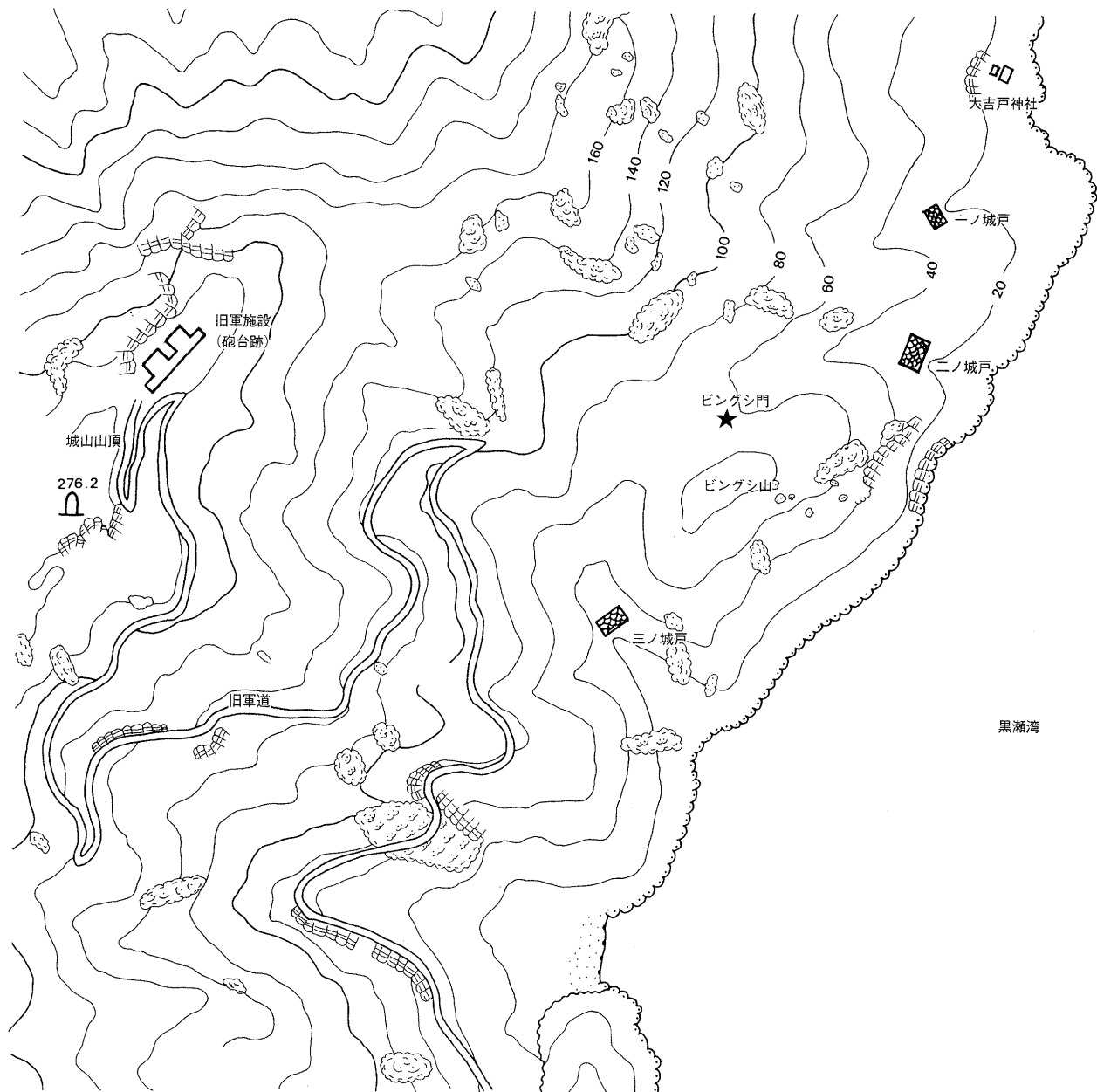
産業は長い海岸線を有する関係から、生産所得は水産業を第一とし、就業人口も最も多い。これは浅茅湾に真珠やブリ・タイ等の養殖が盛んになったことによるもので、他町にない特色といえる。また、耕地が少ないため、恵まれた山林を利用して林業や椎茸栽培も盛んである。それでも若年労働力の島外流失による過疎化の傾向にあり、昭和30年代には1万2千を超えていたが、同40年を境にして減少の傾向を示し、平成12年1月1日現在8,699人となっている。これは若い年齢層の都市流失によるもので、世帯数は減っていない。

対馬の中央部にはリアス式海岸の著しく発達した内海、浅茅湾がある。特別史跡金田城跡はその西方の外浅茅の南辺にあり、地元では城山と呼ばれている。三方を海で囲まれたこの山は頂上から対馬の西方海上を見渡すことができ、對外防備の山城としては格好の条件を備えている。そのせいか中世～近世まで対馬の防衛の中核として機能し、明治には頂上付近に砲台が築かれ、軍用道路（現在の登山道）も走っている。山の北から西側にかけての斜面は峻険な断崖となっており、城戸・土塁などの主要施設は東側に集中する。その他、天險を利用しつつ石垣で構築した石塁は、谷を抱くように廻っていることから「抱谷式山城」と呼ばれる。石塁の延長は約2.86kmといわれ、城壁は低いところで2～3m、高いところで4～5mあり、谷部では6～7mに達するところもある。湾口から順に一ノ城戸、二ノ城戸、三ノ城戸が設けられており、一ノ城戸と三ノ城戸には水門跡も明瞭に確認できる。

昭和57年3月23日、国の特別史跡に指定され今日に至っている（本田 1995）。

第2節 歴史的環境

日本列島と朝鮮半島の間の海峡は、古来、文化交流の主要な通路であったが、対馬にはそれを語る史跡が多い。ことに古代における対馬の中心は、浅茅湾と呼ばれる中央の内海にあったようで、この沿岸に遺跡が集中している。浅茅湾の北岸は豊玉町、南岸、東岸は美津島町で難知を主邑としている。難知は『類聚和名抄』^{るいじゆ わみょうしょう}に見え、対馬唯一の前方後円墳が群として存在し、対馬の県直の本拠と見ら



第4図 ビングシ山および周辺地形図①

れるところである。

中世には倭寇の本拠といわれた時代もあり、外国に侵された受難の歴史もあるが、近世幕末の動揺期には、ロシア・イギリスの野望にさらされたこともあった。明治になると帝国海軍の基地となり、竹敷海軍要港部が置かれ、また、対馬要塞司令部も難知に置かれた（美津島町 1978）。

対馬の弥生遺跡は、全島の浦々に存在しているが、特に浅茅湾の周辺に分布の密度が濃厚で、また遺構や遺物の質も高い。これから見て、島の中部の内海地帯が、対馬における弥生文化の中心をなしていたように考えられる。

魏志倭人伝の記述の中に、「良田無く、海の物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す」と書かれているが、市糴とは米（食物）を買うことで、南は北部九州、北は朝鮮半島と交流を求めた。良い田地が無く、魚貝を採り、船に乗って九州や韓国に米を求める生活は、対馬の宿命的なものであったが、その南北に市糴する根拠として浅茅湾は最も良い場所に違いない。

4世紀の後半には文化の中心が難知に移っている。それは難知周辺に出現した高塚古墳群がそれを証明する。対馬でもっとも大きく、最も古い出居塚古墳は全長40mあり、後円部の竪穴石室は盗掘されていたが、青銅鏃・管玉等が出土している。その東方の海岸一帯に同様の前方後円墳が3基と、円墳2基がある。また、出居塚古墳の北西にサイノヤマ古墳と呼ばれる横穴式古墳がある。対馬では、弥生から古墳時代を通じて箱式石棺が盛行し、高塚の古墳は極めて少ない（美津島町 1978）。

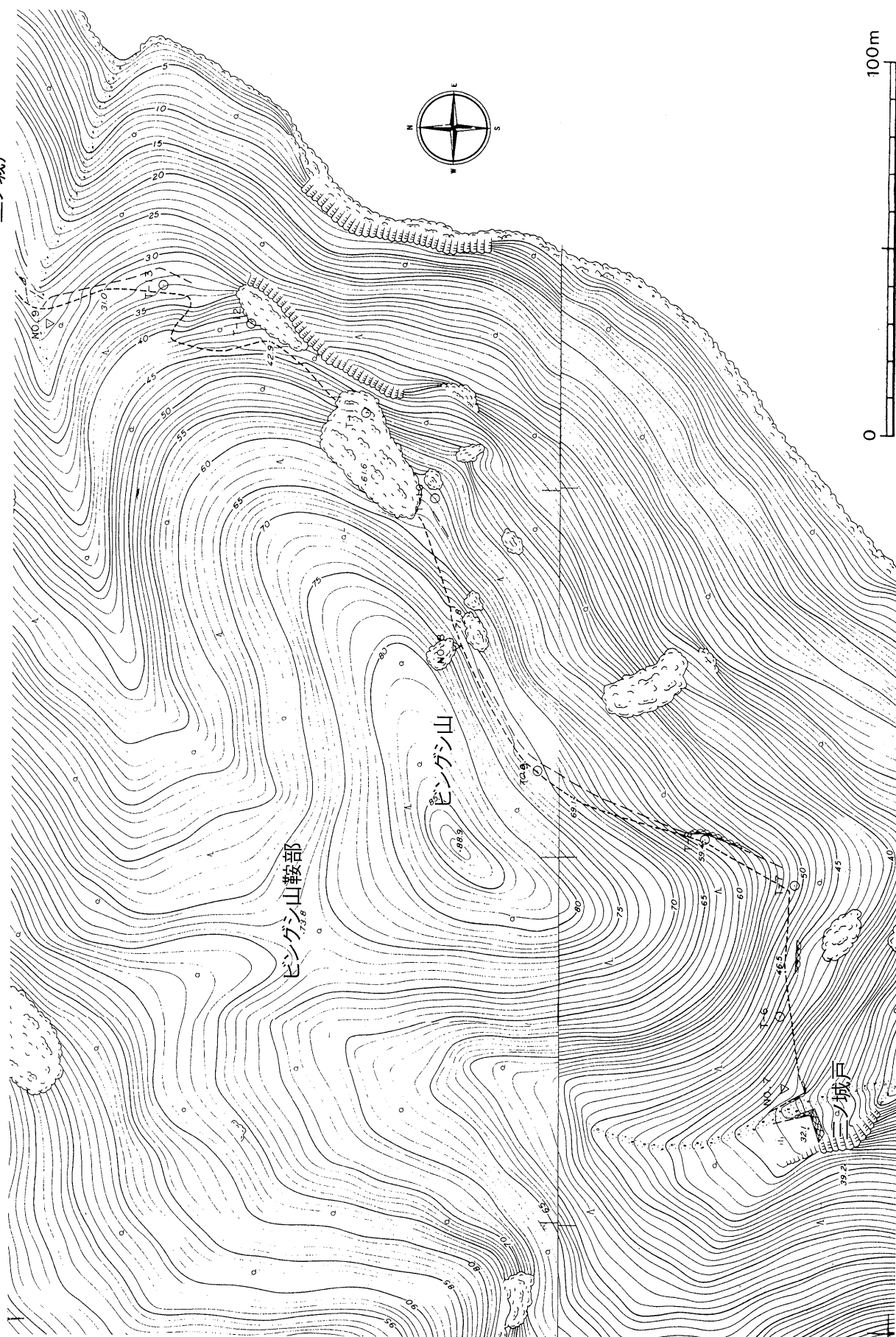
また、対馬には、古い由緒を伝えた神社が多い。平安時代（10世紀初頭）にできた「延喜式」の神名帳は、後世まで神社制度の拠り所とされたもので、今も神社研究の根本資料とされているが、それには、全国3132社が記載されている。これが「式内社」と呼ばれるもので、その中对馬から29社が載っている。西海道107社あるなかで、対馬が最も多いわけで、次ぎは壱岐の24社、筑前の19社がこれに続き、他の諸国は4社から6社程度である。町内には太祝詞神社（加志）、住吉神社（難知）、阿麻氏留神社（小船越）の3社あり、何れも由緒がある（美津島町 1978）。

金田城の歴史は1300年前に遡る。天智2年（663）8月、滅亡に瀕している百済の支援に赴いた阿曇比羅夫率いる日本水軍が、白村江に待機していた劉仁軌の指揮する唐の水軍と戦い、完膚なきまでに撃破された。その状況を『日本書紀』は「官軍敗績し水に赴きて溺れ死ぬ者衆し」と記し、また、『旧唐書』劉仁軌伝は、「倭兵に白村の口に遇ひ、四たび戦つて捷ち、其の舟四百艘を焼く。煙燄天に煮漲り、海水皆赤し」と記載されている。百済は滅亡し、日本は派遣軍を引き上げたが、この時百済から多くの亡命者が渡ってきた。

天智3年（664）、大和朝廷は対馬・壱岐・筑紫に防人と烽を置いた。防人は辺境守備兵であり、烽は狼煙をあげて危急を知らせる通信施設である。この年に筑紫に水城を築いたが、さらに天智4年（665）、亡命してきた百済の貴族の憶礼福留・四比福夫を九州に派遣して筑紫に大野・基肄の2城を築かせ、答怱春初には長門に築城させた。続いて天智6年（667）には対馬の金田城、讃岐の屋嶋城、大和の高安城を築いた。

こうして対馬から筑紫、長門を経て讃岐、大和を結んでみると、当時の国防線がはっきりしてくる。

二ノ城戸



破線は石塁線

第5図 빙강산および周辺地形図② (S=1/15,000)

現在も北九州から瀬戸内にかけて、古代朝鮮式山城の遺跡が点々と存在し、中には史書に記載されていない城もあるが、これらは、当時の国家防衛の大切な施設であり、これを必要としたのは、白村江の敗戦から、大国「唐」への恐怖が生じたからと見られている。

城山に城が築かれたのは、その位置と形状によるものと考えられる。浅茅湾が対馬の中枢であり、難知に對馬で唯一の前方後円墳が集中していることも、対馬における難知の地理的位置の優位を物語る。もし外敵が侵攻してくるときは、浅茅湾にくるものと想定され、天然の要害である城山に金田城は築かれた（美津島町教委 1982）。

この金田城に、防人と呼ばれた兵士たちが配備されて、辺境の守りにについていたものと見られるが、この防人として派遣されたのは、遠くの東国の若者たちであった。彼らが故郷を発つときの別れの歌が、『万葉集』に多く収められている。悲しい別離の情をこめた歌が多いが、なかには悲壮な使命感を陳べたものもある。

「対馬の嶺は下雲あらなふ上の嶺にたなびく雲を見つつ偲はも」

この歌は、防人が詠んだ詩で、対馬の山を眺めると、下のほうには雲がなく、上方の山のほうに雲が棚引いている風景を見ながら出征してくる時、別れた妻を偲ぶ姿が想像できる（城田 1985）。

【引用・参考文献】

- 瀬野精一郎・外山幹夫編1987「角川日本地名大辞典42長崎県」角川日本地名大辞典編纂委員会
長崎県教育委員会編1996「原始・古代の長崎県資料編Ⅰ」長崎県教育委員会
長崎県対馬支庁編1999「つしま百科」つしま百科編集委員会
本田秀樹1995「対馬・金田城」古代文化第47巻第11号
城田吉六1985「対馬万葉の旅」葦書房
美津島町編1978「美津島町誌」美津島町史編纂委員会
美津島町教育委員会編1982「特別史跡金田城跡保存管理計画策定書」1982

第2章 整備委員会および整備事業

第1節 調査にいたる経緯

1. 整備のための調査開始まで

金田城跡はまず昭和37年に「対馬城山」の名称で長崎県指定史跡となった。

指定に至るまでの経緯は長く、江戸時代中期、国学者^{とうまさのぶ}藤齊延は著書『^{ほんしゅうぶ}本州武備談^{びだん}』¹⁾に金田の地名が残る厳原町佐須の金田原(かんだばる)に金田城はあったとし、後世まで受け入れられていた。これに対し儒学者^{すやまとつあん}陶山訥庵は、『^{つしまきりやく}津島紀略²⁾』の中で城山の遺跡が金田城であると説いている。前者は地名を根拠に比定し、後者は現存する遺構によって判断している。

その後、大正11年、考古学者後藤守一の調査報告『^{つしまべっけんろく}対馬瞥見録³⁾』の中で、陶山訥庵の黒瀬城山説を支持している。報告書の中味は各城戸の写真や、測量図及び門礎石の位置を記録している。

昭和28年には東亜考古学会が『対馬⁴⁾』を発表し、黒瀬城山を調査して後藤氏の発表を裏付けた。その後、学会に黒瀬城山が金田城とする説が定着し、その間十分な調査の結果、朝鮮式山城としての遺構もよく遺る本史跡を、貴重な文化遺産として認め、昭和57年3月23日付をもって国の特別史跡に指定された。

同時に、本史跡をどのように保存・活用していくべきか昭和55年度・56年度に金田城跡保存管理計画策定会議が数回開催され、文化庁・策定委員会・県文化課よりご指導・ご助言をいただき、『金田城跡保存管理計画』を策定した。

今後、美津島町が誇る文化財として学術上重要な古代遺産である本史跡を、関係各位の協力を得、保存計画及び管理計画の推進と活用をより具体的に検討を図りながら進めていくこととなった。

『金田城跡保存管理計画』策定事業関係者

文化庁記念物課	主任文化財調査官	仲野 浩
策 定 委 員	お茶の水女子大学文教育学部長	青木 和夫
	東京大学工学部助教授	渡辺 定夫
	長崎大学教養部教授	伊藤 秀三
	奈良国立文化財研究所	
	埋蔵文化財センター保存工学	
	研究室長	安原 啓示
	長崎県立対馬歴史民俗資料館	
	研究員	永留 久恵
長崎県教育長文化課	課 長	辻 寛
	課 長 補 佐	中川 和夫

	管 理 係 長	林 田 好 正
	主 査	山 元 禎 三
美津島町	町 長	松 村 良 幸
	教 育 長	小 田 勇 三
	社会教育課長	平 山 三 千 男
	指 導 係 長	俵 次 男
	社会教育主事	内 田 洋
	主 事	大 浦 日 奈 子

【註】

藤 齊 延『本州武備談¹⁾』
 陶山訥庵『津島紀略²⁾』
 後藤守一1992・23『対馬警見録³⁾』
 東亜考古学会報告書1953『対馬⁴⁾』

第 2 節 史跡の保存と活用

1. 保存計画

これまでの（昭和57年3月現在）金田城跡の調査は、城跡の地表観察、踏査を主としたもので本格的な発掘調査等は実施されていなかった。したがって今後、年次計画を立てて発掘調査を実施し、現状保存と復元並びに記録保存していくことが要望された。

調査の全体計画として、城全体の規模を把握すること。また、城域内に所在したと考えられる遺構等（建物址等）については、その規模、数量、配置等他事例（大野城跡・基肄城跡等）を参考に調査する。

金田城跡は史跡を中心とする広域な地域（海域を含む）全体として柔軟性のある保存をしていく方向で考え、中心的遺構を住民や観光客等に開放していくこととしたい。

（1）現況詳細調査

金田城遺構の実測図を作る。まず、重要な城戸・石塁部から取りかかり、その後、全体を実測する。遺構が集中している城山以外の蔵ノ内・城戸・赤隈の確認調査も必要である。歴史的に金田城を解明するために文献調査や、環境保全のために植生調査を実施し、植物と遺構との共存関係が適切にとれるよう検討する。遺構全般にわたって崩落崩壊に対する保護処置の程度について検討し、保存状態を把握する。さらに、復元的研究に必要な調査を一部についてあわせて行う。

（2）発掘調査

詳細調査に引き続き、または、地区整備に先行し必要な箇所の発掘調査を行う。

なお、発掘調査が大規模かつ長期にわたる場合には、それが見学の対象としても活用されるべく考

慮する。

発掘調査を必要とする箇所を考えてみる。

①二ノ城戸～門礎付近を発掘することにより、門の原型が判明するものと思われる。

また、後背地の平坦部についても調査する必要がある。

②二ノ城戸～三ノ城戸中間地（鞍部）

城内には平場が少なく、唯一の平坦地といってよいこの地は東亜考古学会の調査報告によると館があったと推定されており、南側の小高い丘の頂上付近から須恵器の破片が採取されている。

（ウ）頂上～火立隈^{ほたてくま}と称し、この地に烽があったと推定される。

これらに関連して地域住民ばかりでなく、広く関心をもつ人たちの参加を期待し、学習体験の場となるよう努める。

2. 管理計画

（1）環境整備

①石塁等の保存

遺構周辺の植物と石塁の共存を図るために前記詳細結果を踏まえた上、植林は自然植生として育成、金田城の保存と自然保護を図る。石塁の現状維持と共に、各城戸の崩落防止の整備を図り、要所の石塁、石垣の復元・修復を年次計画をたてこれを進める。

②樹木の伐採

通路となる石塁上の樹木を伐採し、来訪者の通行を容易にする。全面の樹木については、全伐すると石が露出しすぎるので間伐程度に押さえ、海上から木の間から石塁が見えるようにする。

③史跡探訪遊歩道の整備

史跡見学のため、石塁内部を一周できるように遊歩道を整備する。

④旧軍用道路の活用

現在は登山道として使われており、いまだに強固ではあるので、現状維持を図り、補修に留める。

⑤休息施設等の整備

山頂付近、各城戸周辺に休息施設、便所を設置する。

⑥蔵ノ内周辺整備

事前に調査を行うことを前提とし、この地に駐車場、休息施設、便所等を設置する。また、青少年の野外活動施設を設置し、整備する。

⑦その他

史跡の経路は、陸路と海路を考える。陸路では林道を利用し蔵ノ内の駐車場まで車両の乗り入れを認める。海路では金田城の外貌を眺望でき、その規模の大きさを実感できる。船着き場を適所に設置し陸上の遊歩道と連結させる。

上記以外についても最小限の施設を整備する。ただし、周辺の景観に細心の注意をはらう必要がある。

る。

(2) 保安施設

史跡見学に必要な標識，説明版，図解版，注意札，事故防止策等を現状にあわせて設置する。

3. 史跡の活用

金田城跡は，歴史上世界史的に意義あるものとして，学術にも広く認められるところである。

このように重要な文化遺産を保護し，後世に継承していくため，積極的に活用していくために方策を講じる必要がある。

対馬の地形的な特色である自然環境を生かした環境整備を図り学術上，また，観光資源の一つの大きな遺産として活用したい。そのため，自然，郷土民芸，遺跡等文化財を盛り込んだパンフレット等を作成し，史跡の保存活用と観光開発の普及啓発を図り，学校教育・社会教育における教材としても学習に利用し，文化財愛護思想の普及啓発につとめる。

第3節 年度別環境・保存整備

【昭和55年度】

航空地上実測 現状平面図化 8面 1/1000 3.4km²

史跡境界標柱設置 250本

【平成56年度】

管理計画書作成 300部

【昭和60年度】

保安施設の整備 標識 1基，説明板 3基，図解板 3基，案内板 9基
注意板 5基

【昭和61年度】

保安施設の整備 標識 2基，説明板 4基，案内板 5基

【平成2年度】

環境整備 見学道の整備(石畳上・樹木伐採)
w=3.0m, L=986m

【平成3年度】

- | | | |
|------|-----------|-------------------|
| 環境整備 | ・測量基準点設置 | 2級基準点 2点 3級基準点 8点 |
| | ・整備委員会の設置 | 第1回・2回会議 2回開催 |
| | ・整備委員会 | 2回開催 |

【平成4年度】

- | | | |
|------|------------|----------------|
| 環境整備 | ・三ノ城戸石垣図化 | 1/20 立面・平面・断面図 |
| | ・樹木伐採指導 | 九州大学農学部に依頼 |
| | ・城戸、石垣周辺伐採 | |
| | ・環境整備基本計画書 | コンサルタントに依頼 |
| | ・整備委員会 | 1回開催 |

【平成5年度】

- | | | |
|------|------------|--|
| 環境整備 | ・一ノ城戸石垣図化 | 1/20 立面・平面・断面図 |
| | ・鞍部（二ノ城戸と | 結果報告書 |
| | 三ノ城戸間）試掘調査 | 県文化課指導 |
| | ・資料の蒐集 | 対馬瞥見録
(1922・23年 後藤守一)
東亜考古学会報告書「対馬」(1953年)
石垣に関する所見 北垣聰一郎氏に依頼
(1993年8月)
災害多発地帯の「災害文化」に関する研究
研究成果報告書(1993年5月) |
| | ・整備委員会 | 1回開催 |

【平成6年度】

- | | | |
|------|------------|-----------------------------------|
| 環境整備 | ・東南角石塁図化 | 1/20 立面・平面・断面図 |
| | ・ピングシ山試掘調査 | 結果報告書
県文化課指導 |
| | ・通路整備 | 三ノ城戸口(海岸)～三ノ城戸～軍道
三ノ城戸～鞍部～二ノ城戸 |
| | ・整備委員会 | 1回開催 |

【平成7年度】

環境整備	・ビングシ山及び 鞍部試掘調査	5～6年度発掘調査箇所周辺補完調査 結果報告書 県文化課指導
	・通路整備	大吉戸神社～一ノ城戸口～一ノ城戸～ 西北角～頂上 L=538
	・整備委員会	1回開催

【平成8年度】

環境整備	・ビングシ山及び 鞍部試掘調査	5～7年度発掘調査箇所周辺補完調査 結果報告書 県文化課指導
	・二ノ城戸石垣図化	1/20 立面・平面・断面図
	・整備委員会	1回開催

【平成9年度】

環境整備	・ビングシ山及び 鞍部試掘調査	5～8年度発掘調査箇所周辺補完調査 結果報告書 県文化課指導
	・石 罫 図 化	1/20 立面・平面・断面図 96m ² 横断面図 1断面 石垣面清掃
	・整備委員会	1回開催
	・休憩所建設	登山道中間地点
	・放射性炭素年代測定	ビングシ山東側斜面

【平成10年度】

環境整備	・二ノ城戸及び鞍部 土罫試掘調査	5～9年度発掘調査箇所周辺補完調査 結果報告書 県文化課指導
	・石 罫 図 化	1/20 立面・平面・断面図 161m ² 横断面図 1断面 石垣面清掃
	・採 樹 木 伐	石罫図化地
	・放射性炭素年代測定	鞍部土罫（東側）
	・整備委員会	1回開催

【平成11年度】

- 環境整備
- ・二ノ城戸試掘調査 礎石・根石調査
 - ・石 罫 図 化 1 / 20 立面・平面・断面図 72m²
横断面図 1 断面 石垣面清掃
 - ・説明版，案内板設置 説明版 2 基，案内板 4 基
 - ・報 告 書 刊 行 平成 5 年度～11年度調査分 500部
 - ・整 備 委 員 会 1 回開催

第 4 節 整備委員会の組織と審議

1. 第 1 回整備委員会

(1) 開催日時 平成 3 年 8 月 7 日(水)～ 8 月 8 日(木)

(2) 構成

委 員 名 横山 浩一 (福岡市博物館顧問) ◎委員長 (当日の会議にて選出)

小田富士雄 (福岡大学人文学部教授)

八木 充 (山口大学人文学部名誉教授)

中村 一 (京都大学農学部教授)

坂上 康俊 (九州大学文学部助教授)

永留 久恵 (長崎県文化財保護指導員)

柚谷 圭三 (長崎県文化財保護指導員)

指 導 加藤 允彦 (文化庁記念物課文化財調査官)

阿比留徳正 (長崎県文化課管理係長)

町 組 織 松村 良幸 (美津島町長)

川本 初實 (美津島町教育長)

箱崎 道延 (事務局長)

内田 洋 (生涯学習係長)

大浦日奈子 (生涯学習係主査)

(3) 審議内容

①現況詳細調査について

(ア) 史跡の指定範囲については文化庁，町とも充分と考える。

(イ) 金田城の実態については認識不足であり現状を知るために基礎的データ (遺構，道路，古い地

名、小字、境界、古い写真等)を収集し、1/1000の地図を作成する。

(ウ) 現存する遺跡の実測、確認調査については1/1000, 1/2500, 1/5000の地図を作成する。

(エ) 文献調査については原文、万葉集、防衛庁関係、藩政時代の資料収集。

②発掘調査について

(ア) 石塁の図・写真、詳細調査が必要。

(イ) 三ノ城戸の復元

(ウ) 二ノ城戸、鞍部は発掘調査が必要。

(エ) 一・二・三ノ城戸、石塁の実測調査。

(オ) 東南角の調査、石塁内部の建造物等、内部施設の解明、蔵ノ内を含む。

③環境整備

(ア) 樹木の伐採については海上から石垣が見えるようにする。

(イ) 見学道路(探訪遊歩道)の設置については旧軍道の整備をおこない、一周できる見学コースを整備する。

④休憩施設等について

(ア) 適所に必要である。

(イ) 石塁等の保存・修復について

(ウ) 石塁の復元、修理は部分的に必要。(崩落箇所等)

(エ) 一ノ城戸、東南角も修復する必要がある。

⑤その他

(ア) 5ヵ年程度の整備計画を立案する。

(イ) 専門職員の配置

(ウ) 長期、短期的なものを平行して進める。

(エ) 保安施設は今後事業を進めていく上で必要になってくる。

2. 第2回整備委員会

(1) 開催日時 平成3年11月27日(水)~11月28日(木)

(2) 構成

委員名 横山 浩一(福岡市博物館顧問)

◎委員長

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）
八木 充（山口大学人文学部名誉教授）
中村 一（京都大学農学部教授）
坂上 康俊（九州大学文学部助教授）
永留 久恵（長崎県文化財保護指導員）
柚谷 圭三（長崎県文化財保護指導員）

指 導 加藤 允彦（文化庁記念物課文化財調査官）
阿比留徳正（長崎県文化課管理係長）

町 組 織 松村 良幸（美津島町長）
川本 初實（美津島町教育長）
箱崎 道延（事務局長）
内田 洋（生涯学習係長）
大浦日奈子（生涯学習係主査）

（３）審議内容

- ①初日（27日）は現地視察を行い海上から見た金田城の印象等を述べられている。
- （ア）朝鮮式の山城は通常逃げ込み城が多いが、金田城は見張りの性格をもっている。
 - （イ）城戸が開いており攻めやすい。（移動には便利）
 - （ウ）研究、見学のための交通手段の整備が必要。（船着場・旧軍道の整備）
- ②2日目（28日）
- （ア）調査と整備を平行して行う。
 - （イ）植生を専門家に依頼する。
 - （ウ）文献調査を行う。
 - （エ）専門職員の設置。
 - （オ）整備構想図の作成
 - （カ）城戸、石塁が見えるように伐採する。
- ③平成4年度事業について
- （ア）三ノ城戸の実測
 - （イ）植生調査

3. 第3回整備委員会

(1) 開催日時 平成5年3月15日(月)～3月16日(火)

(2) 構成

委員名 横山 浩一(福岡市博物館館長) ◎委員長

小田富士雄(福岡大学人文学部教授)

八木 充(山口大学人文学部名誉教授)

中村 一(京都大学農学部教授)

坂上 康俊(九州大学文学部助教授)

永留 久恵(長崎県文化財保護指導員)

柚谷 圭三(長崎県文化財保護指導員)

指導 加藤 允彦(文化庁記念物課文化財調査官)

田川 肇(長崎県文化課課長補佐)

赤木 光政(長崎県文化課管理係主査)

町組織 川本 初實(美津島町教育長)

犬束 甫(事務局長)

内田 洋(生涯学習係長)

(3) 審議内容

①第1日(15日)

(ア) 事業進捗状況

(イ) 文献調査の推進

(ウ) 城の形として角があるのが特徴で頂上、東南角、一ノ城戸、西北角を結ぶと長方形になる。大野城、基肄城とは異なる。

(エ) 樹木の伐採については全体的な整備計画の中で行う。無駄な伐採は省く。

②第2日(16日)

(ア) 環境整備基本計画の策定について

(イ) 海からのアプローチが必要

(ウ) 三ノ城戸拠点地区

(エ) 発掘調査以前に動いている石の確認。栈橋は砂浜でなく岩の部分に設置。

(オ) 一ノ城戸拠点地区

背後平坦地の調査

(カ) 旧軍施設拠点地区

古代山城を理解するために活用する施設として整備する。

③平成5年度事業について

(ア) 文献を蒐集する

(イ) 鞍部の試掘調査

(ウ) 一ノ城戸写真測量

④その他

(ア) 専門職員の配置

4. 第4回整備委員会

(1) 開催日時 平成5年9月29(水)～9月30日(木)

(2) 構成

委員名 横山 浩一 (福岡市博物館館長) ◎委員長

小田富士雄 (福岡大学人文学部教授)

八木 充 (山口大学人文学部名誉教授)

中村 一 (京都造形芸術大学教授)

坂上 康俊 (九州大学文学部助教授)

永留 久恵 (長崎県文化財保護指導員)

柚谷 圭三 (長崎県文化財保護指導員)

指導 加藤 允彦 (文化庁記念物課文化財調査官)

安楽 勉 (長崎県文化課埋蔵文化財班係長)

下田和寿人 (長崎県文化課管理係主事)

本田 秀樹 (長崎県文化課文化財保護主事) 発掘調査担当

岡 大博 (長崎県文化課文化財保護主事) //

町組織 川本 初實 (美津島町教育長)

犬束 甫 (事務局長)

内田 洋 (生涯学習係長)

(3) 審議

①事業進捗状況について

(ア) 発掘調査(二ノ城戸と三ノ城戸の間の鞍部)

現時点で新たな発見はない。

(イ) 資料の蒐集

後藤守一「対馬瞥見録」、東亜考古学会報告書「対馬」、北垣聰一郎氏「石垣に関する所見」、
首藤伸夫「災害多発地帯の災害文化に関する研究成果報告書」

②環境整備基本計画について

(ア) 歴史的背景について

整備，活用を考えていく上で，特徴を文献，書籍等より研究する。

防衛上だけではなく，外交上の役割も合ったのではないか。

③植生調査及び伐採について

(ア) 現地形と当時の地形は必ずしも一致しない。

(イ) 雑木林を利用できないか。どのように伐採するのか。

(ウ) 海上から石塁が見えるように高木を生育させない地区の設定。

(エ) 植生調査は現在の計画ほど長く必要でない。

④発掘調査について

(ア) 長期計画によって発掘を進める。

(イ) 各城戸の平坦部，頂上部を調査する必要がある。

(ウ) 軍道の調査は必要ない。(路面補修・水処理)

(エ) 調査箇所は二ノ城戸と三ノ城戸間の鞍部を試掘調査する。

⑤見学ルートの設定について

(ア) 三ノ城戸下の海岸に船着場を建設し，三ノ城戸から一ノ城戸を巡るコースを整備する。

⑥その他

(ア) 専門職員の確保

(イ) 資料の蒐集（防衛庁・宗家文書関係）

(ウ) 準備段階から具体的な計画づくりが必要。

(エ) 発掘調査担当職員も会議に出席させる。

⑦6年度事業について

(ア) 二ノ城戸，東南角の実測

(イ) 船着場建設

(エ) 海岸～三ノ城戸通路整備

5. 第5回整備委員会

(1) 開催日時 平成6年10月25(水)～10月26日(木)

(2) 構成

委員名 横山 浩一 (福岡市博物館館長) ◎委員長

小田富士雄 (福岡大学人文学部教授)

八木 充 (山口大学人文学部名誉教授)

中村 一 (京都造形芸術大学教授)

坂上 康俊 (九州大学文学部助教授)

永留 久恵 (長崎県文化財保護指導員)

柚谷 圭三 (長崎県文化財保護指導員)

指導 田中 哲雄 (文化庁記念物課主任文化財調査官)

安楽 勉 (長崎県文化課埋蔵文化財班係長)

末永 久幸 (長崎県文化課管理係長)

本田 秀樹 (長崎県文化課文化財保護主事) 発掘調査担当

町組織 川本 初實 (美津島町教育長)

犬束 甫 (事務局長)

内田 洋 (生涯学習係長)

(3) 審議

①事業進捗状況について

(ア) 発掘調査 (ピングシ山頂)

柱穴を11個発見

自然石階段整備 (三ノ城戸口～三ノ城戸)

杉丸太階段整備 (三ノ城戸～軍道)

②事業内容について

(ア) 自然石階段工事：石が動く箇所がある。小石を詰めたり，置き換えが必要であるが，現状以上には整備しないほうがよい。

(イ) 杉丸太階段整備：三ノ城戸～鞍部～二ノ城戸まで実施できないか。

(ウ) 発掘調査

- ・土塁を確認して精巧な地図の作成が必要。
- ・建物の性格については慎重に検討する。東側に調査を広げる必要がある。
その後性格を決めても遅くない。
- ・5 m位が基本的な規格になっていないか。(全体的な規模は大宰府より小さい。)
- ・柱穴～遺物(7世紀後半)から、築城直後に造営されたものと推定できるが、どの程度の期間使っていたのか。(掘立柱から礎石へ)内部構造解明に重要である。

③金田城の性格、目的について

- (ア) 軍事だけでなく、外交施設として使われたのではないか。
- (イ) 防人はいつまで居たのか。時期的に機能が変わり、目的により数期に渡り築城されたとも考えられる。

④アクセスについて

- (ア) 船着場の整備(デザイン、目的、史実等を検討)

⑤平成7年度事業について

- (ア) 二ノ城戸から三ノ城戸間通路の性格調査
- (イ) 土塁の完結調査
- (ウ) 二ノ城戸の実測調査

⑥発掘調査の成果について(前年度調査報告)

- (ア) 門礎石の発見及び土塁の確認

発掘箇所を二ノ城戸と三ノ城戸間の鞍部と決め、中央部付近からグリットを設定し調査を実施した結果、北東側から門礎石、土塁を検出した。土塁は二ノ城戸側に巡らし、南側に100メートル、北に15メートル確認された。門礎石は本来あったと思われるが、北側からは見つけることができなかった。

土塁、門礎石が確認されたことによりこの地がいかに重要視された場所であったことがわかる。今後も範囲を広げて調査する。

⑦本年度発掘調査について

- (ア) 全体写真が必要
- (イ) 他の類似遺跡のデータを収集し検討する。

6. 第6回整備委員会

(1) 開催日時 平成7年11月1(水)～11月2(木)

(2) 構成

委員名 横山 浩一 (福岡市博物館館長) ◎委員長

小田富士雄 (福岡大学人文学部教授)

八木 充 (山口大学人文学部名誉教授)

中村 一 (京都造形芸術大学教授)

坂上 康俊 (九州大学文学部助教授)

永留 久恵 (長崎県文化財保護指導員)

柚谷 圭三 (長崎県文化財保護指導員)

指導 田中 哲雄 (文化庁記念物課主任文化財調査官)

安楽 勉 (長崎県文化課埋蔵文化財班係長)

末永 久幸 (長崎県文化課管理係長)

本田 秀樹 (長崎県文化課文化財保護主事) 発掘調査担当

町組織 川本 初實 (美津島町教育長)

泉 弘幸 (事務局長)

内田 洋 (事務局次長)

中村 三喜 (建設課技師)

(3) 審議

①事業進捗状況について

(ア) 発掘調査 (鞍部・ピングシ山) 5・6年度の補完調査。～状況説明

(イ) 通路整備 杉丸太階段整備 (大吉戸神社～一ノ城戸口～一ノ城戸～西北角)

②平成7年度事業について

(ア) 通路整備は海岸線を削らないで、谷筋に道を作った方がよい。

(イ) 一ノ城戸の船着場を作る計画をしている。三ノ城戸に船着場を作るには多額のため不可能。

(ウ) 平成11年度以降に浮棧橋を三ノ城戸に作る計画があるが、一ノ城戸に設置することも検討する。

③発掘調査の成果について（前年度調査報告）

（ア）掘立柱建物跡の確認（ビングシ山）

調査地であるビングシ山は、黒瀬湾から見た山の姿が女性の鬢櫛に似ているところからその名が付いたといわれている。標高は83m程しかなく頂上付近には平坦地もあり、この地より3間×1間の掘立柱建物跡1棟を確認した。柱穴は約60cm四方の正方形をなし岩盤を掘込んでいる。7世紀後半の遺物40～50点の遺物が出土している。

今後もビングシ山一帯の調査を継続する必要がある。

④本年度発掘調査について

（ア）鞍部とビングシ山を平成8年度も調査する。

（イ）ビングシ山については櫓といえるのか。

（ウ）ビングシ山の南側を調査したが、鞍部にあった土塁の遺構は見つからなかった。

⑤金田城の性格・目的について

（ア）遺構の性格を検討していく必要がある。防衛的最前線における、外交、（戦争）の性格も考えるべき。

⑥平成8年度事業について

（ア）鞍部、ビングシ山発掘調査

（イ）二ノ城戸石垣図化等

（ウ）休憩・避難施設建設（鞍部）

⑦その他

（ア）来年度の専門職員の確保

（イ）金田城跡全体の整備を望む（砲台跡が2箇所ある）

7. 第7回整備委員会

（1）開催日時 平成8年10月15日（火）～10月16日（水）

（2）構成

委員名 横山 浩一（福岡市博物館館長） ◎委員長

小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

八木 充（山口大学人文学部名誉教授）

中村 一（京都造形芸術大学教授）

坂上 康俊（九州大学文学部助教授）

永留 久恵（郷土史家）
柚谷 圭三（長崎県文化財保護指導員）

指導 田中 哲雄（文化庁記念物課主任文化財調査官）
高野 晋司（長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐）
浜里 一生（長崎県文化課文化企画班主事）
古門 雅高（長崎県文化課文化財保護主事） 発掘調査担当

町組織 川本 初實（美津島町教育長）
泉 弘幸（事務局長）
福井 順一（生涯学習係長）
大浦日奈子（生涯学習係主査）
田中 淳也（生涯学習係主事） 発掘調査担当

（３）審議

①事業進捗状況について

- （ア）発掘調査（ビングシ山）平成６・７年度の補完調査～状況説明
- （イ）休憩・避難施設建設 次年度へ持ち越し（デザイン等の問題のため）
- （ウ）石垣図化 二ノ城戸石垣図化（立面図・平面図・横断面図，１／２０）

②発掘調査の成果について（前年度調査報告）

（ア）土塁基底部から石垣・温石等遺物の確認

昨年度からの継続でビングシ山南斜面と土塁の調査を実施した。

南斜面からは、柱穴１０個と炭が確認された。柱穴は一部については一列に並んでいたが、その他は関連性が不明であった。火を焚いたと見られる焦土も確認され何らかの行為を行っていたことが考えられる。遺物は７世紀後半のものが多く、新羅系陶質土器、温石等も出土した。

新たな施設は確認できなかったが、今後も範囲を広げて調査する必要がある。

③本年度発掘調査について

- （ア）平成９年度で鞍部、ビングシ山の調査を終了させる。
- （イ）礎石の平面図を作成する。

④一ノ城戸・二ノ城戸について

(ア) 一ノ城戸

平坦部の伐採をする。

石垣に直交するトレンチを入れて後背面の調査を行い、水路の確認をする。

現在の通路が実際存在したものか調査する。

(イ) 二ノ城戸

石垣の後背に広がる平坦面に向かって、石垣に直交する形でトレンチを入れて発掘調査をする。

⑤鞍部について

(ア) 礎石下1mの石列とは時期が異なる。

(イ) 土塁の北側でも石列が出る可能性がある。

(ウ) 北東側土塁の伐採

(エ) 現状写真を撮る。

(オ) 門礎と石列の関係

⑥平成9年度事業について

(ア) 鞍部、ビングシ山発掘調査(終了)

(イ) 休憩、避難施設建設(三ノ城戸～鞍部間通路付近)

(ウ) 石塁図化(頂上南東部)

⑦その他

(ア) 平成10年度に報告書を作成する。(鞍部・ビングシ山)

(イ) 全体構想の作成

(ウ) 対馬歴史民俗資料館で文献調査をする必要がある。

8. 第8回整備委員会

(1) 開催日時 平成9年7月29日(火)

(2) 構成

委員名 小田富士雄(福岡大学人文学部教授)

八木 充(山口大学人文学部名誉教授)

中村 一(京都造形芸術大学教授)

坂上 康俊（九州大学文学部助教授）
永留 久恵（郷土史家）
柚谷 圭三（長崎県文化財保護指導員）
指導 田中 哲雄（文化庁記念物課主任文化財調査官）
高野 晋司（長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐）
浜里 一生（長崎県文化課文化企画班主事）

町組織 川本 初實（美津島町教育長）
泉 弘幸（事務局長）
福井 順一（副主幹兼生涯学習係長）
大浦日奈子（生涯学習係副参事）
田中 淳也（生涯学習係主事）
※横山浩一氏（福岡市博物館館長）は退任

（３）審議

①事業進捗状況

（ア）休憩施設・案内板等設置問題の検討

建設場所は軍道中間地点（ヘアピンカーブ）
全面を伐採すれば黒瀬湾が一望できる。

（イ）案内板等の設置について

既設のデザインと統一する。
距離，所要時間を明示する。
休憩所付近に案内板，説明版（地図，写真等を掲載）を設置できないか検討する。
次年度以降適所に設置する。

（ウ）発掘調査の成果について（前年度調査報告）

②ビングシ山南西斜面の調査

ビングシ山の調査は３年目になる。南西斜面は小平坦地が二つあり階段状に存在する。この上の平坦地から直列した柱穴が出土した。ほかにもその存在が確認されたが，建物跡として復元はできなかった。下の平坦地からも台形に巡る柱穴が出土したが，建物跡とは認められなかった。

③その他

(ア) 土塁上の木は伐採することが可能か検討する。

(イ) 炭素年代により640年前後と測定されたが、他に年代を確定できる遺物と比較して年代を確定する。

9. 第9回整備委員会

(1) 開催日時 平成9年11月5(水)

(2) 構成

委員名 小田富士雄(福岡大学人文学部教授)

八木 充(山口大学人文学部名誉教授)

中村 一(京都造形芸術大学教授)

坂上 康俊(九州大学文学部助教授)

永留 久恵(郷土史家)

柚谷 圭三(長崎県文化財保護指導員)

指導 田中哲雄(文化庁記念物課主任文化財調査官)

高野晋司(長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐)

古門雅高(長崎県文化課文化財保護主事) 発掘調査担当

浜里一生(長崎県文化課文化企画班主事)

町組織 川本 初實(美津島町教育長)

泉 弘幸(事務局 長)

福井 順一(副主幹兼生涯学習係長)

大浦日奈子(生涯学習係副参事)

田中 淳也(生涯学習係主事) 発掘調査担当

(3) 事業進捗状況

①本年度発掘調査について

(ア) 土塁に2重構造の確認。

(イ) ビングシ山北西斜面掘立柱建物跡の確認。

炉跡、柱穴(不定期な並び)を南斜面に確認。

②休憩所建設

(ア) 登山道(軍道)中間地点に建設

③放射性炭素年代測定

(ア) 土塁から発見された3種類の測定調査事業進捗状況

④10年度事業

(ア) ニノ城戸後背地、鞍部南側土塁の調査。

(イ) 報告書を1年延長する。

(ウ) 長期計画の見直し。

⑤その他

(ア) 新たに案内板等の設置を検討する。

(イ) 現地説明会を検討する。

(ウ) 今後石塁の調査を検討する。

10. 第10回整備委員会

(1) 開催日時 平成10年10月29(木)～30日(金)

(2) 構成

委員名 小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

八木 充（山口大学人文学部名誉教授）

中村 一（京都造形芸術大学教授）

坂上 康俊（九州大学文学部助教授）

永留 久恵（郷土史家）

扇 貢（美津島町文化財保護審議会委員）

指導 田中 哲雄（文化庁記念物課主任文化財調査官）

古門 雅高（長崎県文化課文化財保護主事） 発掘調査担当

町組織 川本 初實（美津島町教育長）

松村 利光（事務局 長）

福井 順一（副主幹兼生涯学習係長）

大浦日奈子（生涯学習係副参事）

田中 淳也（生涯学習係主事）

発掘調査担当

(3) 事業進捗状況

①発掘調査の成果について（前年度調査報告）

(ア) ビングシ山北西斜面平坦部・南斜面の調査

掘立柱建物跡1棟が北西斜面平坦部より出土した。この地は平成5年度に発見された門礎、内側の広場を見下ろすことができる位置にある。規模は1間×2間の（がわばしら）の建物跡である。ビングシ山山頂部で検出された掘立柱建物跡の柱穴と比較するとやや小さい。

南斜面からは柱穴や炭の堆積層が確認された。柱穴は規則性がなくその性格も不明である。

②本年度発掘調査について

(ア) 一ノ城戸後背地の水門直上の調査。（版築を確認）

(イ) 二ノ城戸でも後背地に版築を確認

③その他

(ア) 石塁付近の樹木伐採

(イ) 石塁図化（継続）

(ウ) 放射性炭素年代測定（土塁より2種類採取）

④平成11年度事業について

(ア) 二ノ城戸礎石付近の調査（崩落石の除去）

(イ) 報告書刊行

(ウ) 石塁図化

(エ) 全体案内板の設置

⑤その他

(ア) 一ノ城戸石垣張り出し部に柵列の痕跡は見られない。現状では敵の攻撃は防げないと思われる。

(イ) P R用にパンフレットを作成する。

(ウ) 報告書はビングシ山周辺の調査結果を報告する。

11. 第11回整備委員会

(1) 開催日時 平成11年10月27日(水)～28(木)

(2) 構成

委員名 小田富士雄（福岡大学人文学部教授）

八木 充（京都学園大学教授）

中村 一（京都造形芸術大学教授）

坂上 康俊（九州大学文学部助教授）
永留 久恵（郷 土 史 家）
扇 貢（美津島町文化財保護審議会委員）

指 導 本中 真（文化庁記念物課主任文化財調査官）
高野 晋司（長崎県文化課埋蔵文化財班課長補佐）
古門 雅高（長崎県文化課文化財保護主事） 発掘調査担当

町 組 織 川本 初實（美津島町教育長）
松村 利光（事 務 局 長）
福井 順一（生涯学習係副主幹
兼係長）
小田恵美子（生涯学習係副参事）
田中 淳也（生涯学習係主事）
発掘調査担当



図版1 整備委員会の状況（平成10年度）

（3）審議

①事業進捗状況

（ア）本年度発掘調査について

二ノ城戸より城門跡が出土（礎石、敷石等ほぼ原型のまま）
遺物から7世紀後半のものと確認された。
礎石は石英斑岩、敷石は水成岩（粘板岩）を使用している。
確認できるすべての門礎を比較する。
城門跡に雨水が流れ込まないように対策を講じる。
見学ルートを設定する。

（イ）その他

案内板等の設置
石墨図化
報告書の作成（二ノ城戸の結果も掲載する）

②平成12年度事業について

（ア）発掘調査

蔵ノ内（谷部）

遊歩道の整備

案内板の増加

文献調査（宗家文書）

③その他

（ア）鞍部付近の名称を決める。

（イ）今後、大城戸神社に浮き桟橋を設置し海上ルートを明確にする。

（ウ）石塁付近の高木を伐採し、海上から一部見えるよう検討する。

（エ）城門跡には立ち入りができないようにする。



図版 2 記者発表風景（平成11年度）

第 3 章 調 査

第1節 金田城の調査

1. 整備に伴う調査の履歴

(1) 第1次調査

- ①期 間 平成5年(1993) 9月20日～11月13日
②調査地 ビングシ鞍部, ビングシ門 ③調査面積 122m²

(2) 第2次調査

- ①期 間 平成6年(1994) 9月26日～11月2日
②調査地 ビングシ山頂部 ③調査面積 210m²

(3) 第3次調査

- ①期 間 平成7年(1995) 9月25日～11月2日
②調査地 南土塁・北土塁 ③調査面積 150m²

(4) 第4次調査

- ①期 間 平成8年(1996) 9月24日～10月4日
②調査地 ビングシ山南西斜面 ③調査面積 150m²

(5) 第5次調査

- ①期 間 平成9年(1997) 9月24日～11月7日
②調査地 ビングシ山北斜面, 南斜面, 南土塁 ③調査面積 200m²

(6) 第6次調査

- ①期 間 平成10年(1998) 9月28～11月6日
②調査地 一ノ城戸, 二ノ城戸, 南土塁 ③調査面積 150m²

(7) 第7次調査

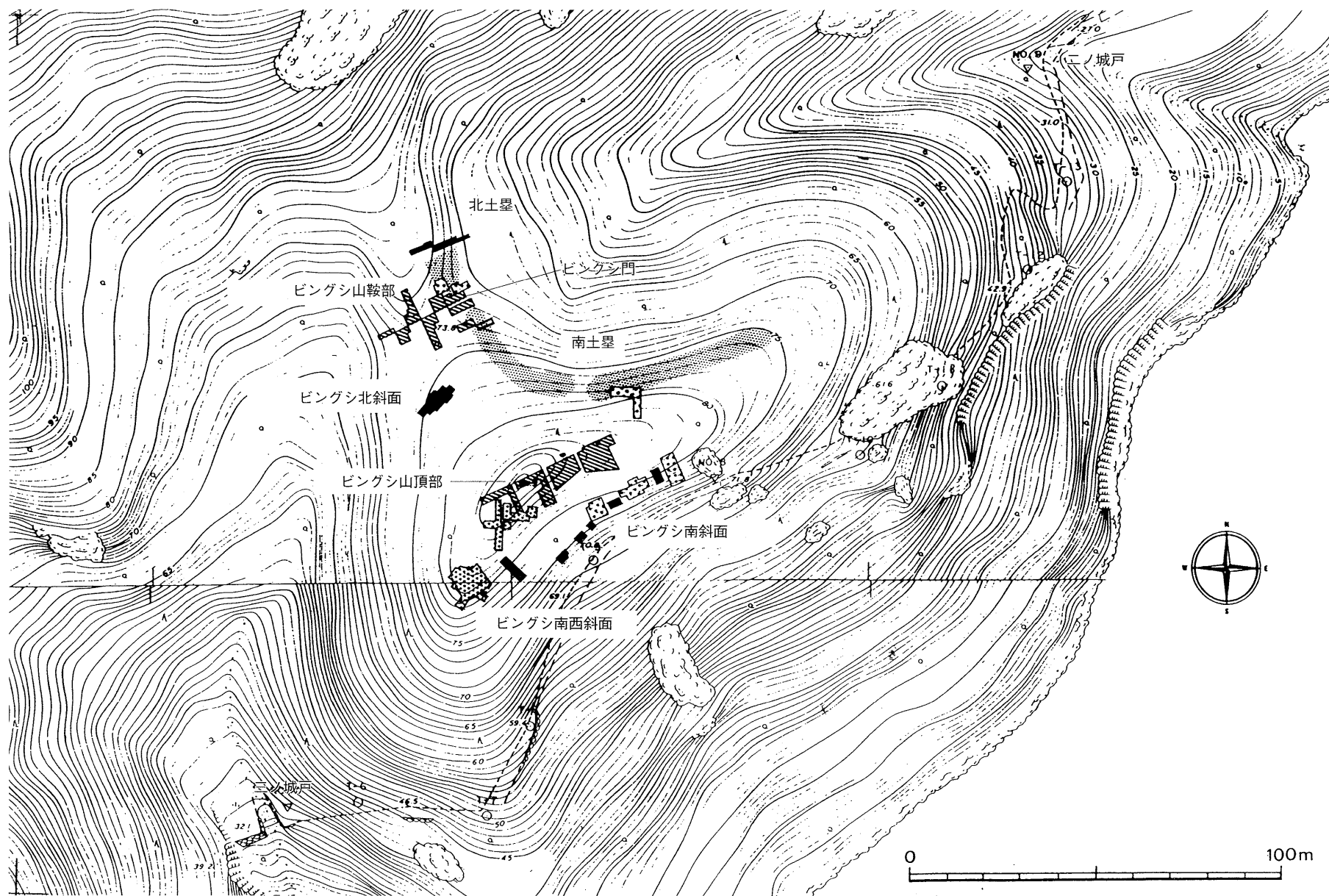
- ①期 間 平成11年(1999) 9月20日～10月29日
②調査地 二ノ城戸城門跡

2. 調査地の呼称(第6・7図)

平成5年から平成9年の調査は通称ビングシ山を中心におこなった。ビングシ山と城山の間は狭小な鞍部になっており、ここを「ビングシ山鞍部」と称することとした。平成5年度の調査において鞍部で門礎石が発見されたため、現在では、この門を「ビングシ門」と称している。

鞍部の東側とビングシ山の東斜面には土塁が存在するが、ビングシ門を境として「北土塁」「南土塁」と称することとした。

ビングシ山の山頂には狭いながら平地が存在するため、ここを「ビングシ山頂部」と称し、ビングシ山の北斜面および南斜面, 南西斜面にもそれぞれ平坦地が存在するため、それぞれ「ビングシ北斜面」「ビングシ南斜面」「ビングシ南西斜面」と称した。



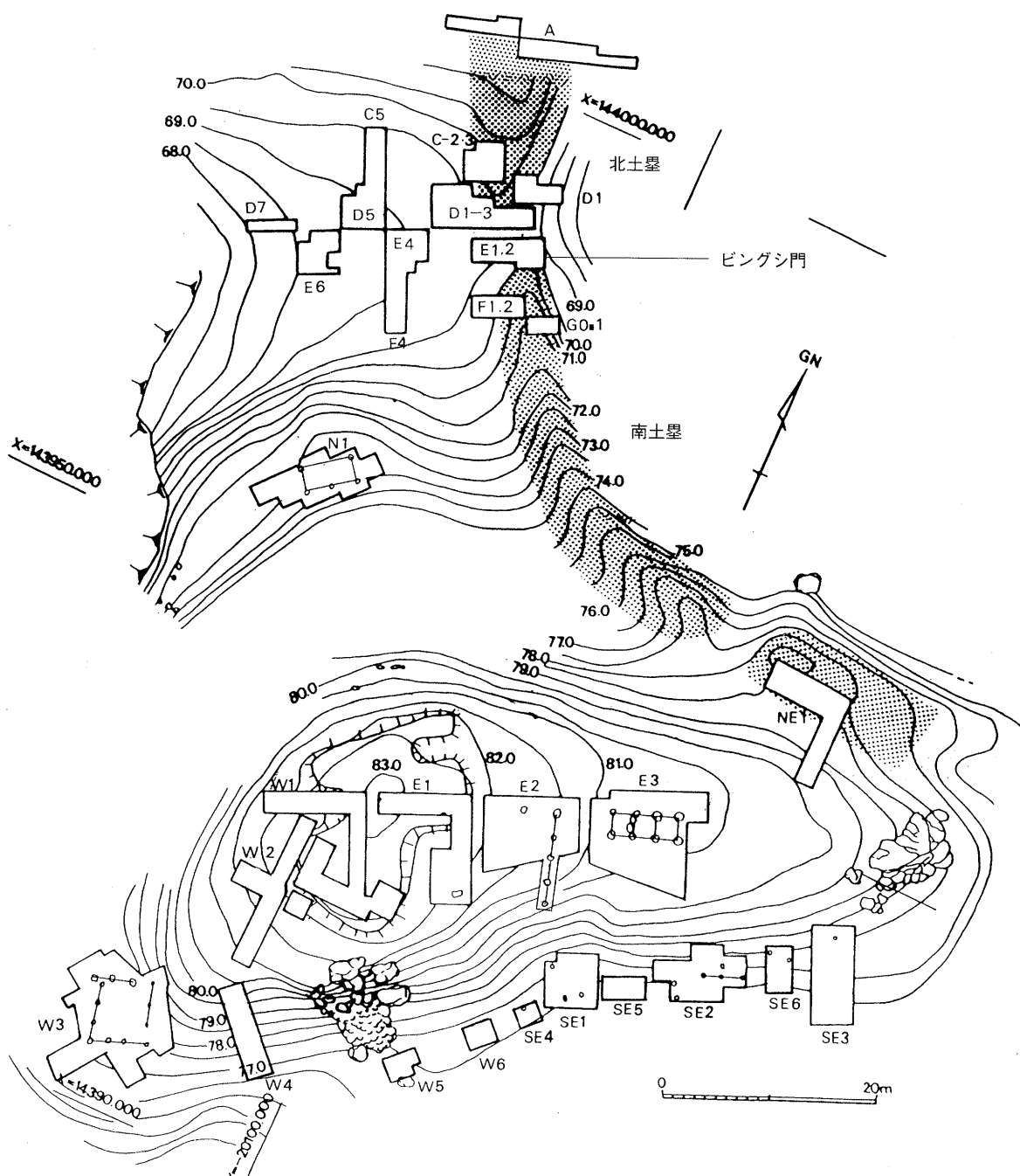
第6図 平井山頂および鞍部の調査地の呼称 (S = 1 / 1,500)

3. 調査区の呼称（第7・8図）

調査はできるだけ現状を損なわないように、トレンチをいれながら実施した。ビングシ山鞍部では一辺4mのグリッドを設定した。東西方向に1～8、南北方向にB～Gの符号をふって、ひとつのグリッドをアルファベットとアラビア数字で示すことにした。

またビングシ山頂部には任意の調査区としてE区を設定し、E1～3区の調査区に細分した。ビングシ南斜面はSE区としてSE1～6区に細分した調査区を設定した。ビングシ山南西斜面はW区として、W1～3区の調査区に細分した。同様にビングシ山北斜面をN区とした。

また北土塁の調査では任意のトレンチA、南土塁の調査ではNE1のトレンチを設定した。



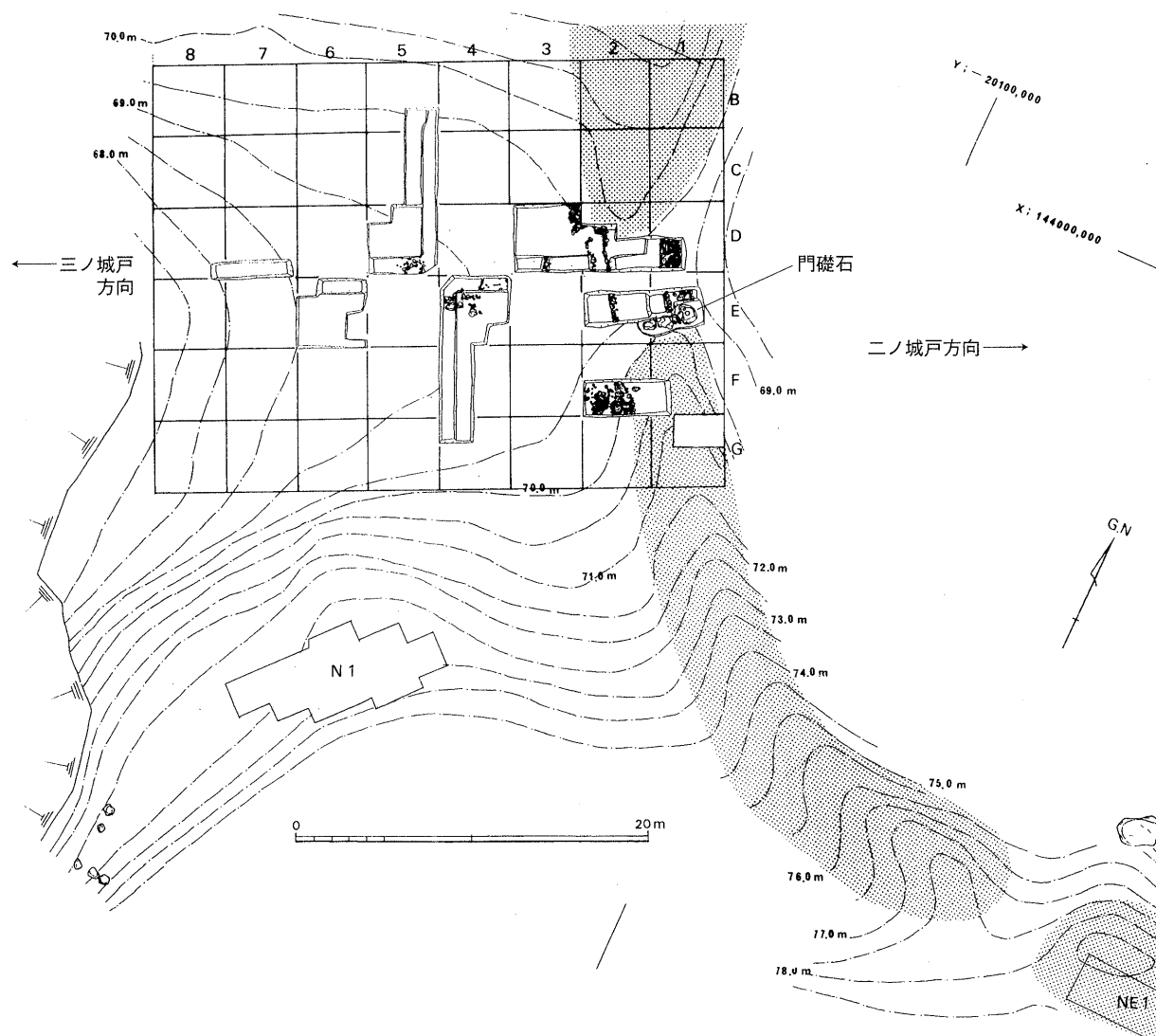
第7図 ビングシ山頂および鞍部の調査区設定図（S=1/600）

第2節 ビングシ山鞍部の調査

1. ビングシ山鞍部の現状

調査地点のビングシ山鞍部は標高70mにあり、金田城をのせる城山全体からみると東南部に位置する。城山では数少ない平坦地の一つである。しかし現地に赴くと、南はビングシ山、北は城山の斜面が迫り、東西は谷が深く入り込む場所で、実際の平地部分は約20m四方の範囲しかない。東西の谷はそれぞれ二ノ城戸、三ノ城戸方面へ続いている（第8図）。

鞍部の現状は後世の炭焼き作業などにより、かなり荒れた状況であった。



第8図 ビングシ山鞍部の調査区 (S = 1 / 400)

2. 調 査

(1) 調査区の設定 (第8図)

各城戸へ下りる東西方向を中軸とし、ここを基準に4 m四方のグリッドを設定して実施した (第8図)。南北方向にB～G、東西方向に1～8の番号を付した。

(2) 鞍部の中央部分の調査

発掘調査は平成5年度に実施し、調査区中央の最も平坦な部分であるE4区・D5区から着手した。第1・2層を除去した段階でE4区から集石がみられたが、遺構になるような形跡はなかった。

D5区では第2層～第3層にかけての部分で砥石が出土したが、他には何ら遺構・遺物を見つけることはできなかった。そのためE4区南側とD5区東側に1 m幅でトレンチを設け、土層の状況を見るようにした。

トレンチは後にそれぞれ南北方向にまで延長した。D3区の南側で礫が出土したが地山の礫と判断した。

また発掘中、F4区のトレンチでは地山直上の灰褐色粘土層 (第4層) 内から7世紀代と思われる須恵器の甕口縁部片が出土した。しかしながら南北トレンチでもこれといった遺構の痕跡は確認できなかった。

(3) 土層 (第9図)

調査区の土層は大きくは3層に分かれる。表土下の淡黄灰褐色土層 (第2層)、黄褐色砂層 (第3層)、灰褐色粘土層 (第4層) と地山である第11層の黄褐色土層である。鞍部の地山はけっして平坦ではなく、調査区の中心から北東によったD5区付近がもっとも深く、それから東西方向に上がりながら、東では土塁に近づくると下降していく。南北方向は北には漸次上がって行くが、南方向ではE4区付近でいったん隆起して再度下降し、ビングシ山斜面に続いている。ビングシ山鞍部の地山は全体的にはD5区付近を底とした播鉢状をなすものとみられる。

(4) 旧表土 (第10図)

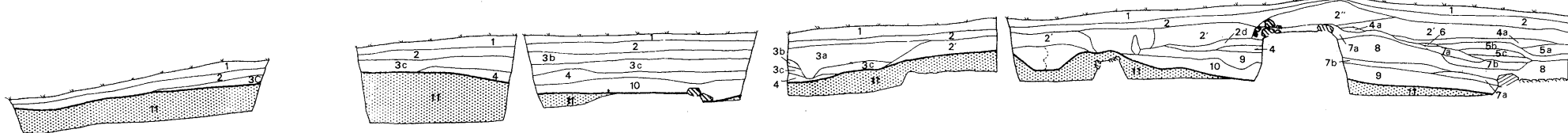
ビングシ山鞍部は南からはビングシ山斜面、北からは城山斜面、東は土塁からの土砂の流れ込みがあったと考えられる。鞍部中央の地山が下がっているところには第10層が堆積し、その上に第4層や第9層がのるという土層である。第10層を整地層と考え、その後のビングシ門や土塁の調査などから勘案して判断すると、鞍部における旧表土は第4層と第9層とみられる。第4層は鞍部全体に分布するようである。第1～3層は丘陵部や土塁からの流れ込みの土と判断している。第9層は黒茶褐色土層で、上のにる第7層との境には炭が混入している。石列Aおよび石列B付近で残存するのみで、その他の地区では残っていない。第9層が古く (旧表土A)、第4層が新しい旧地表面 (旧表土B) と判断される。

(5) 遺構 (第12図)

D5、E4で検出した集石がある。前者を集石A、後者を集石B・Cとする。D3の南でも礫を出土したが、遺構ではなく地山の礫と判断した。

西 1区 7区 6区 5区 4区 3区 2区 東

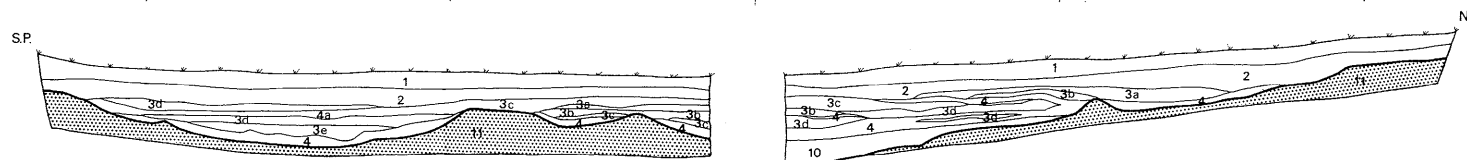
70.0m



0 5m

南 G区 F区 E区 D区 C区 B区 北

70.0m



0 5m

第1層 黒色土層（表土層）

第2層 淡黄灰褐色土層

第2'層（礫混入）

第2''層（礫多く混入，黄色味強く，土締まる）

第2 a層（こぶし大以下の礫混入，バサバサの土）

第2 b層（礫なし，バサバサの土）

第2 c 1層（白い斑点状に礫混入，バサバサの土）

第2 c 3層（やや砂質気味の土）

第2 d層（灰褐色粘土混入）

第3層 黄褐色砂層

第3 a層（砂粒が粗い）

第3 b層（砂粒が細かい）

第3 c層（第3 a層と第3 b層の中間）

第3 d層（粘土が薄く筋状に混入）

第3 e層（粘土が全体に混入）

第4層 灰褐色粘土層

第4 a層（第4層より粘質度が低く砂粒も混在）

第4 b層（第4層よりも粘質度が低く，こぶし大以下の礫混入）

第5 a層 淡褐色土層

第5 b層 同（やや砂質気味の土）

第5 c層 同（やや灰色味をおびた粘質気味の土）

第6層 茶褐色土層（バサバサの土）

第7 a層 淡茶褐色土層

第7 b層 同（やや灰色味をおびた粘質気味の土）

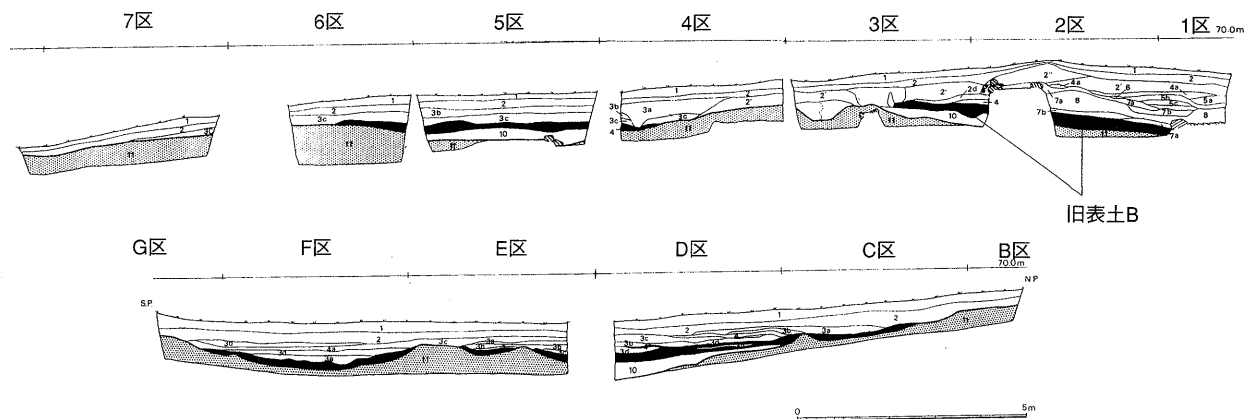
第8層 明褐色土層（やや粘質気味でこぶし大の礫混入）

第9層 黒茶褐色土層

第10層 淡黄褐色土層（やや粘質気味でこぶし大の礫混入）

第11層 黄褐色土層（地山層。粘質気味のこぶし大以上の礫混入）

第9図 ビンゲシ山鞍部の土層（S=1/100）



第10図 ビングシ山鞍部の旧表土 (S = 1 / 150)

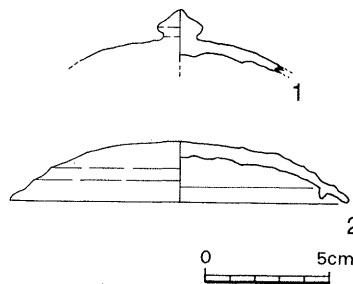
①集石 (第12図)

鞍部中央部のD 5, E 4で拳大の礫の集石を検出している。D 5の集石 (集石A) は表土から約1mの第10層から, E 4のものは表土下50cmの第3層から検出したもの (集石C) と, 表土下90cmから110cmの第10層から出土しているもの (集石B) がある。金田城の時期の集石は第10層から検出された集石AとBとみている。しかし集石の性格はわからない。

(6) 遺物

①陶質土器 (第11図1)

宝珠つまみをもつ杯蓋でE 4区から出土した。つまみは丁寧に作られている。天井部は回転ヘラ削りで成形され, 内面は回転ナデで調整されている。色調は灰白色である。



第11図 ビングシ山鞍部出土遺物 (S = 1 / 3)

②須恵器 (第11図2)

つまみをもたない杯蓋でE 4区から出土した。ほぼ完形である。口径13.5cm, 器高2.4cmを測る。天井部は回転ヘラ削りののちにナデ調整をおこない, かえりの付近はナデ調整である。天井部内面は静止ナデである。色調は灰色で, 胎土には砂粒を多く含む。焼成はややあまい。

3. 小 結

ビングシ山鞍部の調査では集石以外は具体的な遺構を検出することはできていない。集石にしても性格は不明である。この鞍部の広場は後述する土塁や門の内側になることや, ビングシ山北斜面より見下ろされる位置にあり, 本来建物などの遺構が存在しない場所とも考えられる。

検出された集石は性格不明である。

第3節 ビングシ門付近の調査

1. 調査地の現状

調査地は前節のビングシ山鞍部の東側入口にあたる。調査開始時には土塁の存在も確認されておらず、門の存在も予想されていないところであった。

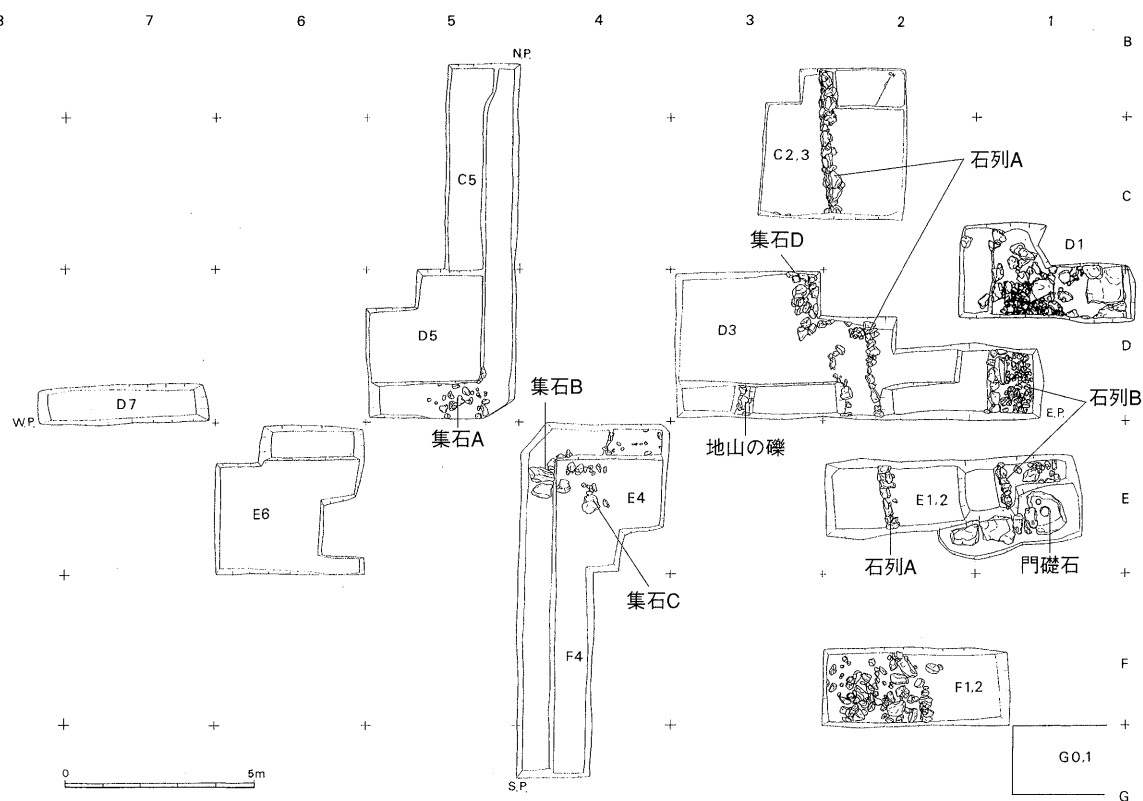
2. 調 査

(1) 調査区の設定 (第12図)

調査区は鞍部で用いたグリッドを使用した。ここではE 1区およびD 1～3区について報告する。

(2) 調査の概要

D 3区で第1・2層を除去した後、北東隅に集石(集石D)が現れたのでD 1・2区まで調査区を拡張した。その結果、D 2区では南北にのびる石列(石列A)を、D 1区でも石列(石列B)と集石遺構を確認した。同様の遺構の続きは南側のE 1・2区でも確認され、特にE 1区では門礎石がみつかった。



第12図 ビングシ山鞍部およびビングシ門付近の遺構配置図 (S = 1 / 200)

この門礎石と対になる礎石を平成7年度の補完調査でD1区に求めたが、該当するような大型の石材を見つけることはできなかった。既に流出したものとみられる。

(3) 土層

先述したように鞍部での旧表土は第4層（灰褐色粘土層）と第9層（第10図）の2枚とみられる。第9層が古く、第4層が新しい旧地表である。第1～3層は丘陵部や土塁からの流れ込みの土と判断している。

第4層は灰褐色の粘土層で、鞍部全体に分布するようである。第9層は黒茶褐色土層で、上にのる第7層との境には炭が混入している。石列Aおよび石列B付近で残存するのみで、その他の地区では残っていない。このことは旧表土がその上に構築された土塁に閉じこめられたために残存したと考えられる。

(4) 遺構（第12図）

①門礎石（図版3）

門礎石は縦0.8m×横1.2m×厚さ0.3mの石英斑岩に、直径25cm、深さ6cmと直径13cm、深さ8cmの2つの柱穴が施してある。大きい柱穴は門柱を支えるもので、小さいものは回転扉の軸摺り穴と考えられる。

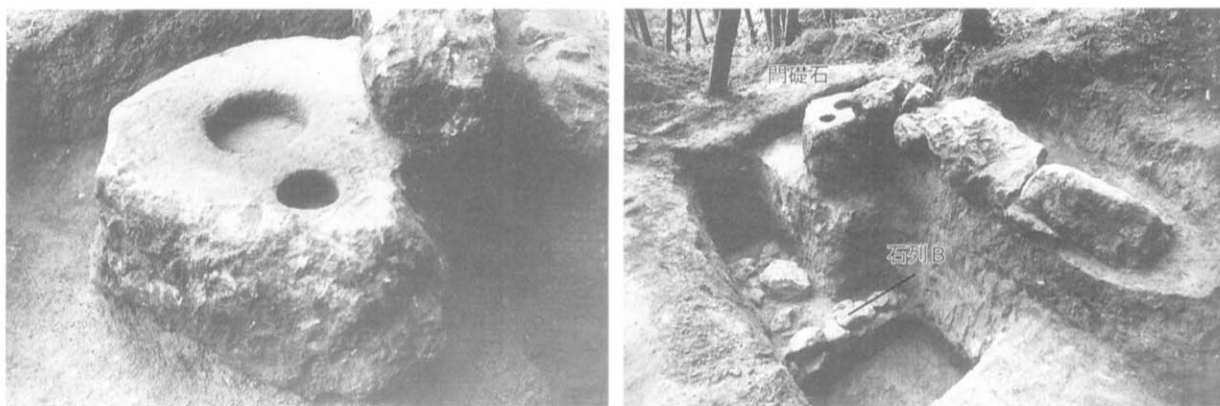
②石列（図版3）

E2区では直径15cmほどの石材を並べた石列（石列A）を検出した。この石列はD2～C2区の石列ともほぼ同レベルであることから、一連のものと考えられる。

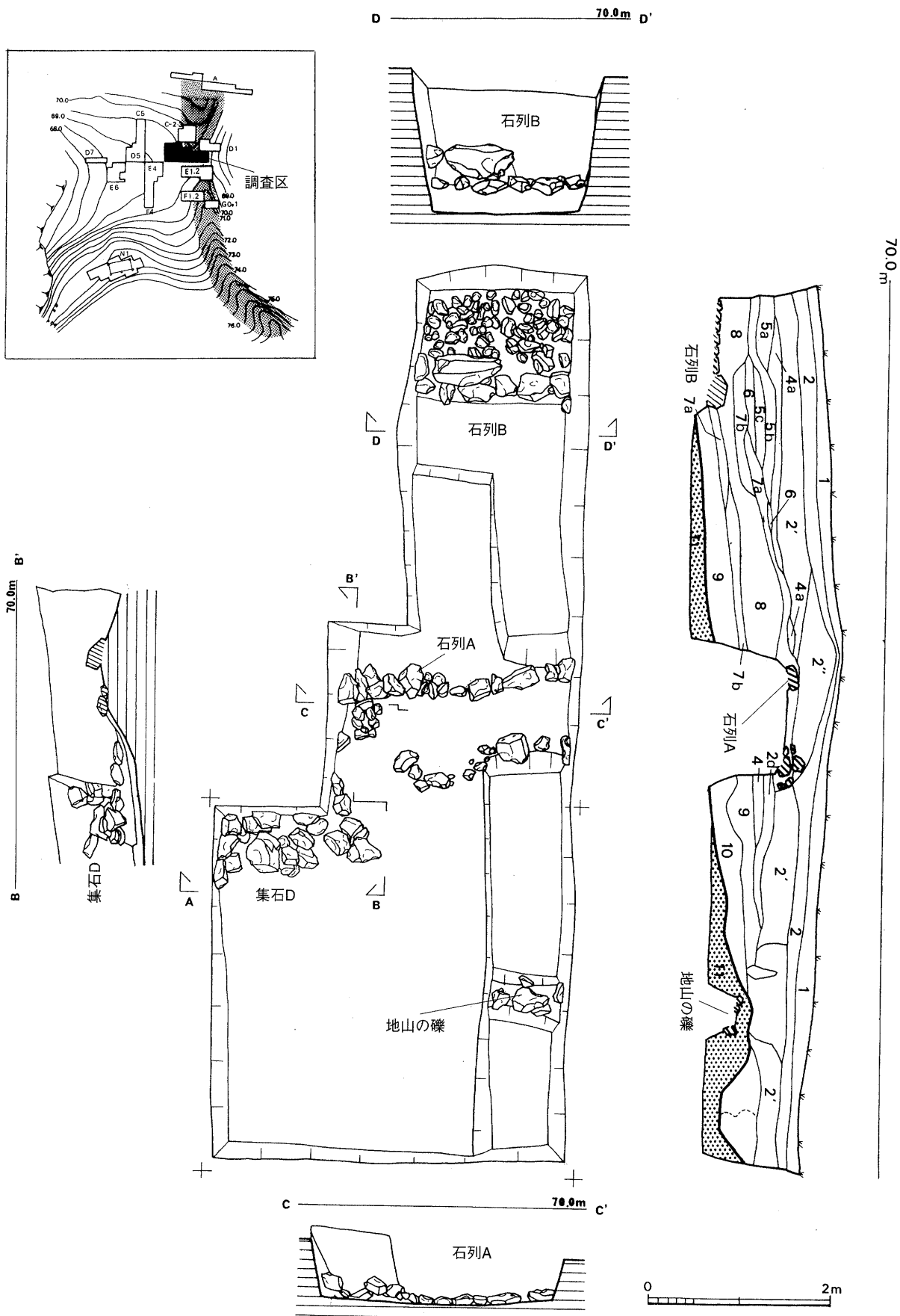
D1～E1区からもうひとつの石列を検出した（石列B）。しかしこの石列は礎石の高さより1mほど比高差があり、前述のD2～E2から検出された石列Aとは性格が異なる遺構である。両者の新旧関係は後述するように石列Bが古く、石列Aが新しい。

(5) 遺物

遺物は、図化や時期を特定できない須恵器片など10数点が出土した。ほとんどが表土層からで遺構に伴って出土したものではない。



図版3 ビングシ門礎石と礎石付近の遺構



第14図 D1～3区の遺構実測図 (S=1/60)



◀ D 1 区の
石列 B (南西から)



◀ D 1 区の
石列 B (南東から)



▲ D 2、3 区および E 2 区の石列 A (南東から)

◀ D 2、3 区の石列 A (南から)

図版 4 D 1 ~ 3 区出土遺構

3. 小 結

①ビングシ門について

検出された門礎石は、従来知られていた一ノ城戸や二ノ城戸、三ノ城戸とは立地が異なる場所から見つかったということで、この鞍部が城戸同様にかなり重要視された場所であったことがわかる。特に二ノ城戸方向へは土塁を巡らし、門を築いた堅牢な作りで、防備が強化されている。三ノ城戸方向にはこのような施設の痕跡は何ら確認できていないため、それぞれの城戸の役割・重要度の相違を思わせる。

この新しく発見された門は、既存の各城戸とは立地が異なるため、あえて四ノ城戸という名称は用いず、「ビングシ門」と呼称することにした。

②高低差をもつふたつの石列遺構について

D1区とD2区より高低差をもった二つの石列が検出されている。後述するように石列A、Bはその後の補完調査によって、新旧2つの土塁の土留めの石列であると判断された。両者の前後関係はD1区およびD2区の土層観察から以下のことが指摘できる。

(ア) 石列Bは旧表土とみられる第9層の上に構築されるか、もしくは第9層を切って構築されている。

(イ) 石列Aは石列Bを覆う第8層（第9層より後に堆積した土層）の上に構築されるか、もしくは第8層を切って構築されている。

(ウ) したがって石列Bが石列Aより古い遺構であることが明らかである。

③門礎石と石列A、石列Bとの関係

門礎石と石列A、Bとの関係を示すE1・2区の土層図は作成していないが、1mほど北へ離れたD1区とD2区の土層断面の観察から門礎石および門礎石横からのびる側壁の根石は第2'層と第2''層の上に構築されていると考えられる（第13図）。この第2'層および第2''層は石列Aを被覆する土層であるため、石列Aを構築した後に門礎石および門側壁を築いたものと考えられる。

したがって先述したように石列Aは石列Bより新しい遺構なので、遺構の構築順序は石列B→石列A→ビングシ門となる。

第4節 土塁の調査

1. 土塁発見の顛末

かつて金田城では石塁は存在するものの土塁は存在しないといわれていた。しかし、平成5年度の整備調査で門礎石が発見されたことを契機として、周囲の樹木を伐採したところ、ビングシ山鞍部を防御するように、弧状に築かれた土塁が発見された。ここではビングシ門を境として北に延びる土塁を「北土塁」、南へ延びる土塁を「南土塁」と呼称する。

2. 土塁の現状

土塁はビングシ門を境として南北方向に「L」字を描くように構築されている。北土塁の長さは現状で確認できる範囲では60mで、北端は城山の山腹に吸収される。南土塁はビングシ山の東斜面をL字状に巡り、その端は谷にでたところで完結する。南土塁の現状の長さは50mである。土塁の高さは自然地形の勾配の影響をうけて地点ごとに異なるが、土塁の内側からみた現状では最大1mほどの高さである。

3. 北土塁の調査

(1) 調査区の設定 (第7図)

ビングシ鞍部で使用した調査区および任意の調査区(A区)を使用した。

(2) A区の調査 (第15図)

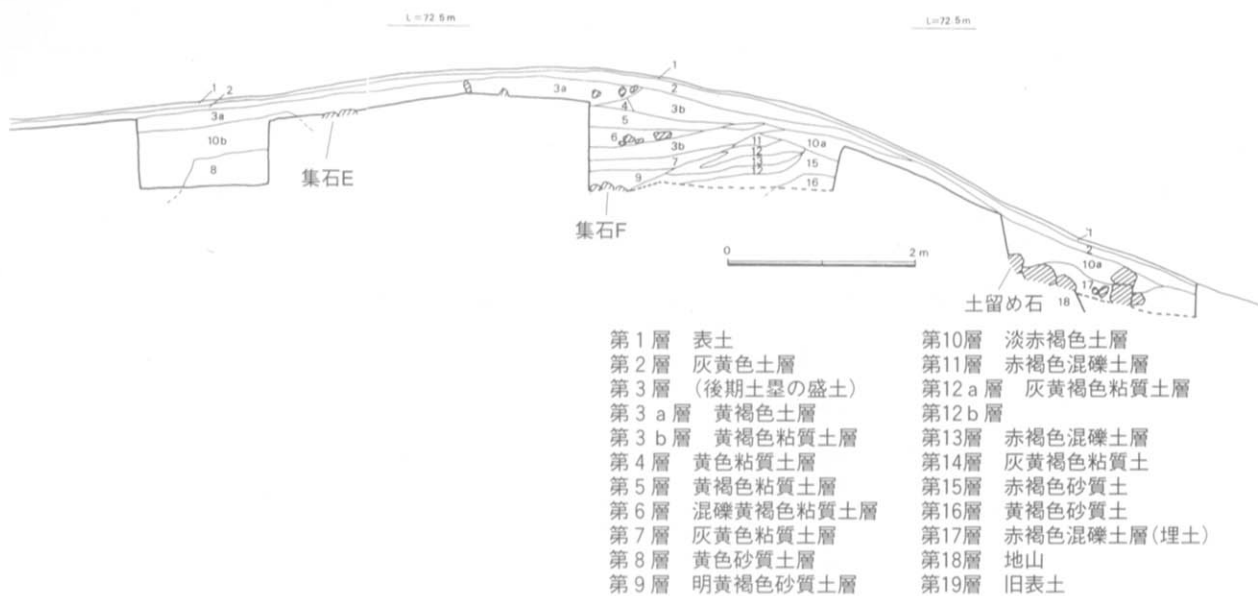
平成9年度の調査で土塁断ち割り調査を実施し、調査区をA区とした。

ビングシ山の土塁はビングシ門を中心に鞍部を防御するごとく南北に開いている。断ち割り調査は土塁の北端に近い部分を選定しておこなった。調査は土塁に直交するトレンチを設けておこなった。その結果、高低差をもつ3種類の集石遺構を確認した。さらに現状の土塁下に別の土塁状遺構を確認した。

現状で確認できる土塁を後期土塁、その下に存在する土塁を前期土塁と呼称する。

(3) C2・3区の調査 (第16図)

A区の調査に先立つ平成7年度の調査で、C2・3区で土塁の調査をおこなっている。C2・3区では北西から南東方向にのびる土塁基底部の石垣が確認された。石積みの南半分は大きく乱れ、西側へ崩落していた状態であった。落石した石を除去すると、塊石の長側辺を前面にして石を三段に積み重ねている状況がうかがえた。石と石の隙間には拳大の礫を詰め込んでいるが、裏込めの石はなかった。石垣の北半分では石の崩落が全く見られないことから、石積みは当初から三段までであったと推測される。この石垣は検出レベルなどから前述したE1区およびD1～3区で検出された石列Aに続く遺構と判断された。



第15図 A区の土層断面図 (S=1/80)



▲現状の土壘下にあらわれた土壘と集石

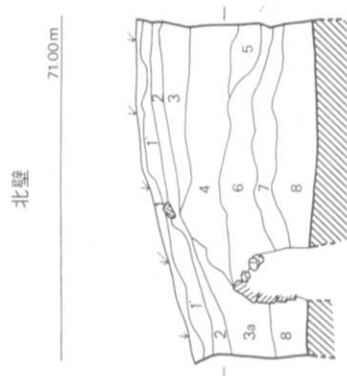
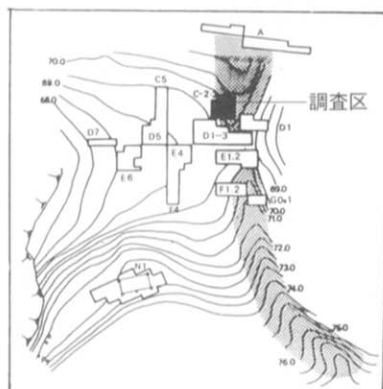


▲北土壘の土留め石



◀二つの土壘の土層

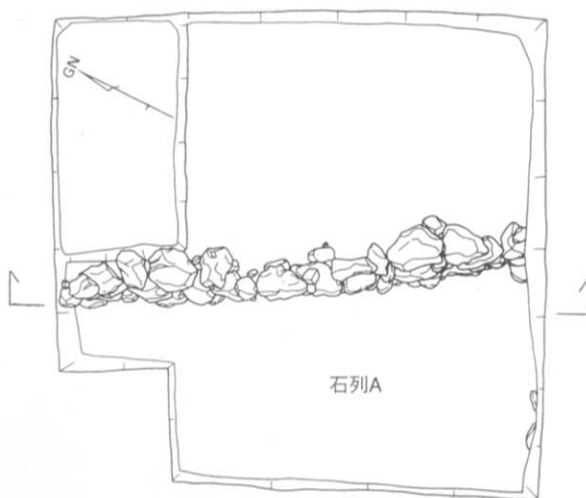
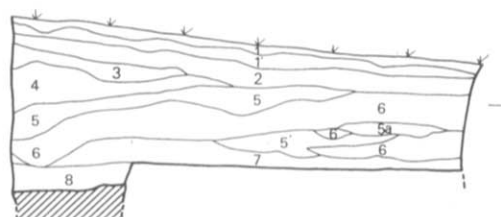
図版5 A区の土層断面図



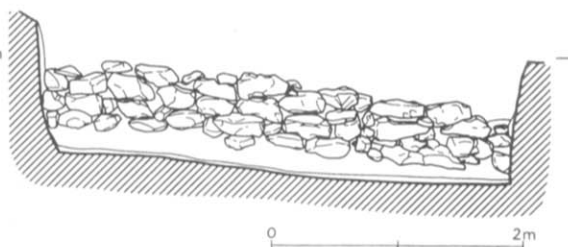
東壁

71.00m

69.70m



69.70m



- 第1層 黒色土層（表土層）
- 第1'層 黒灰褐色土層
- 第2層 淡黄褐色土層
- 第3層 黄灰褐色土層
- 第3a層 黄茶褐色粘質土層
- 第4層 混礫黄橙褐色土層
- 第5層 淡灰褐色粘質土層
- 第6層 混礫橙褐色土層
- 第7層 灰褐色粘質土層
- 第8層 黄褐色粘質土層
- 第9層 淡褐色粘質土層

第16図 C2・3区遺構実測図（S=1/60）および図版6

(4) D1区の調査 (第17図)

平成7年度の調査ではD1区でも土塁調査を実施している。D1区では地表下1mほどで砂や粘土の層が現れはじめ、1.3から1.6mまで掘り下げると集石遺構が検出された。

遺構の西側はC2・3区の石垣と同じく、塊石の長側辺を揃えている。この集石は検出レベルなどから先述したE1区およびD1～3区で検出した石列Bに続く遺構と判断された。

トレンチを東側へ拡張すると並列して埋置された巨石が現れた。これは三ノ城戸などで見られるような巨石で、かなり頑強な造りとなっている。巨石と西の石列の間には拳大の礫が多数詰め込まれており、一見したところ石塁のような遺構かと思われる。幅は約3.5mを測る。

後述するがG0・1区でも同様の巨石が検出され、一連の遺構と考えられるため、「巨石並列遺構」と称することにする。

(5) 遺構

①北土塁の盛土

A区の前期土塁の版築に用いられた土は北土塁の東側の谷傾斜地に堆積する赤褐色の地山の土を使用している。この赤褐色土はビングシ山では見つからない土である。前期土塁が赤褐色を呈することは後期土塁との見極めを容易にさせ、後期土塁の下に隠れていた前期土塁の検出に大いに役立った。

盛土は前期土塁の断面観察によると土塁の版築構造は糸を引くような幾重にも土を突き固めたものではなく、古墳の墳丘の盛り土のような状況を呈している。しかも版築構造は土塁の内側（鞍部側）斜面のみに存在するという構造をしている。

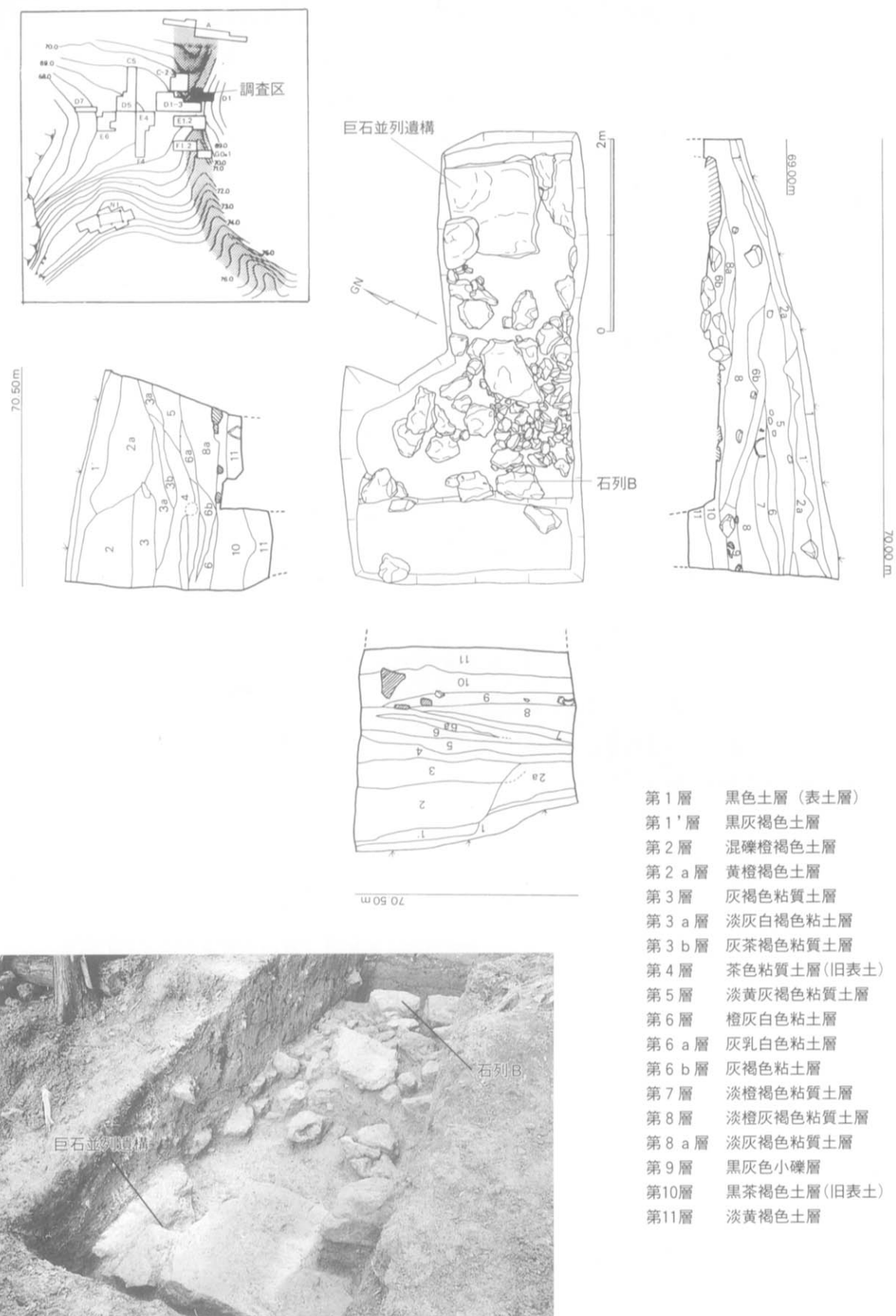
後期土塁は前期土塁を覆うように構築されている。土塁の断面観察によると、黄褐色土による粗い帯状の土盛りをおこなっており、前期土塁のような版築構造をもたない。いわゆる「互層積土」といわれるような積み方である。

D1区では調査当時、土塁が二重構造をなすという認識がなかった。したがって記録された断面図から判断しなければならないが、それによるとD1区の土層では2枚の旧表土を確認している。そのうち第10層は黒茶褐色土層で、この上に第8層（淡橙灰褐色粘質土層）が盛り上がりをもって堆積しており、色調などからして、この第8層が色調や土質などよりのA区の前期土塁の盛土に相当する土層と判断される。さらに第4層の茶褐色粘質土層も旧表土とみられ、この上に堆積した土層が後期土塁と考えられる。

②土留め石と巨石並列遺構

A区東側の谷部に土留め用と思われる石塊が5個出土した。いずれも石英斑岩で、大きいものは長辺70cm、短辺40cm、高さ40cmほどである。出土状態は石垣や石塁状ではなく、斜面に沿って据え置かれたというような状況である。崩落した可能性もある。石塊に加工の痕跡はない。

D1区では巨石並列遺構を検出している。巨石はトレンチ内に2個並んでおり、全体を露出させたわけではないが、巨石は石英斑岩で、一辺100cmを測る。深掘りして巨石の全体を露出させていない



第17図 D1区出土遺構実測図(S=1/60)および出土状況(図版7)

ので詳細はわからないが、東側の面はそろえているようである。調査区西側の石列Bと巨石の間には拳大の礫を多数詰め込んでいる。

これと同じ巨石並列遺構は後述する南土塁のG 0・1区でも検出されている。

③石垣

C 2・3区では長側辺をそろえた高さ0.5mの石垣がトレンチ幅の4 mにわたって検出された。この石垣は土塁の基底部にあり土留めないし根固めの施設と考えられる。石垣は当初から3段の石積みを行っていたものと推定され、裏込め石などを丹念に施すような状況は見られなかった。

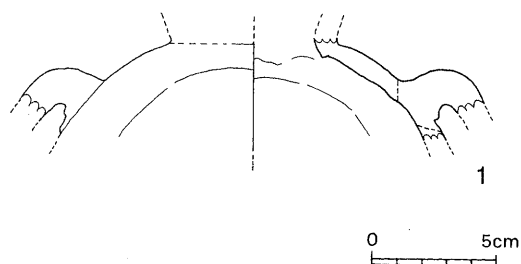
④集石

A区の西側では比高差が1 mほどの2種類の集石が出土した。比高が高いものを集石E、低いものを集石Fと呼称する。いずれも20cm～30cmの石英斑岩を用いている。集石Fは2段以上の石積みになる可能性があるが、集石Eは石積みをもたない。

(6) 遺物

①須恵器 (第18図)

D 1区より提瓶の肩部が出土している。貼り付けの輪状把手をもつ。復元頸部径は6.8cmである。外面はナデ、内面は回転ナデ調整である。胎土には白色の砂粒を多く含む。焼成は良好である。



第18図 D 1区出土遺物 (S = 1 / 3)

4. 南土塁の調査

(1) 調査

ビングシ門より南に延びる土塁を南土塁と呼称する。平成5年度にF1・2区,平成7年度にNE1区,平成11年度にはG0・1区を調査した。

(2) F1・2区の調査(第19図)

門礎石南側には幅約3mの土塁が存在する。F1・2区にトレンチを設定し土層の状況を見た。断面では基底部の地山を整え、側縁に石を積み上げていたことがうかがえた。石積みは2段目までは一部残存していたが、本来はもう少し高かったとも考えられる。崩壊したと思われる石は西側部分に散在していた。



図版8 南土塁の現状

(3) G0・1区の調査(第19図)

前述のF1・2区の調査をうけて平成11年度に谷側に土塁を立ち割るようなG0・1区を設けて調査をおこなった。その結果、F1・2区で「基底部の地山」とみていた土層は、互層積土状の人工的な盛土であることがわかった。このことにより北土塁のA1区で検出されたような現在の土塁下にもうひとつの土塁があることが判明した。したがって北土塁と同様に二重構造の土塁が南側にも存在することがわかった。

さらに東斜面には2個の巨石が検出された(図版10)。

(4) NE1区の調査(第21図)

平成7年度にNE1区の調査をおこなった。主にビングシ山と土塁とのつながりを見るために設けたトレンチである。ピットなど遺構は全く確認されなかった。

南北トレンチの土層で見ると、ビングシ山からの岩盤がそのまま二ノ城戸方向の谷へ傾斜しているのがわかる。土塁は山側を掘り下げて土盛りをしていた。ただし、C-2・3区で見られたような基底部の石積みは、ここでは確認できなかった。

盛土は東西トレンチで確認されるように砂と粘土を交互に積み重ねた版築状のもので、平均して1.2mほどの高まりが残存していた。

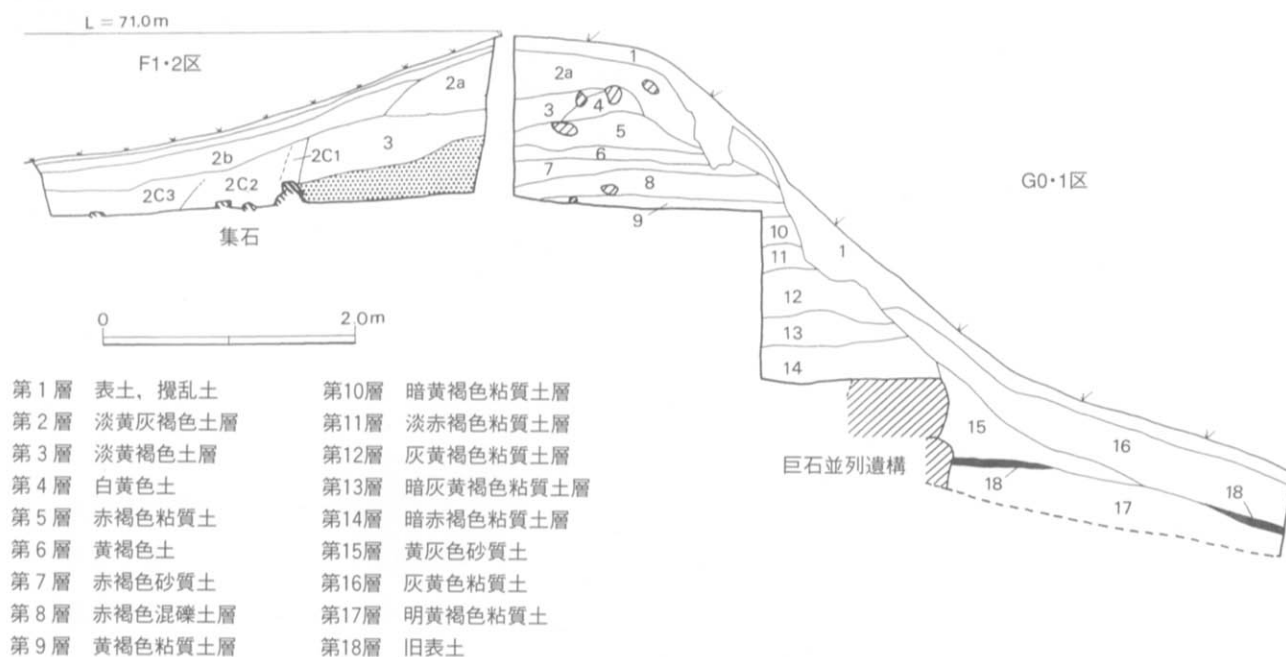
(5) 遺構

①土塁の盛土(第19図)

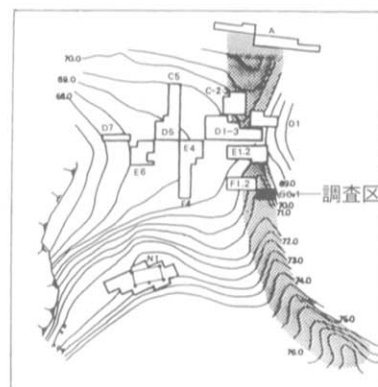
G0・1区の断面観察によれば前期土塁の頂部付近は版築状の盛土をなすが、下位のほうはいわゆる「互層積土」である。この状況はNE1区の東西トレンチの断面でより明確に観察できる。土塁頂部は古墳の盛土状の土層であるが土塁下位はいわゆる互層積土となっている。このような状況は北土塁と同様である。

②巨石並列遺構(図版10)

G0・1区の東で検出した巨石並列遺構は北土塁のD1区で検出された巨石並列遺構と同様の構築



第19図 南土壘断面図 (S = 1 / 60)



図版9 巨石並列遺構と南土壘断面

物である。巨石は高さ0.8m, 幅0.8mの石英斑岩をもってつくられ, あたかも神籠石の根固めの石のような状況を呈す。石の表面下部の1/3ほどは淡赤褐色に変色しており, 石の上部は過去の一時期地表面に露出していたことがわかる。巨石の変色部分と同じ高さでトレンチの断面セクションには黒色の有機物の土層がトレンチを一周している状況が観察され, この有機物の土層は旧表土と判断された。

③石積み

F1・2区の西側で検出した石積みは2段まで確認されており, 本来は石垣状の構築物ではなかったかと推定される。

5. 小 結

(1) 新旧の土塁と2枚の旧表土

北土塁と南土塁の調査によって金田城の土塁は二重構造をなすことが判明した。前期土塁は鞍部東側の谷の地山となっている赤褐色土を用いており, 黄褐色の土盛りである後期土塁とは明確に分離できる。

また, この2つの土塁が時間差をもつのか, あるいは構造上一連のものなのか, すなわち土塁構築の作業工程の中で2段階に盛土したのかという問題があった。このことはG0・1区の巨石並列遺構によって明らかとなった。

巨石並列遺構は後期の土塁に完全に被覆されており, 地上からは認識できなかった。しかし, 検出した巨石並列遺構の表面の変色そして断面に残る旧表土の観察により, 巨石並列遺構は一時期地表に露出していたことがわかった。したがってこの2つの土塁は前後の時間差をもって構築されていることが判明した。

なお巨石並列遺構は北土塁のD1区でも検出されていた。断面図には2つの旧表土が記録されており, 「土塁（後期土塁－編者註）と石塁遺構（巨石並列遺構－編者註）の先後関係は, 築城当初は石塁状の遺構があり, その後土塁と門礎石の遺構が構築されたものと推定される。」とし, 巨石並列遺構が古く, 土塁（後期土塁）が新しいことが認識されていた。いまあらためて断面図を見直すと2つの旧表土はそれぞれ前期土塁と後期土塁のそれと判断できる。したがってこの二つの土塁が前後関係をもつことはD1区の調査成果からいえることである。

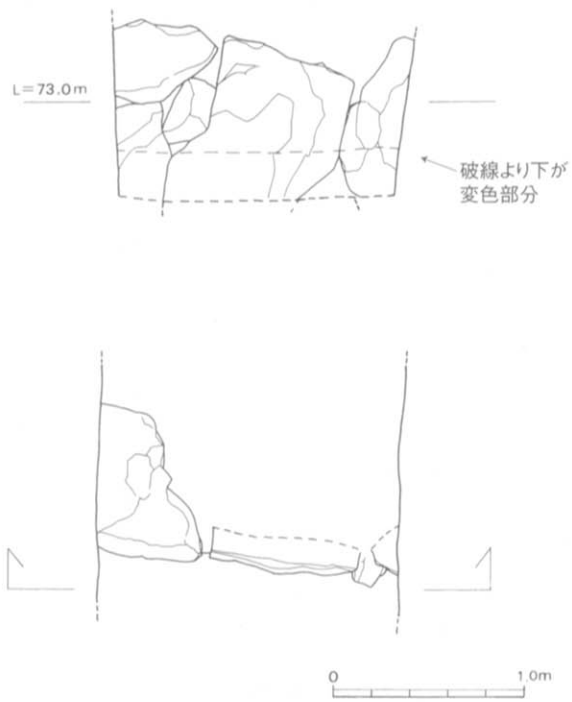
(2) 土塁の盛土あるいは版築について

北土塁では新旧土塁の頂が離れており, 両者の盛土の違いがきわだっていた。すなわち旧土塁では土塁頂部付近にわずかに古墳の墳丘の盛土に類似する版築構造をもっている。それより下位はいわゆる互層積土である。新土塁も互層積土であるが, 各土層の幅は新土塁のほうが広い。

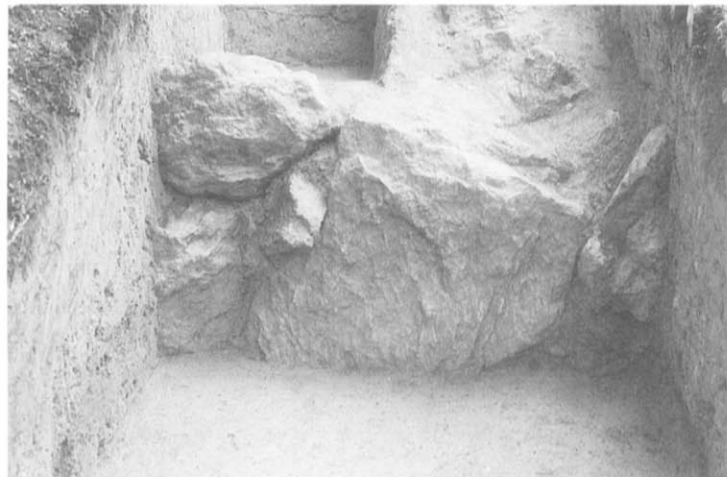
これに対して南土塁は土塁の頂が接近しており, わかりにくい旧土塁の盛土の状況はNE1区の土層により北土塁と同じような状況であろうと判断される。

(3) 土塁の規模

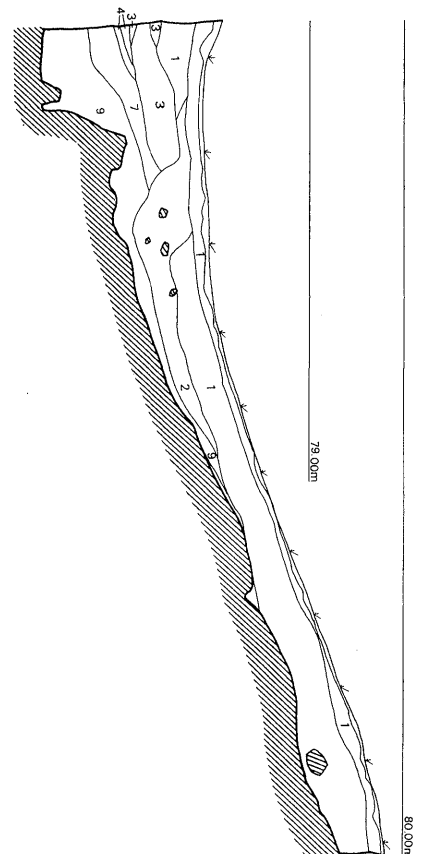
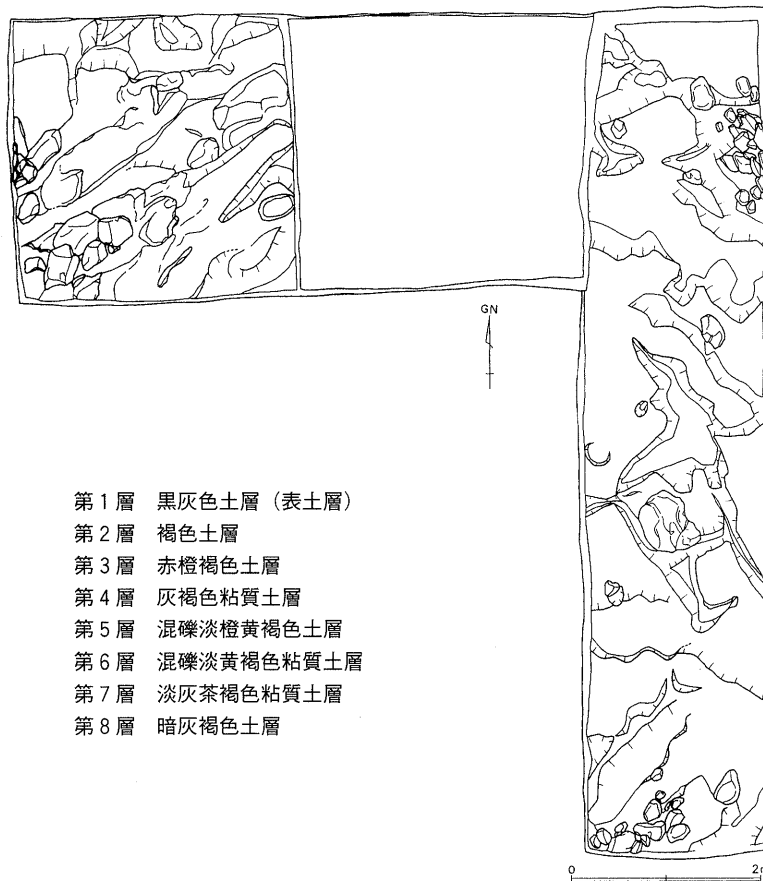
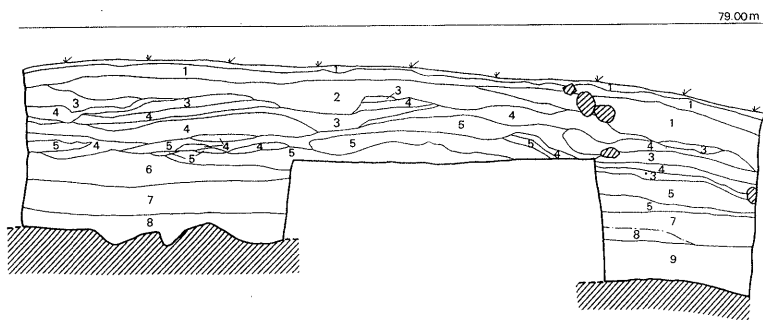
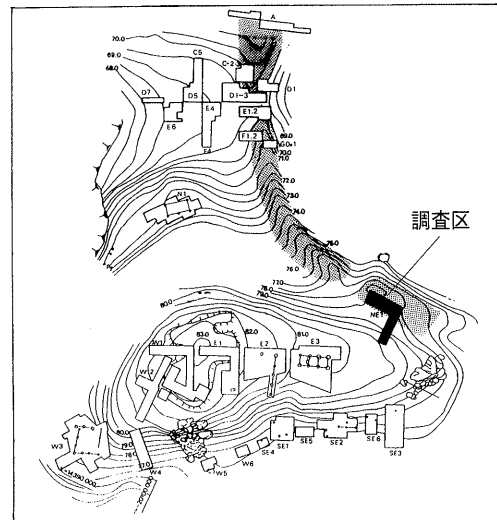
北土塁の規模はA区では前期土塁の長さ約5.5m（トレンチ中央最深部の集石から谷部の土留めの石までの長さ）, 高さ約1.6m（谷部の土留めの石から前期土塁の頂部までの高さ）, 後期土塁は幅約



第20図 南土塁の巨石並列遺構実測図 (S = 1 / 40)



図版10 南土塁の巨石並列遺構



- 第1層 黒灰色土層（表土層）
- 第2層 褐色土層
- 第3層 赤橙褐色土層
- 第4層 灰褐色粘質土層
- 第5層 混礫淡橙黄褐色土層
- 第6層 混礫淡黄褐色粘質土層
- 第7層 淡灰茶褐色粘質土層
- 第8層 暗灰褐色土層

第21図 NE1区の土層（1／80）

9.0m（鞍部の集石から谷部の土留めの石までの長さ）、高さ約2.3m（谷部の土留めの石から後期土塁の頂部まで）である。

D 1 区での土層図から判断すると前期土塁の幅は、土留めの並列した巨石の前面から石列 B の長側辺までと判断され約3.5mを測る。残存する高さは0.6mである。後期土塁は並列した巨石の前面から E 2・3 区の石垣（石列 A）までで7.8m。残存する高さは1.2mの規模である。

G 0.1 区での土層から判断すると、後期土塁の幅は巨石並列遺構から F 1・2 区の石積み遺構までの 5 m である。残存する高さは2.7mを測る。前期土塁の幅は土留めの施設が明らかでないため土塁幅は明確ではないが、残存する高さは2.0mである。

（4）石垣・土留め・石列・集石

土塁の周辺からは石垣状の遺構（C 2・3 区）や比高差をもつ石列や集石（D 1・2 区、E 1・2 区、F 1・2 区）、さらには神籠石のような巨石を並置した遺構（D 1 区、G 0・1 区）が検出された。これらの遺構は土塁に附属した施設と考えられる。

このうち巨石並列遺構は土塁の土留めないしは根固めの遺構と考えられる。巨石ではないが A 区で検出した土留め石も同様の施設と考えられる。

一方、比高差をもって検出された集石ないし石列であるが、それぞれの調査区で約 1 m の比高差をもって検出されている。その本来の姿は C 2・3 区の石垣遺構のようなものではなかったかと考えられる。C 2・3 区では長側辺をそろえた 3 段の石垣遺構が検出され、石垣の北半分では石の崩落が見られないことから、石積みは当初から 3 段までであったと推測している。石垣の機能は土塁の土留めないしは根固めと考えられる。

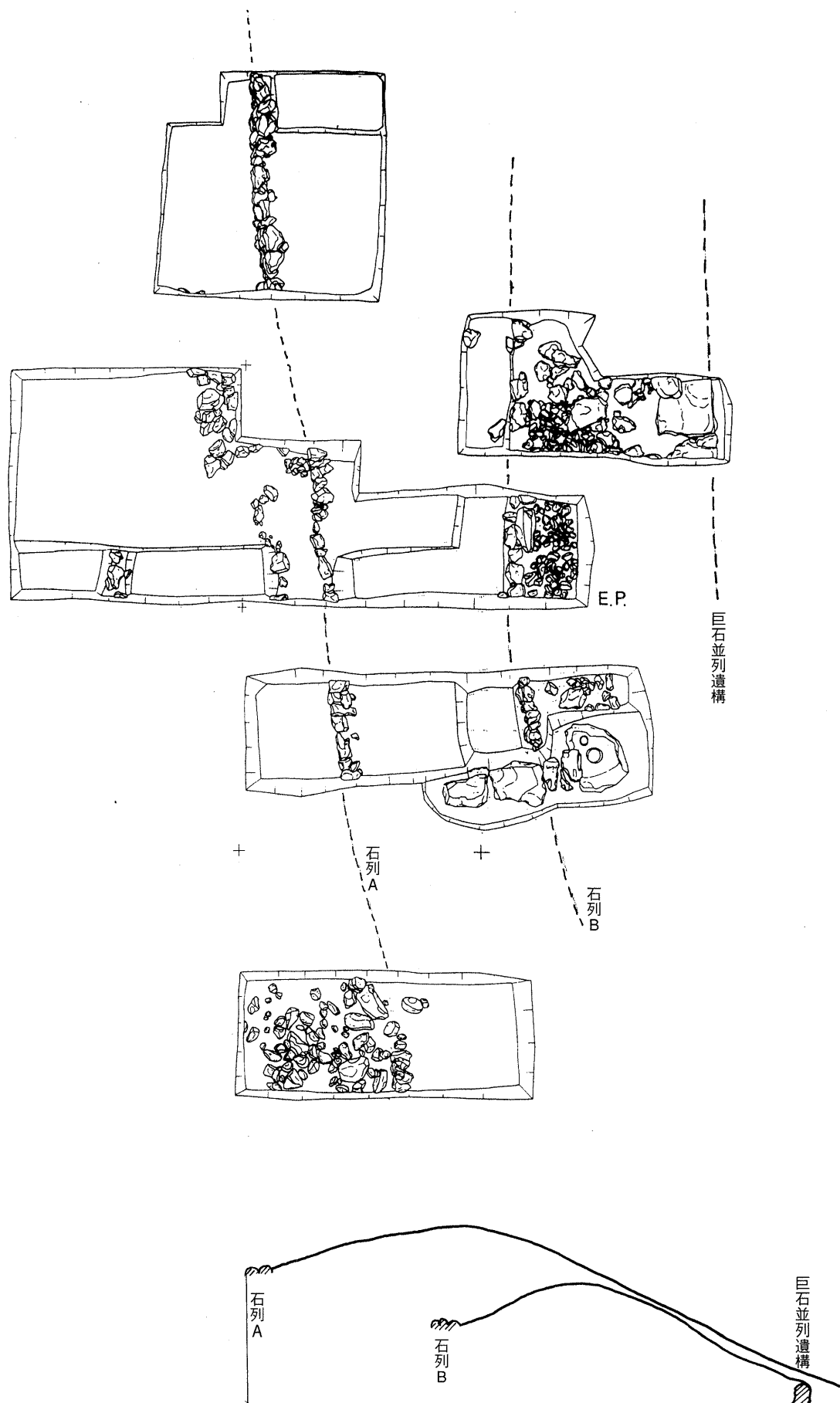
また E 1 区や D 1 区でみられる石列が長側辺を並べるようにしていることや、F 1・2 区では 2 段目までの石積みが確認されたことなどから、これらの石列遺構も本来は C 2・3 区のような石垣ないしは石積み状の施設であったと考えられる。そうすると A 区、D 3 区、F 1・2 区で検出された集石遺構は、これらの石垣ないしは石積みが崩落して散在した状況と判断できる。ただし N E 1 区で検出されなかったことは疑問である。

（5）金田城の土塁について（第22図）

以上のような鞍部や土塁の各調査区からの知見を反映させて金田城の土塁の構造を復元したのが第 22 図である。

金田城の土塁は新旧 2 時期の土塁からなりたっており、そのうち旧土塁は谷部に向かって巨石を立て並べて、土塁の根固めとしている（巨石並列遺構）。巨石の表面は地表に露出させていたものとみられる。旧土塁の盛土は谷を掘削することで得られた土（赤褐色土）を用いている。鞍部側の土塁の裾は数段（3 段か？）の石垣（石列 B）で土留めをおこなっている。

新土塁は旧土塁を被覆する形で盛土されている。使用した土は谷部の土ではなく、ビングシ山ないし鞍部の土と考えられる（黄褐色土）。谷部の土留めは北土塁では巨石並列遺構をそのまま使用し、鞍部の土塁裾の土留めのために新たに 3 段の石垣状遺構（石列 A）を築いたと考えられる。



第22図 金田城の土塁概念図

第5節 ビングシ山山頂部の調査

1. ビングシ山頂部の現状

ビングシ山の頂上付近の標高は83mを測る。現場に立つと黒瀬湾が一望でき、黒瀬地区の集落も視界におさめることができる。眺望はとみにすぐれ、見張りや物見には最適な場所で、南斜面は日当たりもよく、好天の日は暖かい。

また山頂部は当初予想していた以上に傾斜が緩やかで、尾根上には狭いながらも平坦な場所があった。伐採してみると、頂部から階段状に平地が整地されているようで、それぞれの平地には60cm×50cm程の角のとれた平石が1個ずつ露出していた。城山一体でみられるものとは材質等全く異なるこれらの平石は、何らかの遺構と係わりがあるものと考え、調査を進めていくことにした。

2. 調 査

(1) 調査区の設定

平成6年度から調査は開始した。調査はまず山頂から東北東に延びる尾根上に10m間隔で基準杭を打ち、9m×2mのトレンチを3ヶ所設定した。トレンチはそれぞれ頂上から順にE1区・E2区・E3区とした。各トレンチは遺構・遺物の出土状況に応じて、後に適宜南側へ拡張した。

(2) 調査状況

発掘は平坦地でかつ平石のあるE2区から着手した。いずれも表土から30～40cmで地山および岩盤に達したが、両区の平石周辺で須恵器が僅かに表採されたほかは、遺構・遺物は確認できなかった。

そこで南側に拡張して精査を行ったところ、E3区で一辺が約60cm四方の方形ピット8個を確認した。ピットはいずれも岩盤を掘り込んでつくられており、深さは60～70cm。各ピットの間隔は190～200cmを測る。北側と東側にも調査区を拡張し、サブトレンチも設定してみたが、これ以外のピットを確認することはできなかった。結果的に、1間×3間の掘立柱建物跡であることが判明した。

また方形ピットが一つ切り合った状態で確認されたが、先後関係のほかは建物跡との直接的な係わりを見いだせなかった。平石についても下部には根石等がみられず、関連性は不明である。ピット内からは遺物の出土はなかったが、E3区の北西部で須恵器片・土師器片が数点出土している。須恵器は蓋の特徴から概ね7世紀後半頃と考えられるものであった。

E2区も南側に調査区を拡張し精査したところ、60cm×80cmの長方形ピット1つと、その南側に60cm程度の方角ピット2つを確認できた。こちらも岩盤を掘込むかたちでつくられているが、ピットの平面形や堀方はE3区に比べると雑な感がある。深さは40～70cmで、ピットの間隔は2m程である。ピットは南北方向のみで東西方向に展開する様相はなく、建物跡というよりは柵列のようなものと判断された。E3の掘立柱建物跡とはほぼ直交する関係にある。

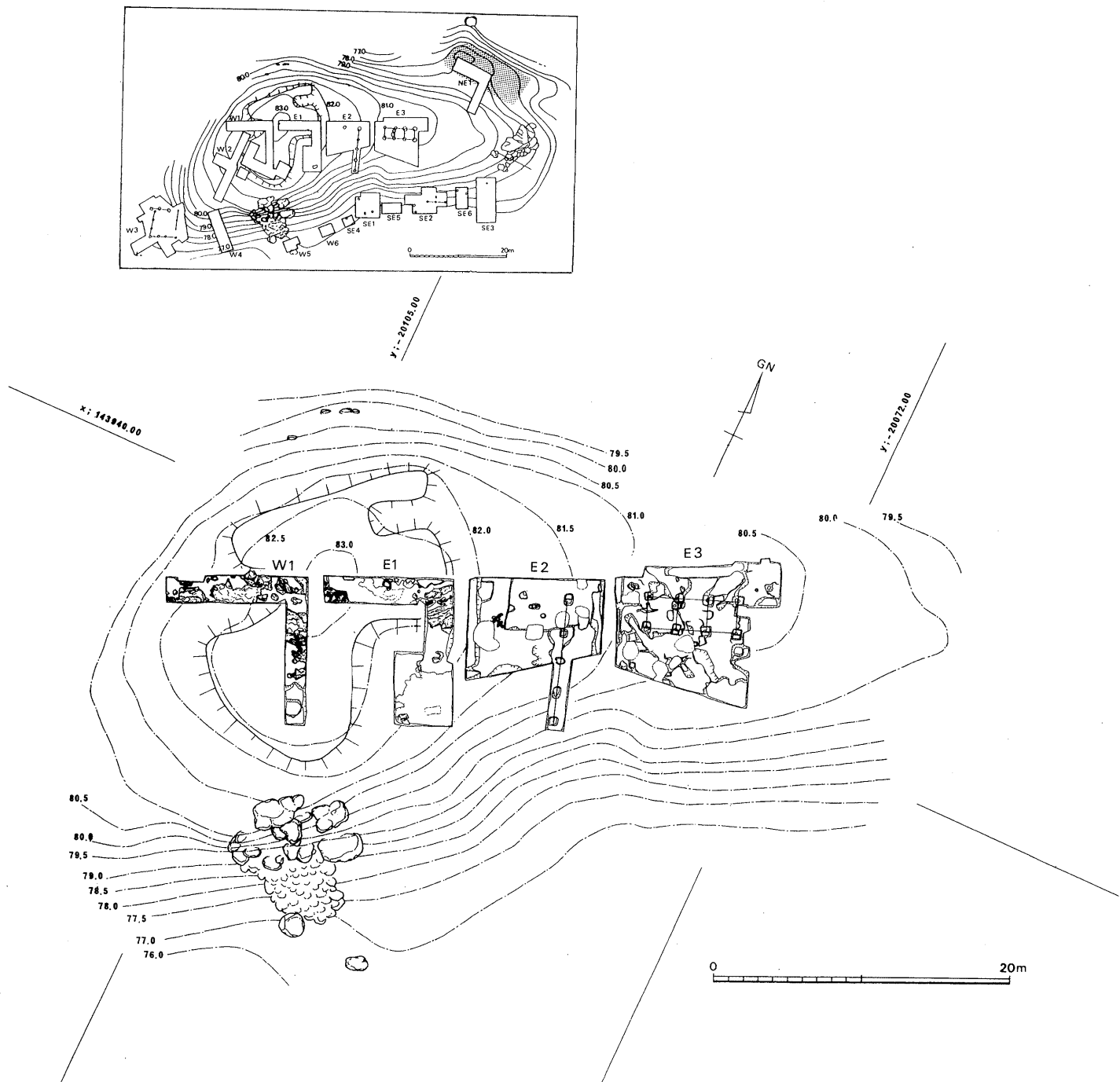
なお、平成9年の補完調査でさらに南で2個のピットを検出している。

また、これらの西側には20～40cmの円形ピットがあるが、方形ピットとの係わりは不明である。E

2区では平石のほか、木の根に絡まって集石がみつまっている。

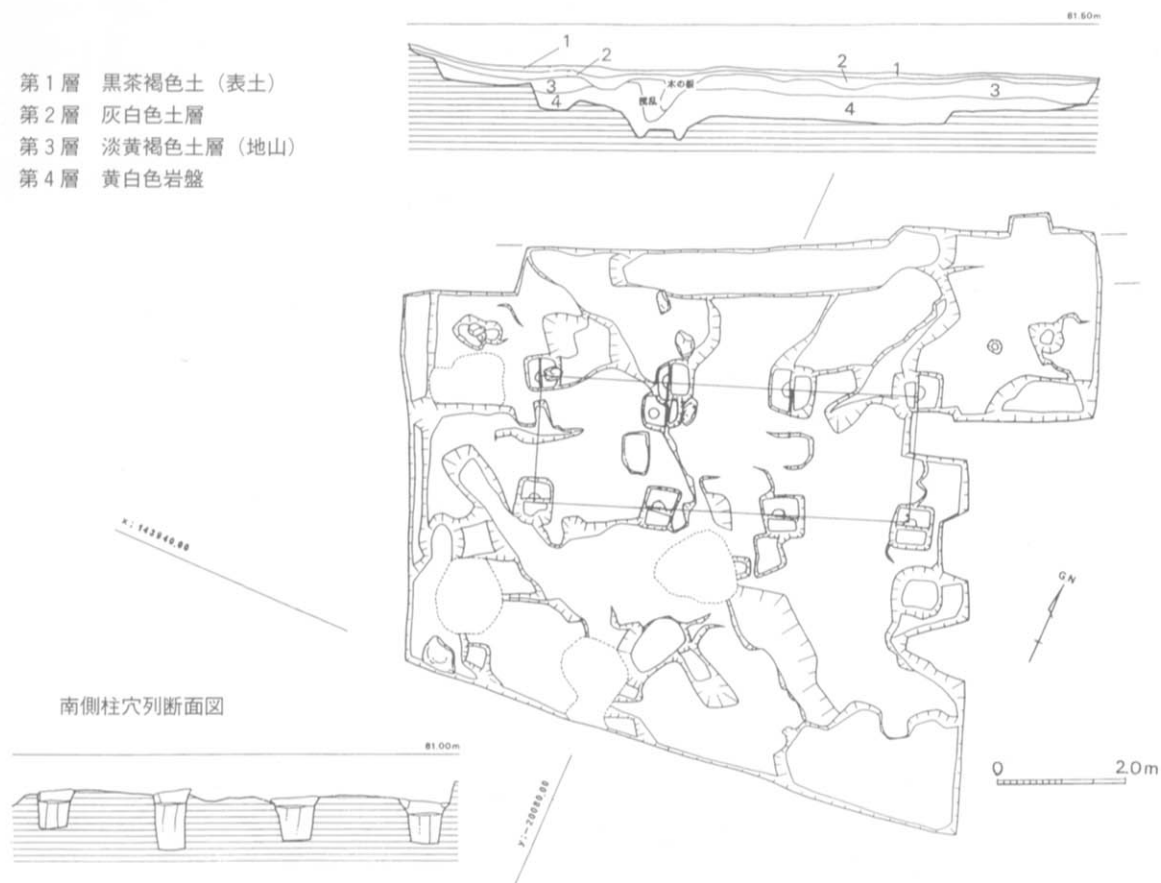
ビングシ山頂部周辺のこんもりとした部分をE1区とした。当初設定したトレンチでは表土下30～40cmで岩盤となり、削平を受けたような形跡は全く見られない。岩盤の一部は表面に露頭しており、土が岩盤上にうすく堆積しているような状態である。炭も2箇所を確認されたが、遺構とは判断できなかった。遺物も出土していない。

逆L字状に南側へトレンチを延ばすと、5m四方のややフラットな場所があり、拡張して精査を行った。



第23図 ビングシ山頂部調査区設定図 (S = 1 / 400)

- 第1層 黑茶褐色土（表土）
- 第2層 灰白色土層
- 第3層 淡黄褐色土層（地山）
- 第4層 黄白色岩盤



第24図 E3区掘立柱建物跡実測図 (S=1/120)



図版11 E3区掘立柱建物跡

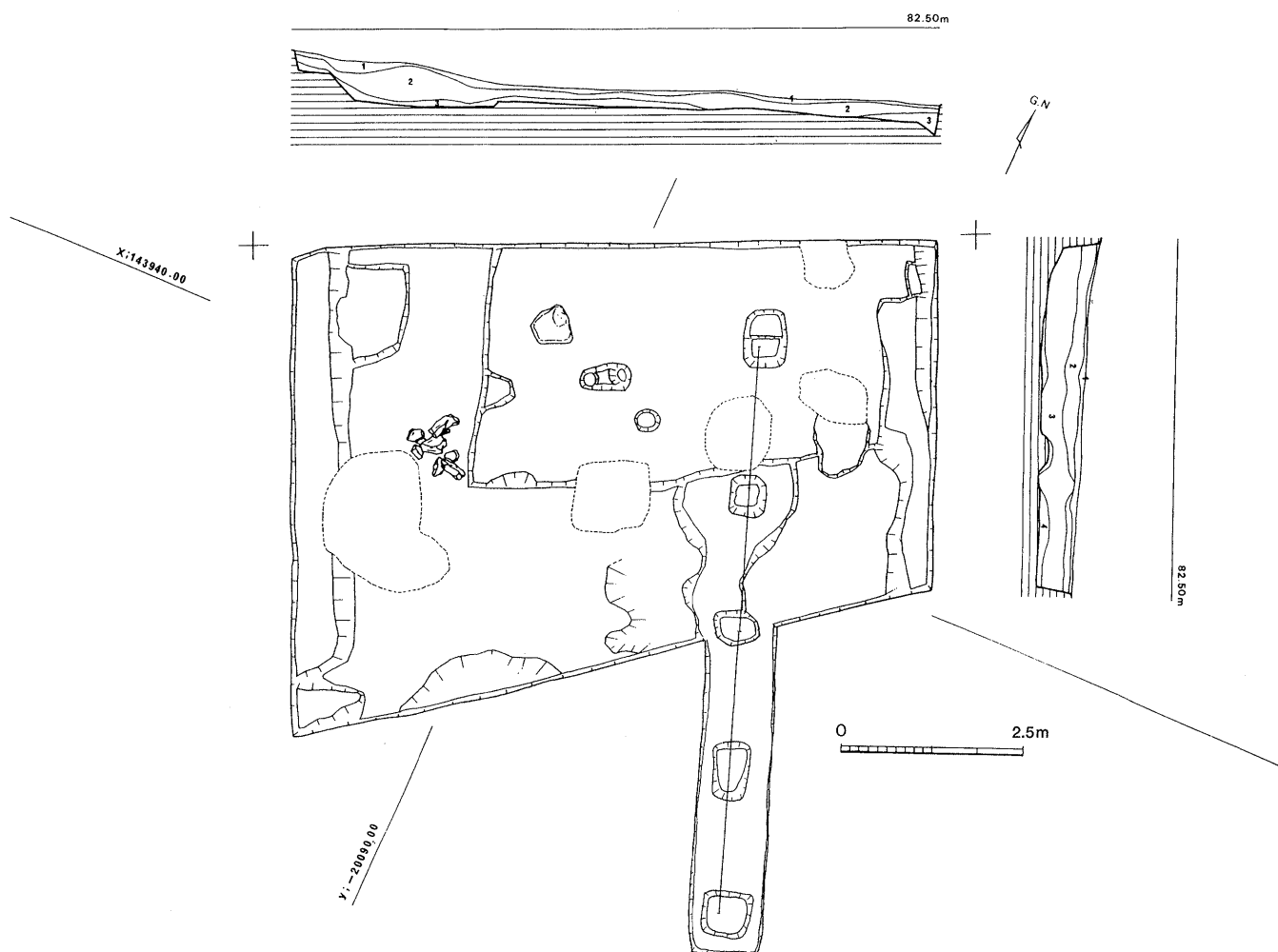
地山まで掘り下げると、幅30～40cm、長さ1.5mの範囲で焼土と炭が確認された。北側のトレンチで見られたような岩盤は周囲にはなく、堀削されたかのようなのである。遺物が表土下からの出土で、直接焼土面と結びつくものとは考え難い。

W1区もE1区同様、こんもりとしたビングシ山頂上部の西半分に設定した。地表面にはすでに岩盤が露出しており、20～30cm掘り下げても岩盤のみで人為的な痕跡は全くうかがえない。逆L字状に南側へトレンチを延ばしてみたが状況は同じであった。遺物は須恵器片が表土より若干出土したにとどまる。ビングシ山の頂上部は露出した岩盤そのままで、一部は南北に崩落しているようである。E1区の南側を除いては、掘削や削平して利用するようなことはなかったように思われる。

前述したように、E2区・E3区ともに調査区の西端で岩盤が掘削され段がついた格好になっている。特にE2区では段が明瞭である。調査区内も南半分は岩盤が凹凸を残しているのに対して、北半分では岩盤は平坦に近い。意識的に平場をつくりだしているような感があることは指摘しておきたい。

(3) 遺構

①掘立柱建物跡



第25図 E2区柵列実測図 (S=1/100)

掘立柱建物跡は1間×3間の1棟で、標高は81～80.5m付近に建てられている。柱穴は平面形が約60cm四方の正方形をなし、全て岩盤を掘込んでいる。残存している深さは60～70cmのものが大半である。柱穴の間隔は190～200cmでほぼ統一されている。建物の面積は12m²である。

②柵列

平成9年度にビングシ山山頂部（E2区）の建物跡横の柱穴列に加えて新たに2個の柱穴を確認した。この柱穴列は山頂部を区画するように南北1列に並んでおり、長さは8mである。遺構の性格は柵列と考えられ、掘立柱建物跡と周囲を画するものと考えられる。柱穴の掘方は方形で一辺が0.5m、深さは0.7mである。

（4）遺物

この建物跡に伴う遺物は特に出土していないが、調査区全体では7世紀後半代の須恵器を含む約40～50点の遺物が出土している。図示できるものはなかった。

3. 小 結

ビングシ山はハ字形に尾根が延びる標高83mの山で、頂上付近は鞍部や黒瀬浦を見下ろせる格好の場所である。ここに建てられた掘立柱建物もこの立地と無関係ではないであろう。

山頂部分は岩盤が露出し、凹凸が著しく、何ら遺構を確認し得なかった。しかしながら、東北東の緩やかな尾根上には岩盤を削平し、意識的に整地したと思われるような部分が2箇所で見られた。

ビングシ山にこのような施設があることは、ビングシ門や土塁を確認できた鞍部と相まって、金田城跡の中核部としての役割を担っていたと考えられるだろう。

第6節 ビングシ山南斜面の調査

1. ビングシ南斜面の現状

標高77m～80mの場所にある。ビングシ山頂との比高差は約6mほどである。山頂より幅8mほどの斜面があり、その前面に犬走り状の幅6mの平場が斜面に沿って存在する。平場の先には石罫が走る。この平場は南向きで、日当たりもよいため、なんらかの生活遺構がのこされている可能性があるともて調査に入った。平場の周囲には石英斑岩の巨石がころがっていたり、岩盤が露出しているところもある。

2. 調 査

平成7年度にSE1～3区の調査を実施し、平成9年度にはW4～6区およびSE4～6区の調査を実施した。

(1) SE1区 (第26図)

SE2区の西側に斜面の裾にかけて5m四方のトレンチを設定し、土層の観察を試みた。北東隅を除き、地山・岩盤まで掘り下げたが、地表面に比べ傾斜は緩やかであった。岩盤にはピット3個が掘り込まれており、南の2つは径約40cm、北の1つは径20～30cmを測る。

北東隅では炭が2mの範囲に一面に拡がり、10cmほどの厚さで堆積していた。焼土は見られなかったことから、炭だけをこの場所に捨てたものと推測される。

遺物は土師器や7世紀後半代の須恵器が多数出土したほか、新羅系陶質土器も出土している。変わったところでは、滑石を加工した温石とみられる製品も数個まとまって出土した。

(2) SE2区 (第27図・図版12)

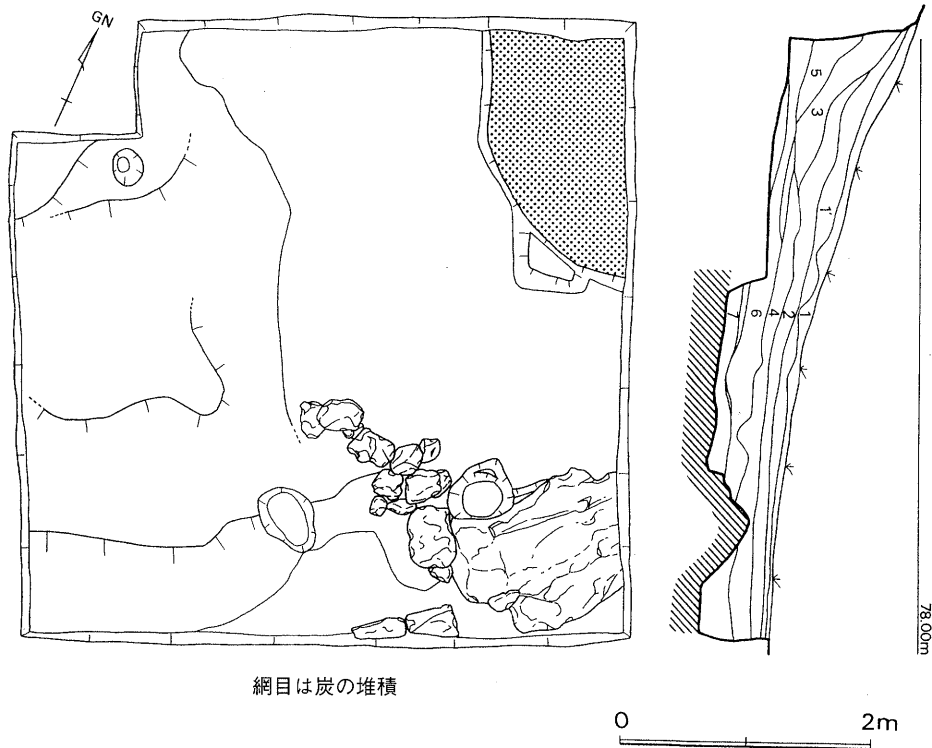
ビングシ山南斜面に最初に設定したトレンチである。斜面の中位程で岩盤に掘り込まれたピットを2個検出した。ピットはいずれも径30～40cmで、深さは20～30cmを測る。東側に拡張したところ、新たに2個が見つかり、3個のピットが77～78mの等高線に沿って160～180cm間隔で並んでいる状況がうかがえた。西側にもトレンチをのばしてみたが、前述のピットにつながるものは確認できなかった。

トレンチの南側では岩盤を削って平坦に整形した部分があった。ここでは1.5mの範囲に焼土と炭の拡がりが見られ、火を炊いた形跡をうかがえた。土層断面でみると焼土が10～20cm、炭が5～10cmの厚さで堆積していた。これらの周囲には径40cmほどのピット2個も掘り込まれてあった。遺物は7世紀後半代の須恵器が少量出土したにすぎない。

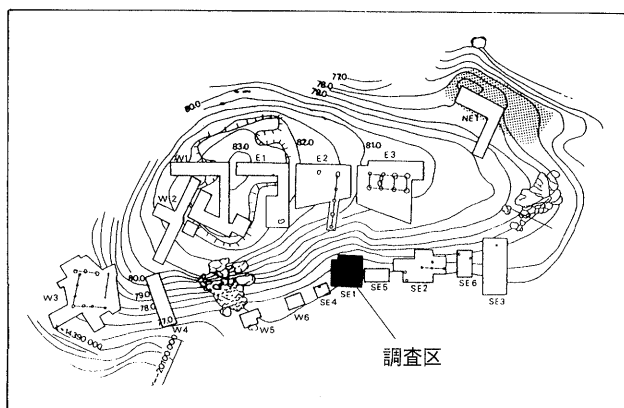
(3) SE3区

ビングシ山の南東斜面に設定した4m×9mのトレンチである。傾斜がきつく、岩盤までは比較的浅かった。ピットは径20cmのものが北側の岩盤に1個だけ掘り込まれていた。他のピットや遺構との関わりは不明である。

トレンチ中央部で木根に絡まった板状石が2枚みられたが、遺構とは考え難い。南では地表に岩塊



網目は炭の堆積



- 第1層 黒茶色土層（表土層）
- 第1'層 灰白色土層
- 第2層 暗灰褐色土層
- 第3層 灰白褐色土層
- 第4層 淡灰褐色土層
- 第5層 淡橙褐色土層
- 第6層 混礫淡橙褐色土層
- 第7層 淡橙白色土層（地山）

第26図 SE1区実測図（S=1/60）

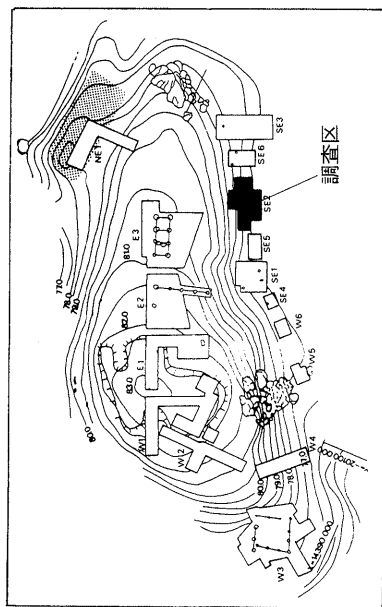
が露出しており、人為的な痕跡は全くうかがえなかった。遺物は北東隅から時期不明の須恵器の小片が少量出土している程度である。

（4）W4区

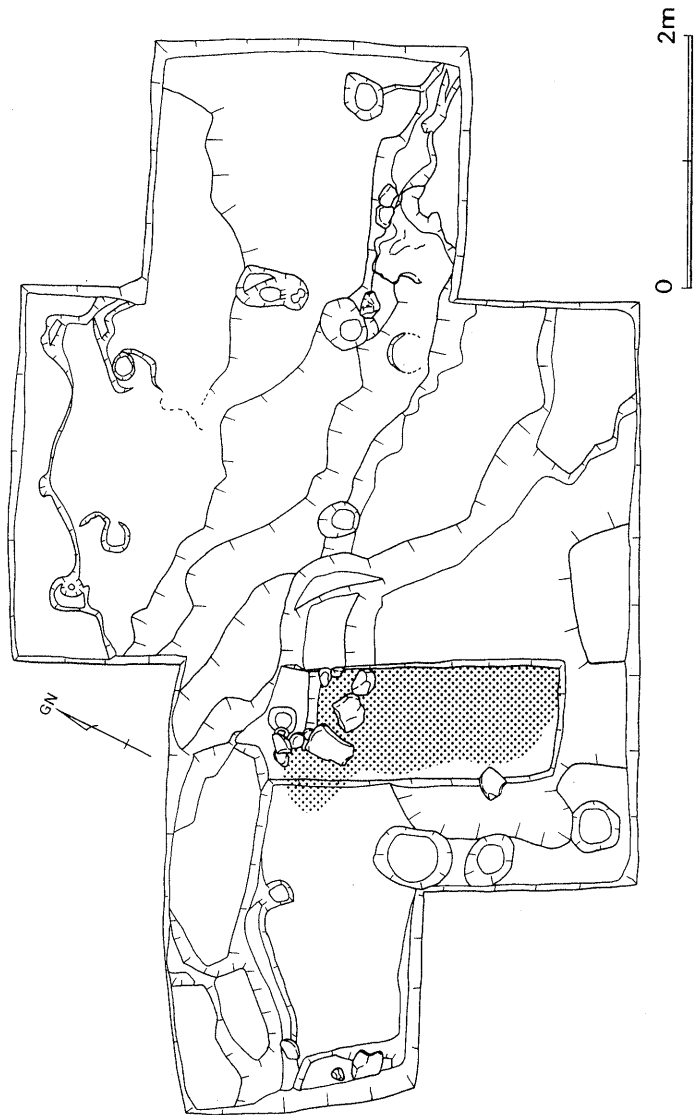
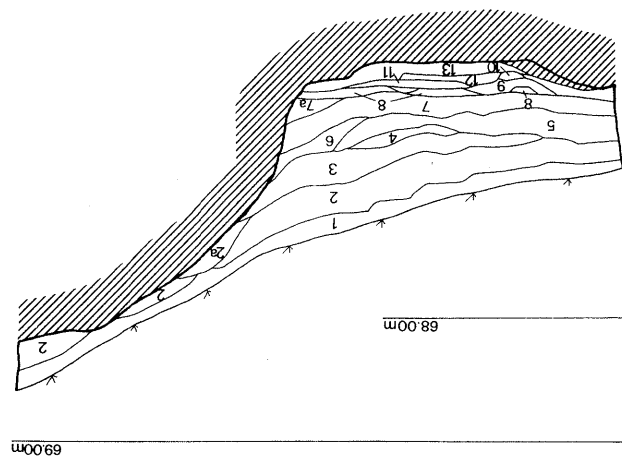
地山加工の痕跡や柱穴は存在しない。中央部で一旦、小テラス状をなすが、人為的なものではなく、自然のものと考えられる。東側の地山が落ち込んでいるので、付近は谷状の地形をなしていたと思われる。その上に混礫黄褐色粘質土層（第5層）がのっている。5層上面には、わずかに旧地表面の黒色土が観察される。

（5）W5区

西側に向かって若干傾斜しながら落ちていく。西側セクションの観察からしてW4区とW5区の間は浅い窪地が存在していたもののようである。遺構は北西隅に2基のピットを検出したのみである。



- | | | | |
|--------|-------------|------|----------|
| 第1層 | 黒茶色土層 (表土層) | 第8層 | 第5層に同じ |
| 第2層 | 暗灰茶色土層 | 第9層 | 赤褐色土層 |
| 第2 a 層 | 茶褐色土層 | 第10層 | 暗赤褐色土層 |
| 第3層 | 淡灰褐色粘質土層 | 第11層 | 第5層に同じ |
| 第4層 | 淡黄褐色粘質土層 | 第12層 | 淡橙褐色粘質土層 |
| 第5層 | 混礫黄褐色粘質土層 | 第13層 | 黄橙褐色粘質土層 |
| 第6層 | 黄褐色粘質土層 | | |
| 第7層 | 混礫淡橙褐色粘質土層 | | |



第27図 S E 2区実測図 (S=1/60) 網目は炭と焼土の堆積

(6) W6区 (図版13)

北から南へ若干の傾斜がある。東側で炉跡を検出した (第28図)。石囲い炉で、直径40cm、深さ5cmほどの炉穴を掘り、周囲は幅30cmほどの角礫で囲んでいる。石囲いを含めた直径は1.0mほどである。平面形は「コ」の字形を呈する。炉跡の南側の礫の表面は被熱し、赤褐色に変色している。炉穴内には薄い炭の層が互層となって堆積していた。

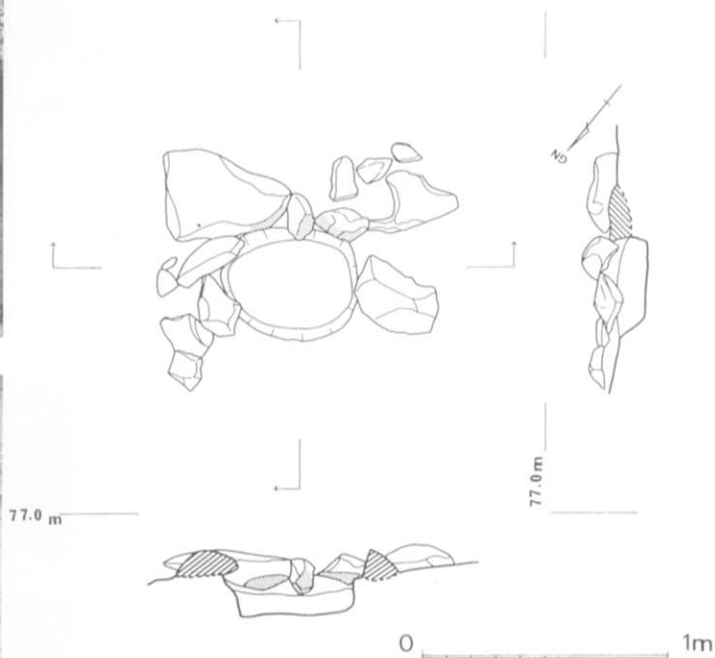


図版12 SE 2区

なお、炉跡付近からは温石が1点出土した。

その他に北西隅でピット1基を検出した。ピット内は炭が混入した土で充填されており、炭の層が2～3枚残存していた。石塊は存在しないが、炉跡と考えられる。

またトレンチ中央部に直径20cmのピットを検出した。



図版13 SE 4区と炉跡 (第28図 S = 1 / 30) 網目は被熱部分

(7) S E 4 区

遺構はピットを1基確認したのみである。

(8) S E 5 区

地山加工や柱穴は存在しない。北から南へ向かって緩やかに傾斜し、南東隅からは急激に傾斜するようである。北東隅からは薄い炭の層がみられる。

(9) S E 6 区

過去のS E 2, S E 3区で検出されたピットに関連する遺構を検出するために設定した調査区であるが、北部で2基のピットを検出したのみである。

3. 遺 物 (第29～30図 1～19)

(1) 陶質土器 (6・8)

6・8は半島系の陶質土器としたものである。6は壺の底部で貼り付けの高台をもち、S E 4区の第2層から出土した。底部付近は完存する。高台の接地部は高台内に向かって内傾している。高台径は15.0cm, 高台高は1.0cmである。体部外面および高台外面は回転ナデ, 高台内はヘラナデおよびナデ調整が施される。体部内面はナデ, 底部内面は静止ナデで、一部ナデ消されている。色調は灰白色で断面はアズキ色を呈す。胎土には少量の白色砂が混入するくらいで精緻である。焼成はよい。

8は壺形土器の肩部から胴部片である。S E 1区より出土した。残存率は全体の約1/4である。偏球形の胴部をもち、肩部に印花文を施す。復元胴部最大径は24.8cmである。胴部上半はナデ, 下半は回転ナデである。胴部内面も回転ナデ調整が施される。色調は灰白色で、断面はアズキ色である。胎土は緻密かつ精良で、焼成も良好である。

(2) 須恵器

1は宝珠つまみをもつ杯蓋でW 6区より出土した。ほぼ完形で、口径13.8cm, 器高3.4cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削りののちにカキメ調整が施されている。かえりの内外面はナデ調整である。天井部内面は静止ナデが施される。色調は灰白色で、胎土には白色砂を多く含む。全体に雑なつくりであるが焼成は良い。

2は擬宝珠つまみ部分で、S E 1区より出土した。つまみの頂部は中央がやや窪むが扁平で、直径3.2cmである。全体はナデ調整が施されている。色調は明青灰色である。胎土には若干の砂粒を含むが焼成はよい。

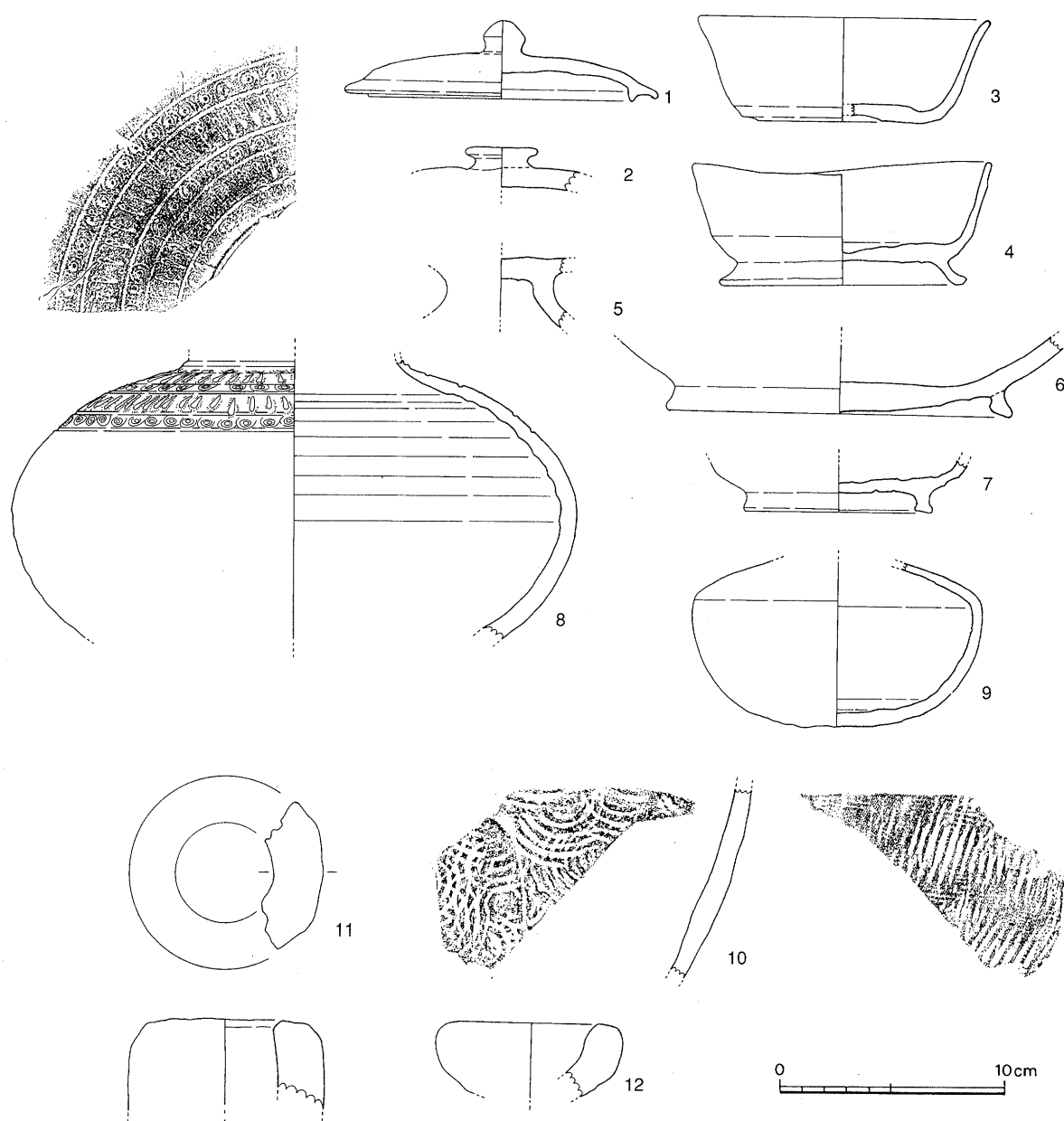
3は高台をもたない杯身で、S E 1区より出土した。全体の1/2が残存する。復元口径12.9cm, 器高4.5cmである。体部外面は回転ナデ, 底部付近は回転ヘラ削りである。体部内面は回転ナデ, 底部内面は静止ナデ調整である。色調は明青灰色で、胎土に若干の白色砂を含むが緻密である。焼成もよく全体にいい作りをしている。

4は高台をもつ杯身で、S E 1区より出土した。全体の1/2が残存した。口径3.1cm, 器高4.0cm, 高台径10.9cmを測る。体部外面上半は回転ナデ, 体部外面下半は回転ヘラ削りののちナデ。高台部分

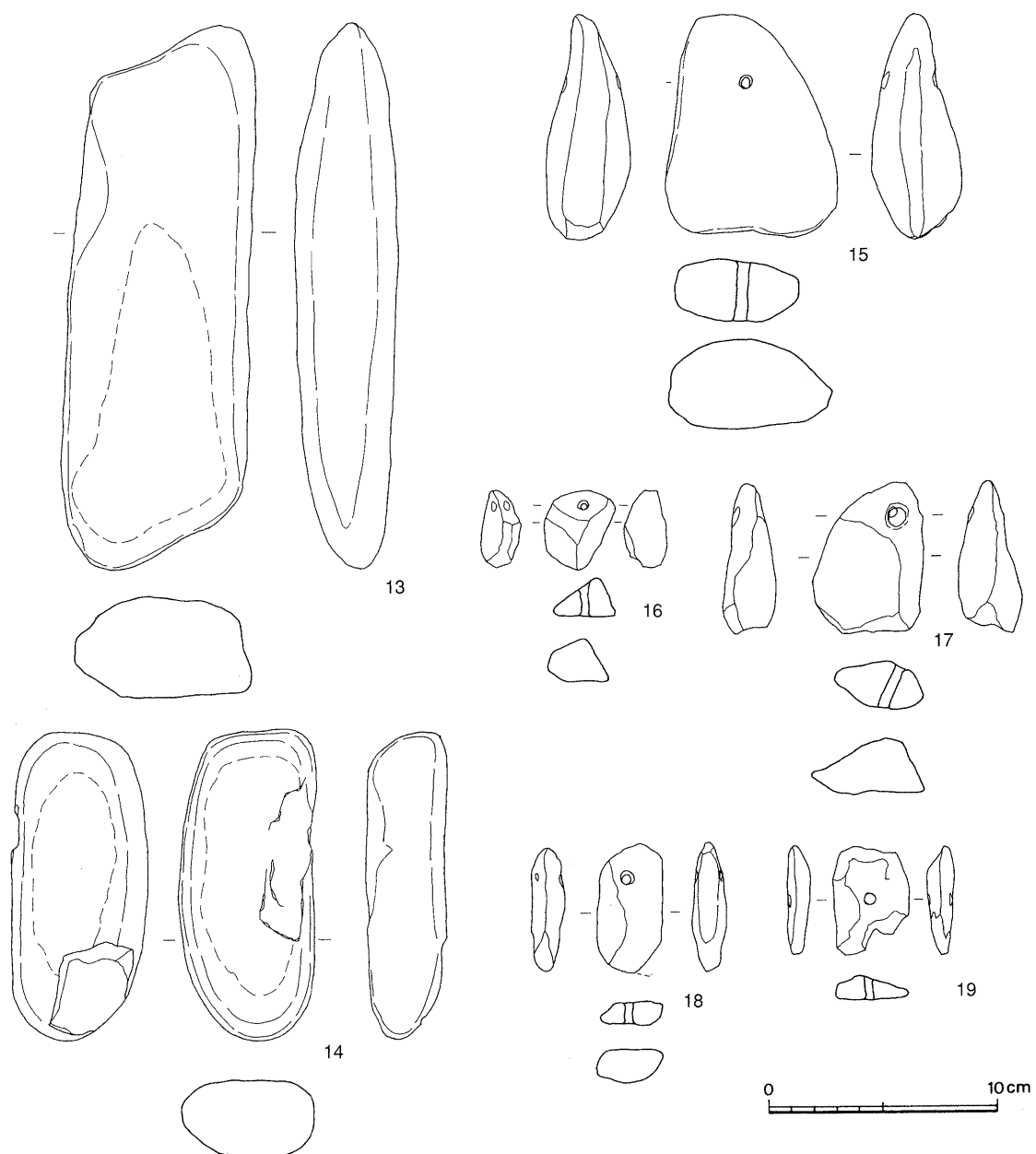
は回転ナデ調整である。体部および底部内面は回転ナデ。高台内面は回転ヘラナデである。色調は暗青灰色である。胎土に小白色石を含むが焼成は良好である。器形に焼成時のひずみが生じている。

5は台付杯ないし鉢の脚部と思われ、SE2区より出土した。脚外面は回転ナデ，内面はナデで，杯（鉢）との接着面は静止ヘラ削りである。杯（鉢）底部は静止ナデ調整である。色調は灰色で，胎土には若干の砂粒を含む。焼成は良好である。

7は壺の底部で，SE1区より出土した。高台付近は完存する。高台の接地部は高台内に向かって内傾する。高台径8.3cm，高台高0.9cmを測る。体部外面及び高台外面は回転ナデ，高台内は回転ヘラ切り離しの跡が残る。底部内面は粘土紐の巻き上げ痕が残る。調整は回転ナデののちに静止ナデである。色調は灰白色，胎土に小白色石を含むが焼成は良好である。



第29図 ビングシ山南斜面出土遺物①（S=1/3）



第30図 ビングシ山南斜面出土遺物② (S=1/3)

9は壺の胴部で、SE1区より出土した。体部の1/2ほどが残存する。復元胴部最大径は12.8cmである。体部外面は丁寧なナデ調整で、底部付近は静止ナデである。体部内面は回転ナデ、底部内面は静止ナデである。色調は体部下半が灰色で、それ以外は灰白色である。胎土は精選されており、丁寧なつくりで、焼成もよい。

10は甕の胴部片で、SE2区で出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキである。色調は明灰色で、焼成はあまく軟質である。

(3) 羽口

11はふいごの羽口で、SE2区の表土より出土した。復元径は8.6cm、内径は4.4cmである。外面は

黒色に変色し、内面も被熱して赤褐色に変色している。

(4) るつば

12はるつば片で、S E 2 より出土した。全体の1/3ほどが残存するが底部は失われている。復元口径は8.3cmである。内面は赤紫色に変色している。

(5) 砥石

13, 14ともにS E 1 より出土している。14は表土出土である。13は最大長23.2cm, 最大幅7.9cm, 厚さ4.5cm, 重さ1160gである。片面を研ぎ面としている。14は最大長23.2cm, 最大幅7.9cm, 厚さ4.5cm, 重さ390gである。両面を研ぎ面としている。いずれも石材は対州層の頁岩である。

(6) 温石

いずれも滑石製で(註1), ひとつの孔を両側からうがっている。15はS E 1 区表土出土で, 最大長9.4cm, 最大幅7.5cm, 厚さ4.0cm, 重さ334gである。以下同じ順序で記述する。16もS E 1 区表土出土で, 3.3cm, 2.8cm, 1.7cm, 25g。17もS E 1 区表土出土で, 6.5cm, 4.5cm, 2.7cm, 88g。18もS E 1 区表土出土で, 3.3cm, 2.8cm, 1.7cm, 25g。19はS E 4 区出土で, 4.5cm, 3.3cm, 1.2cm, 24gである。

(7) 鉄滓

図示していないがS E 2 区より鉄滓が出土している。不整形で長さ4cmほどである。色は黒色。土製の壁体に融着しており、壁体を含めた重さは32gである。

4. 小 結

ビングシ山の補完調査では、南斜面よりピット10個と炭が一面に広がる部分が2か所で見られた。S E 2 区の3個のピットは一行に並んでいたが、どのような遺構の一部になるか判断できなかった。その他のピットについても関連性は不明である。

S E 1 区とS E 2 区は、わりと平坦に整形された場所で、炭が1～2mの範囲に、厚さ10cmほど堆積していた状況がうかがえた。特にS E 2 区では明らかに火を焚いたとみられる焼土もあり、意識的に何らかの行為を行っていたことが考えられる。この点で注目されるのはS E 2 区で出土したるつばやふいごの羽口や鉄滓である。小鍛冶などの作業がビングシ山頂部か南斜面でおこなわれていた可能性を示唆するものである。

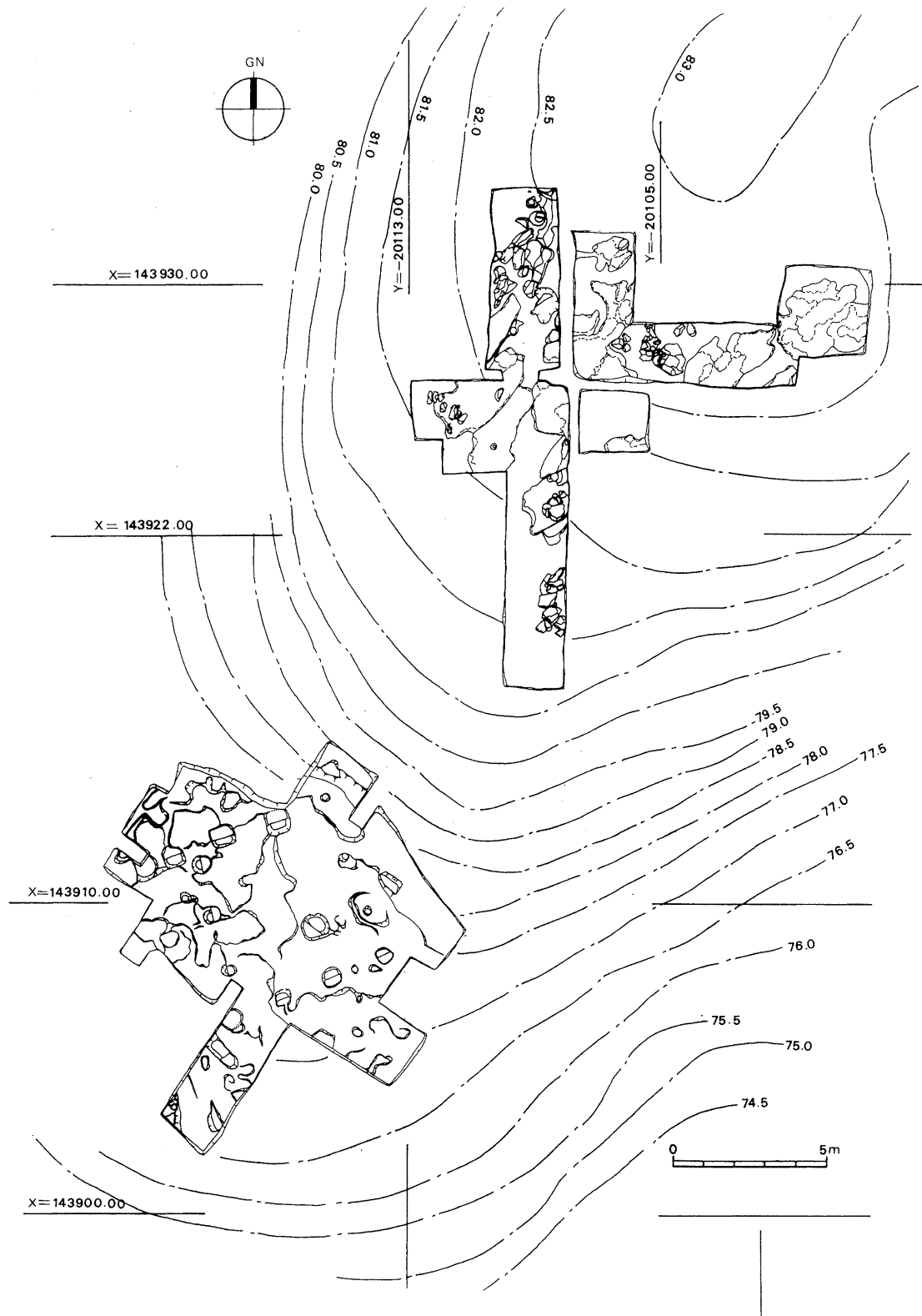
【註】

註1 本県の西彼杵半島および長崎半島は滑石の産出地として知られている。地元の大瀬戸町教育委員会の荒木伸也氏によると、金田城出土の温石の滑石は、表面観察の結果だけであるが、色調や質感などで西彼半島の滑石とは異なるとのことである。ご教示に感謝する。

第7節 南西斜面の調査

1. 南西斜面の現状

平成8年度にビングシ山の南西斜面を調査した。南西斜面にはテラス状の平地が存在し、なんらかの遺構の存在が予想されていたところである。



第31図 W2・3区地形測量図 (S=1/200)

2. W2区の調査

(1) 調査の概要

W2区の土層は基本的には後述するW3区と同様である。しかしW3区で旧地表と認識した第3層は存在しない。遺構としては南北に連なるピット列と点在するピットを確認した。しかし、建物跡のようなプランをなすことはない。とくに調査区の東側は攪乱されており、遺構は削平されたようである。このような調査結果はW2区に隣接する平成6年度に実施されたW1区の調査結果とも一致する。

3. W3区の調査 (第32図)

(1) 調査の概要

調査坑は東西11m、南北12mのL字形のトレンチを2本組み合わせる形で設定した。後述するように柱穴列が出土したため、調査坑を拡張し、最終的に調査は平坦部のほぼ全面に及んだ。

(2) 土層 (第33図)

W3区の基本層位は第1層が表土で、表土中にも遺物を含んでいる。第2層は対州層を母岩とする白黄色の土で、粘り気がなくバサバサとしている。客土のようでもあり、整地層のようでもある。いずれにしても一気に堆積したような感をいだかせる。砂岩の角礫をあまり含まない2a層と、逆に砂岩の角礫を多く含む2b層、その中間の土質をなす2c層に分かれる。いずれの層も遺物を含む。第3層は、有機物により汚された土層である。土器や炭化物、被熱した礫が出土した。生活面と判断され、旧地表と認識した。この第3層は主に調査区の北側に分布し、調査区の中央部を含めて南には残存しない。

第4層は地山である第6層の上に堆積する土層で、遺物を含まない層である。整地層と判断した。4a層は赤褐色土層で、白黄色を呈し、3～7mmの角礫を含む土層である。第4c層は明黄褐色土層で地山の土と類似する。小さな炭化物を含むものの、遺物は含まない。

第5層はピット内の覆土である。本遺跡の地山である第6層は、地山が風化した6a層と、地山上に堆積する山土である6b層からなる。第7層は黄白色の岩盤で、本遺跡の基盤層である。

(3) 地山加工

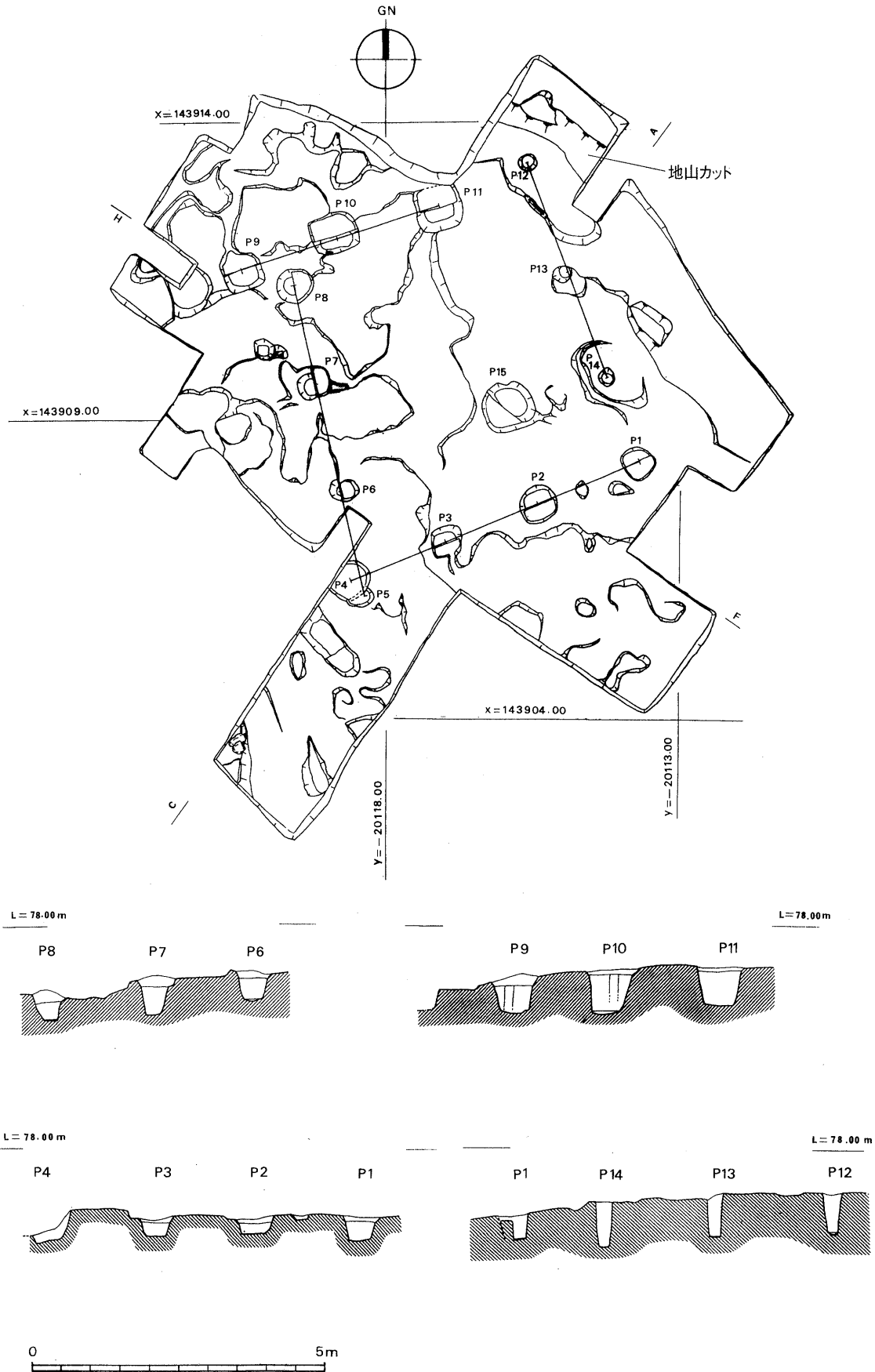
W2区から下ってW3区に至るが、W3区の北東側は傾斜面を大きくカットし、その全面には平坦面をつくりだしている。カット面の傾斜は60度を測るところもある。また周辺の地山表面は凹凸が激しいが、カット面に接する地山の表面は平坦であるため、人為的に平滑にならした可能性が高いと判断した。第4層はこの平滑面の上に傾斜をもって堆積している。

また、地山は調査区の周囲では緩斜面となっているが、北西および南西斜面はやはり地山がカットされ、傾斜が急になっている。このうち南西斜面には遺物や炭化物が流れ込んでいる状況がみられた。

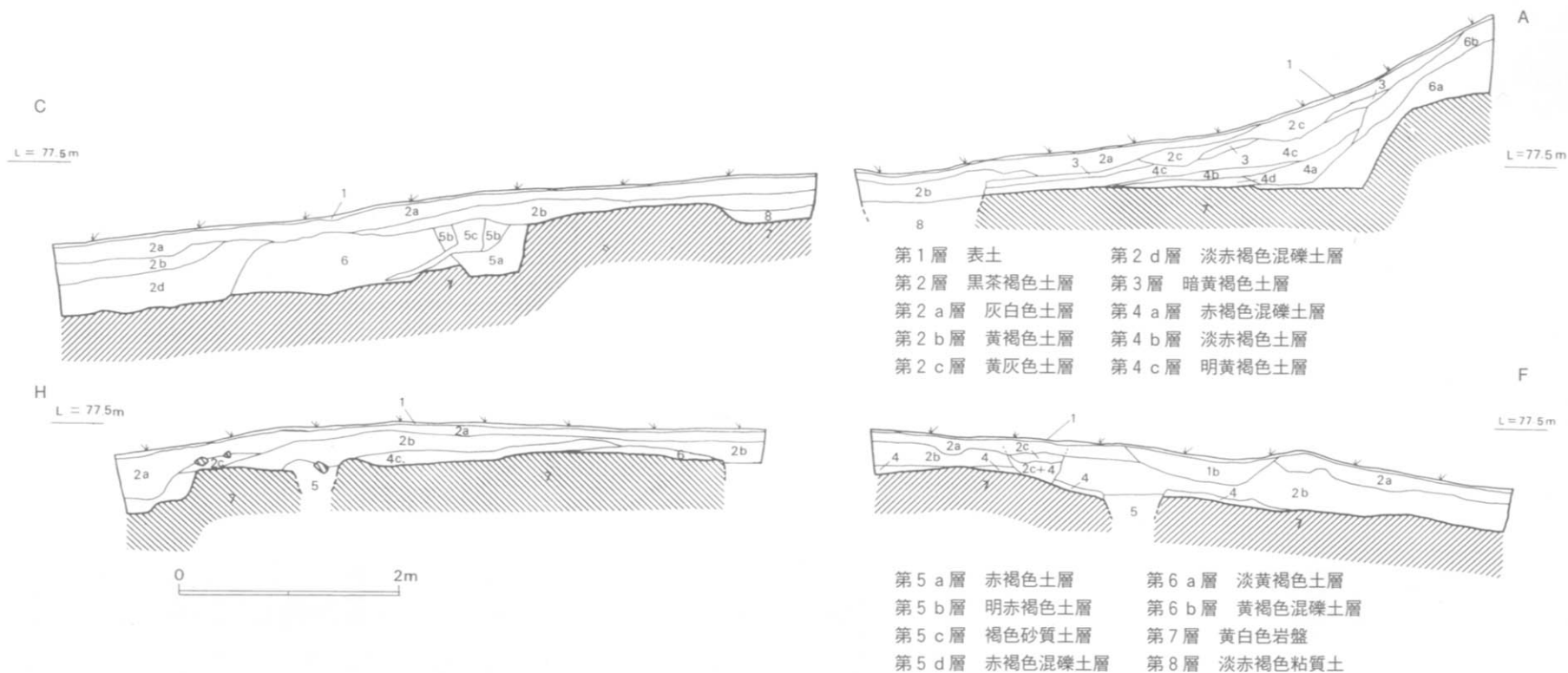
(4) 遺構 (第32図・図版14)

①性格不明遺構

W3区では調査区を台形に取り囲む柱穴群が出土した。柱穴は方形にめぐるものではなく、南部が鋭角となる台形を呈する。掘方の形や大きさ、深さに違いがあり、北側柱穴列(P9-P11)と東側



第32図 W3区遺構実測図 (S=1/100)



第33図 W3区土層図 (S=1/60)

W3区からピ
ングシ山頂を
みる



W3区の性格
不明遺構



図版14 W3区

柱穴列（P12－P14）および南側（P1－P4）・西側（P5－P8）柱穴列の三つのグループにわかれる。東側の柱穴列は円形で、直径は20cmほどと小さいが、深さが50～58cmと深い。柱穴間寸法はP12－P13が2m、P13－P14が1.9mである。北側の柱穴列は方形で一辺が60～80cmと大きく、深さも50～60cmほどと大型である。そのうちP9・P10二つの柱穴の覆土の断面観察により木柱痕を検出することができた。木柱の幅は16～18cmである。柱穴間寸法はP9－P10が1.7m、P10－P11が1.8mである。南および西側の柱穴列はV字形に交わって切り合っている。円形の柱穴で、直径は40～60cm、深さは30～50cmと、北側や東側の柱穴よりも浅くなっている。南側の柱穴間寸法はP1－P2が1.85m、P2－P3が1.7m、P3－P4が1.8mである。西側の柱穴間寸法はP5－P6が1.85m、P6－P7が1.75m、P7－P8が1.8mで、この南側と西側柱穴列の柱穴間寸法はよく揃っている。

次にこれらの柱穴群の先後関係であるが、東側の柱穴は地山に直接掘り込まれており、その上に第4層が堆積していることもあって、他の柱穴よりも発見が遅れた。南側の柱穴は第4層から掘り込まれ、西側の柱穴も土層の観察から、第4層から掘り込まれた可能性が高い。北側の柱穴については掘り込み面を明らかにし得なかったが、柱穴列の先後関係は東側・北側柱穴列が先にあって、第4層堆積後に南側・西側柱穴列が作られたと判断される。

これらの柱穴列に囲まれる空閑地を精査したが、これ以外の柱穴を発見することはできなかった。わずかに南東側に直径90cmの不整形の攪乱による土坑（P15）を検出したのみであった。その他には調査区の中央に蛇行しながら走る溝状の遺構らしきものがあり、当初、人為的な溝かと考えていた。しかし土層観察の結果、土は赤褐色の粘質土であるため、地山が部分的に軟らかくなっているところに、雨水の流路となったものと判断した。この流路は北側の柱穴の肩を浸食し、壊している。また、第3層をも切っている。

（5）遺構の性格について

出土した柱穴群は掘立柱建物跡ではないと思われる。その理由は下記のとおりである。

- ①柱穴の掘方のプランが三種類あり、共通性がないこと。
 - ②柱穴群は東・北側柱穴列→南・西側柱穴列という先後関係が考えられるため、それぞれの柱穴は機能や時期が異なると考えられること。
 - ③柱穴が方形ではなく台形に巡ること。（柱穴の特徴に類似点が多い南側・西側柱穴列は斜面の高い方に向かって80度の角度をもってV字形に開く）
 - ④北東部の傾斜面をカットし、平坦地を作り出しているが、その上に堆積する第4層（整地層）は傾斜をもって堆積しており、その傾斜地に遺構がつくられていること。
- などである。したがって、これらの柱穴列は居住を目的とする建物跡ではなく、柵か、それに類した構築物と考えられる。いずれにしても眺望のきく斜面の小平坦地に存在することから、物見や見張りなどといった場の機能が考えられる。

4. 遺物 (第34図)

(1) 須恵器

1は宝珠つまみをもつ杯蓋で、W2区の第1層から出土した。3/4ほどの残存率である。口径14.4cm、器高3.1cmである。つまみはていねいにナデられ、天井部外面は回転ヘラ削りののちに回転ナデ。かえり付近も回転ナデ調整を施す。天井部内面も回転ナデ調整である。色調は灰色で、胎土は緻密で精選されており、器壁はさわめて薄い。焼成はややあまい。

2は高台をもつ杯身である。W2区の表土より出土した。全体の3/4ほどが残存する。口径13.3cm、器高4.5cm、高台径9.6cm、高台高は0.8cmである。風化が激しく、調整痕はわかりにくい。体部外面上半は回転ナデ、下半は回転ヘラ削りののちに回転ナデ調整である。高台および高台内も回転ナデ。体部内面は回転ナデ調整で、底部内面は静止ナデである。色調は灰色で、胎土には2mmほどの砂粒が混入し、やや粗である。焼成はよいが、内面に焼成時の火膨れがみられる。

3は瓶の口縁部で、W3区の3層から出土した。口縁部全体の1/2が残存する。復元口径は6.8cmである。口縁下に3条の沈線をめぐらす。内外面ともに回転ナデ調整である。色調は灰赤色で、胎土に白色砂を含む。焼成は良好である。

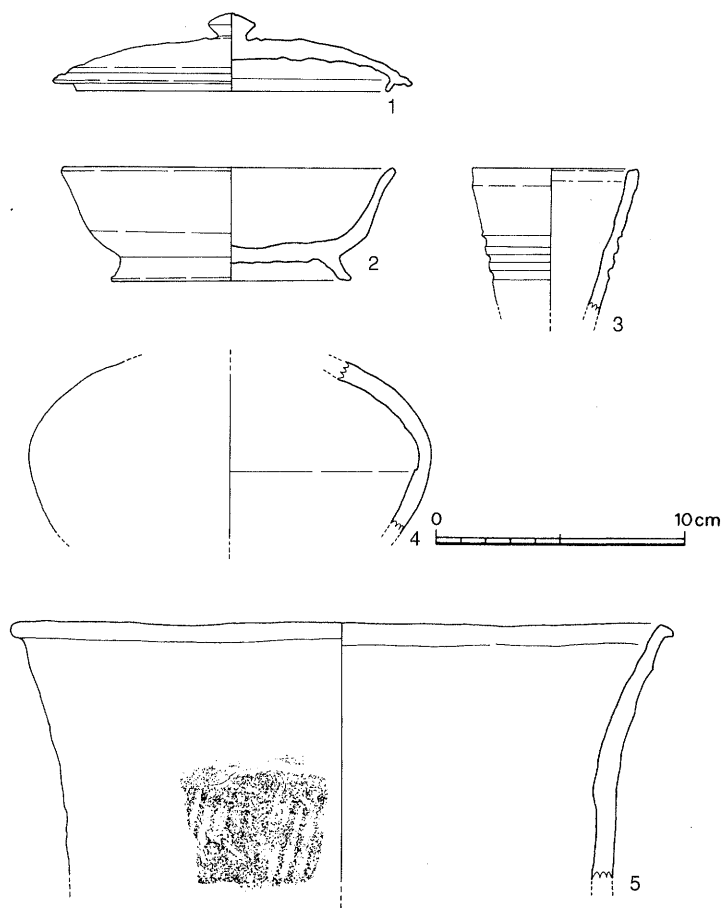
4は壺の体部で、W3区第3層より出土した。残存率は1/3ほどで、復元胴部径は15.9cmである。風化により器面は摩滅しているため調整は不明である。色調は灰白色で胎土に白色砂を含む。焼成はあまい。

(2) 土師器

5は広口の甕の口縁部で、W2区の表土より出土している。口縁部の1/6ほどが残存し、復元口径は26.4cmである。外面に平行タタキが残存する。色調は赤褐色で焼成はあまく、もろい。胎土には砂粒を多く含む。いわゆる「玄界灘式製塩土器」であろう。

5. 小 結

ビングシ山南西斜面の調査成



第34図 ビングシ山南西斜面出土遺物 (S=1/3)

果をまとめると次のようになる。

ビングシ山の南斜面には階段状に二つの小平坦地が存在し、北からW2区、W3区とした。W2区からは直列した柱穴列が出土した。ほかにも柱穴が存在したが、建物跡として復元できるものではなかった。

W3区からは台形に巡る柱穴列が出土したが、建物跡とは認められなかった。柵列あるいは、それに類した構築物と判断した。W3区における調査結果を総合すると、一帯の地山加工を含む地形改変が行われ、その後、柵ないしはそれに類した構築物が作られた。これは物見や見張りを目的とした施設と思われる。

遺物として玄界灘式製塩土器が出土していることが注目される。

第8節 ビングシ山北斜面

1. 北斜面の現状

北斜面は伐採した時点で標高73mのところにテラス状の平地が存在していたため、遺構の存在が予想されていたところであった。

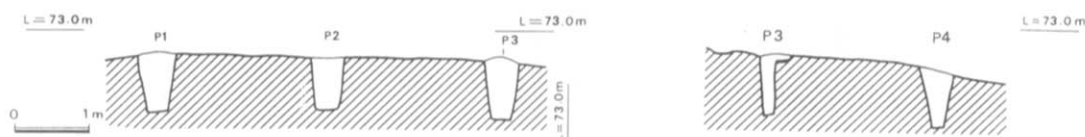
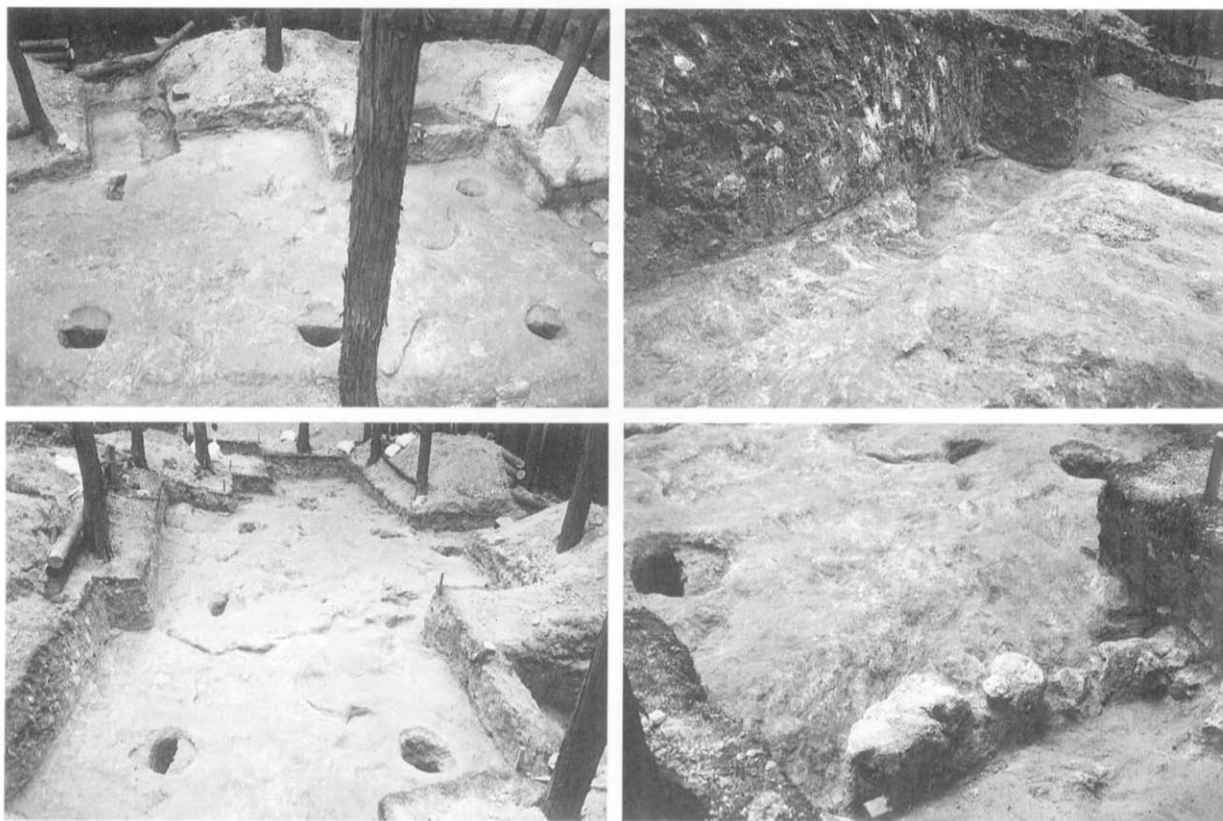
2. 調査

(1) 調査の概要

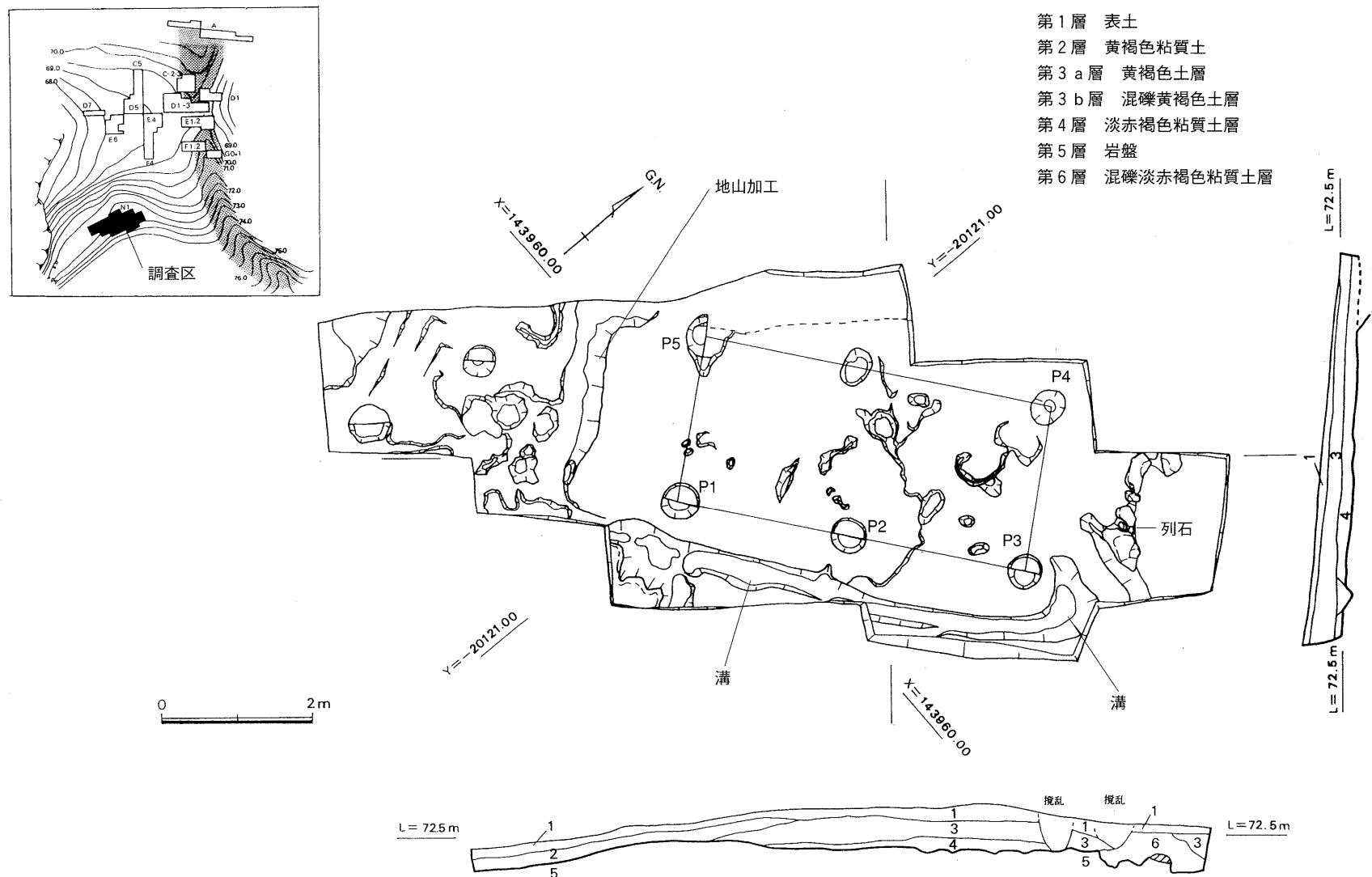
平成9年度の調査において、ビングシ山の北斜面のテラス状の平坦部を調査し、掘立柱建物跡1棟を確認した。検出した建物跡が立地する地点は、ビングシ山の北西斜面のなかほどにある。その場所からは、ビングシ門、およびその内側の広場を眼下に見下ろすことができる。

(2) 遺構

①掘立柱建物跡（第35図，図版15）



図版15 ビングシ山北斜面の遺構（上段右：溝，下段右：列石）



第35図 ビングシ山北斜面遺構実測図 (S = 1/80)

掘立柱建物跡は梁間1間、桁行2間の側柱（がわばしら）の建物跡である。柱間寸法は2.1m～2.2mで、唐尺に換算すると7尺ほどである。柱穴は円形で、直径50cm、深さ80～90cmを測り、岩盤を掘り込んでつくられている。ビングシ山山頂部で検出された掘立柱建物跡の柱穴に比較すると、ひとまわりほど小さく、プランも異なる。柱穴は5つ確認できたが、北側の側柱の1つは確認できなかった。

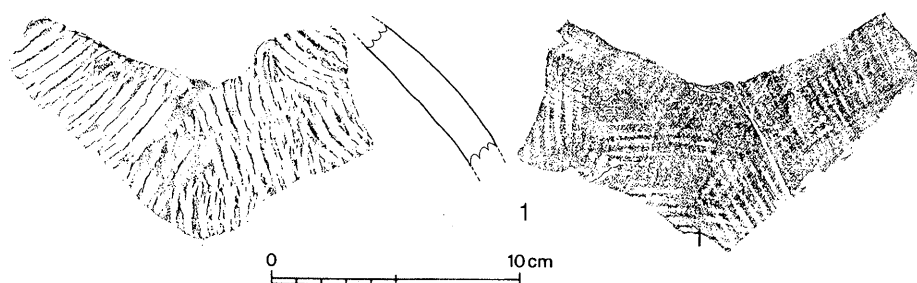
掘立柱建物跡は、周囲を溝や地山加工によって区画した平坦地に建てられている。すなわち南は幅10～15cm、長さ6mほどの溝で区切られ、北は岩盤が落ち込んでいる部分に客土し、平坦地をつくりだしている。北西隅の柱穴はこの客土を切って掘りこまれている。東側は列石と周堤によって区画している。西は岩盤がなだらかに落ちる現状だが、人為的に地山のカットが行われていると判断した。

また建物の構造は、軒が溝中央部までの長さをもつ切妻型のものと推定される。

3. 遺物（第36図）

（1）須恵器

1は甕の肩部片である。内外面に平行タタキが残る。色調は明灰色で、胎土は精選されている。焼成はあまく、軟質である。



第36図 ビングシ山北斜面出土遺物（S＝1／3）

4. 小 結

前述したように掘立柱建物跡が出土したところは、ビングシ門やその内部の平場を見下ろすところである。さらに東に20mほどゆくと南土塁があり、斜面を登るとビングシ山頂部の掘立柱建物が存在する。建物の性格は不明であるが、このような立地と無縁ではないと思われる。

第9節 一ノ城戸の調査

1. 一ノ城戸の現状

一ノ城戸はビングシ山の北東、標高31mにある。大吉戸神社から遊歩道を使用して徒歩10分のところに位置する。石塁沿いに南東に向かうと二ノ城戸にいたる。城戸は深い谷を塞ぐ形で石垣が築かれ、谷の最深部には水門が開口しているのが目にはいる。門礎などは未発見であり、門の位置も未確定である。一ノ城戸の南側には張り出した櫓が存在する。二ノ城戸や三ノ城戸には存在しない施設であり、かねてより研究者に注目されている遺構である。

2. 一ノ城戸の調査（第37図）

平成10年度の調査に伴い実施した。水門の直上に石垣に直交するトレンチをもうけ、第1試掘トレンチ（Tr1）とした。その南側にもトレンチを設定し、第2試掘トレンチ（Tr2）とした。

（1）Tr1の調査

トレンチの西端で表土下0.7～1.0mで地山を検出したが、それより東（石垣方向）では2m以上掘っても地山は検出できなかった。トレンチの東端で石積み遺構を検出した。東端の石積みは石の面をそろえており二ノ城戸のような石塁にとりつく石積みとは異なる様相であった。石垣のような構築物になる可能性がある。Tr1の中央南壁では壁面に空洞が生じ、東端の石垣部分でも狭い横穴が検出されており、トレンチの東側は空洞ないしは土層の間隙があるような気配がある。確実ではないが通水用のものかもしれない。検出された石積みから城戸の石垣の端までを推定される石垣の幅とすると、約5mを測る。

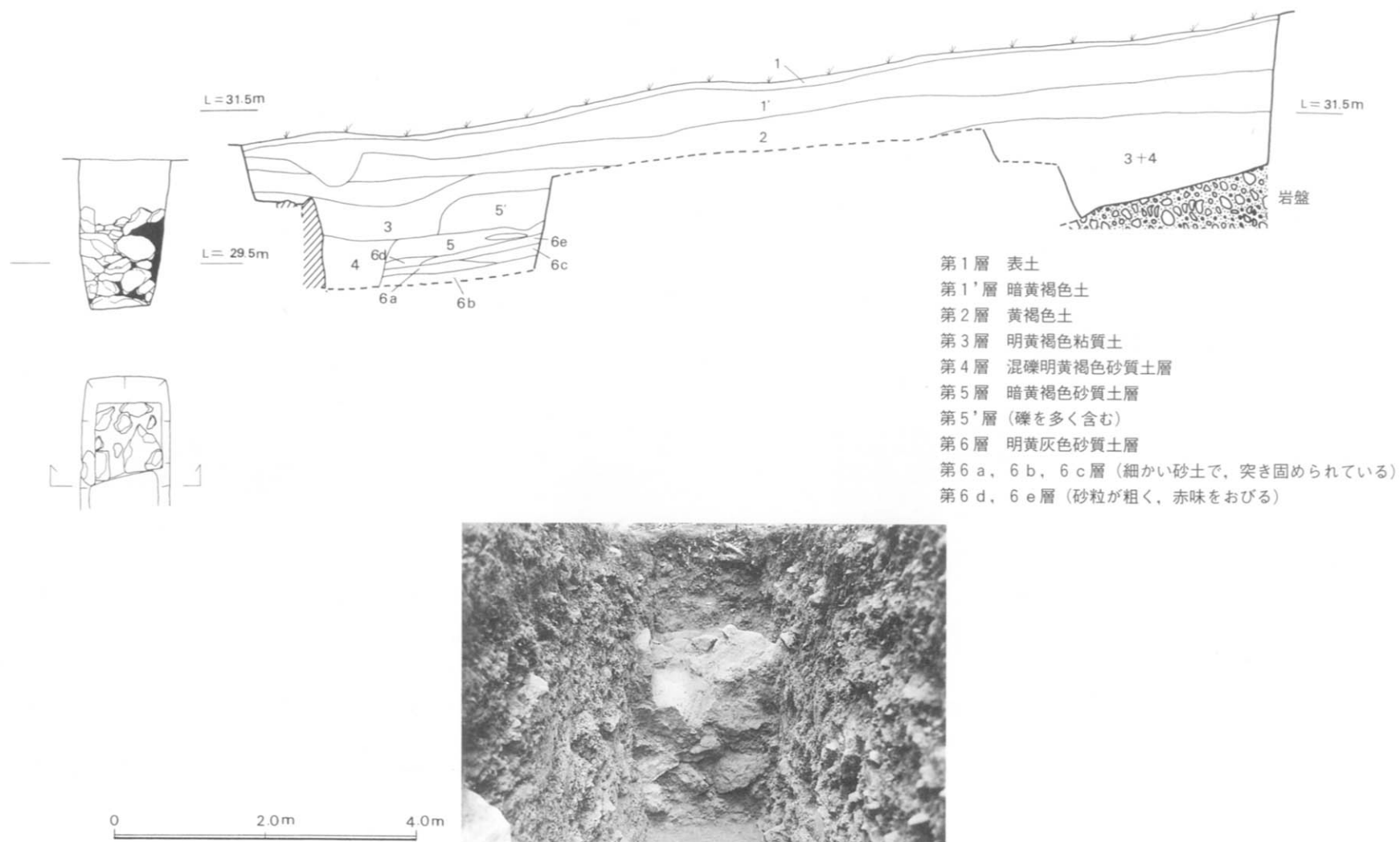
（2）Tr1の土層

大きくは1～6層に分けられる。このうち6層は版築状に突き固められた互層をなす。この版築状の土層は段を有しながら、その高さを減じ石積みにとりつくと推定される。したがって、城戸の構築過程を復元すると、版築状に築いた後背地をカットして石塁の背後に段をつくり、その前面に石垣を築き、裏込めをしながら（裏込めは少ない）、石塁と版築の間を埋めるという作業が想像される。なお第5層や第6層の平面分布はトレンチに直交するのではなく、トレンチを斜めに走っている。したがって、城戸の石垣線より次第に離れて走る気配である。

地山ないし岩盤には加工の跡はみられない。

（3）Tr2の調査

地山が急傾斜で石塁に向かっておちこんでいる。石垣部は二ノ城戸のものに比べて裏込めのぐり石が少なく、石垣構築の形態が異なるようである。



第37図 一ノ城戸第1トレンチ土層図 (S=1/60) 図版16

3. 遺 物 (第38図)

①須恵器

1は高杯の杯部で、第1トレンチの第2層より出土した。杯部全体の1/2が残存し、復元口径14.0cmを測る。杯部外面上半は回転ヘラ削りののち回転ナデ。下半は回転ヘラ削りで脚部近くは回転ナデ調整である。杯部内面は回転ナデ、内底部はナデである。内底部には焼成時の火膨れが生じ、器形にもひずみを生じているが、焼成はよい。色調は青灰色で、胎土は緻密である。

2は甕の頸部で、第1トレンチの第2層から出土した。外面には平行及び斜走する沈線文を施し、文様帯より下半はナデられている。内面はナデ調整で、肩部内面は同心円タタキが残る。色調は暗灰色で焼成は良好である。

3は甕の胴部片で、第1トレンチの第2層から出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円状のタタキが残る。外面は暗灰色、内面は灰色である。胎土には小白色石を多量に含むが、焼成はよい。

4も甕の胴部片で、第1トレンチの第2層より出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを残す。内外面は灰色で、胎土には細かい白色砂を含む。焼成はややあまい。

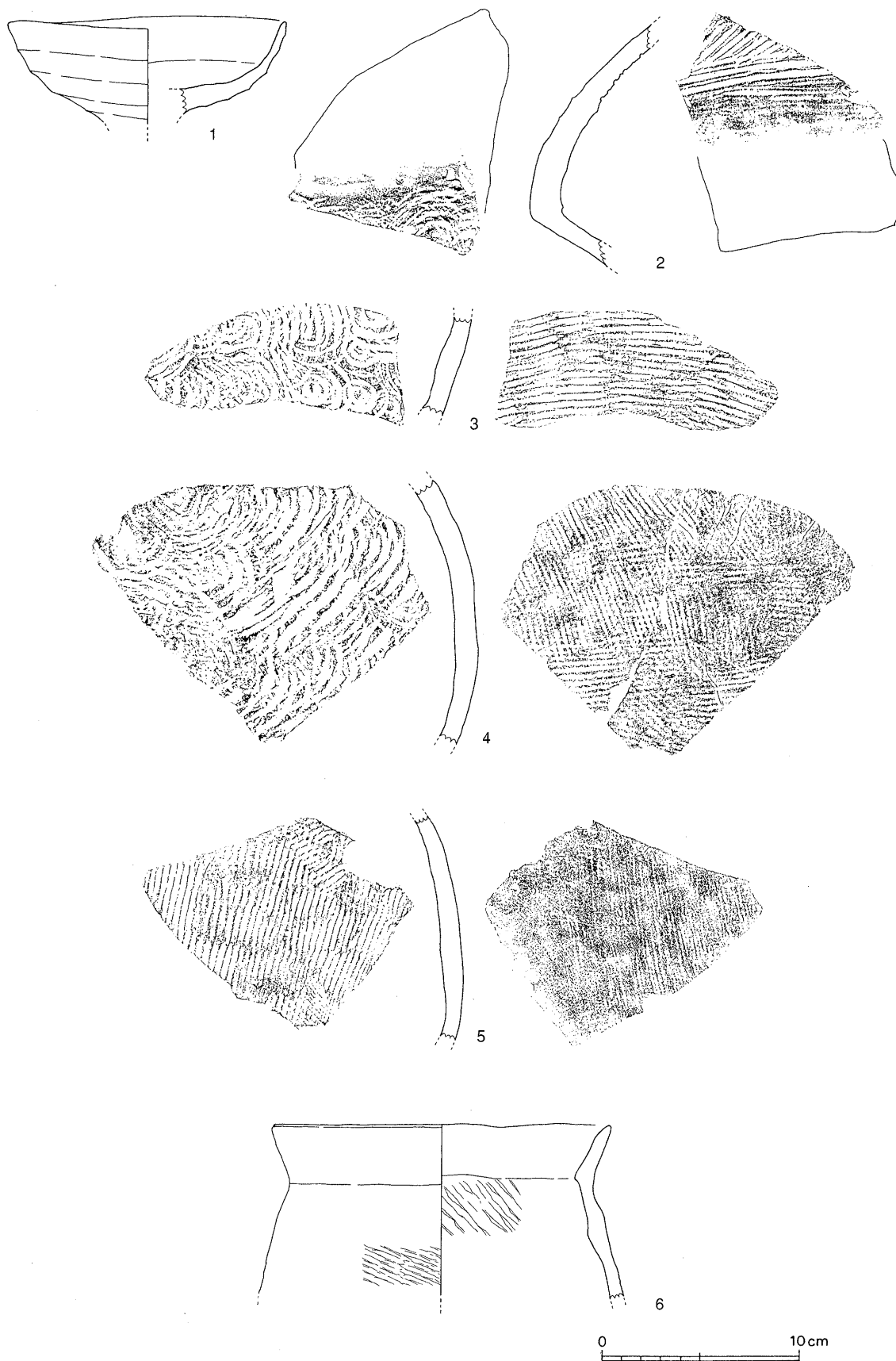
5も甕の胴部片で、第1トレンチの第2層から出土した。外面は平行タタキをナデ消し、内面は平行タタキを残す。内外面の色調は暗灰色で、断面は褐色を呈する。胎土には細かい白色砂が混入するが焼成は良好である。

②土師器

6はタタキをもつ土師器の甕形土器で、第1トレンチの第2層から出土した。いわゆる「玄海灘式製塩土器」と思われる。口縁および胴部の1/4が残存する。復元口径は17cmほどである。口縁部は内外面をナデられ、胴部外面には平行タタキがのこる。口縁部との境は風化によってタタキ痕は消失している。内面は胴部上半は平行タタキ、下半はケズリによって成形されている。色調は明赤褐色、内面は黒褐色を呈する。胎土には砂粒を多く含み粗い。焼成もあまくもろい。

4. 小 結

一ノ城戸の調査は水門の直上に城戸の石垣に直交するトレンチを設定した。城戸の構造は二ノ城戸のものと同様である。しかし出土した石垣は二ノ城戸のものや石塁付近の石積みとは異なり、石垣の表面をそろえて組んだものであった。どのような構築物になるのかは現在のところ不明である。城門に関係した遺構かもしれない。



第38図 一ノ江戸出土遺物 (S=1/3)

第10節 二ノ城戸の調査

1. 二ノ城戸の現状（図版17）

二ノ城戸はビングシ山の北東、標高26mに位置する。石垣に沿って南東に進むとビングシ山の南斜面をかすめて三ノ城戸にいたる。

2. 二ノ城戸の調査（第39図）

平成10年度の調査において実施した。二ノ城戸の石垣に直交するトレンチを3本設定した。北からTr1, Tr2, Tr3とした。さらに、石垣に平行して先の3つのトレンチに直交するトレンチを3本設定した。北からTr5, Tr6, Tr4とした。

（1）Tr1の調査（第41図）

掘り下げるとまもなく石垣の裏込め石と岩盤を検出した。意外にも岩盤が石垣に接近して露出していた。

岩盤は北から南に向かって急激に落ち込んでいる。落ち込みの部分には客土して、その前面に石垣を構築している。石垣の裏込めは一辺が30cm～40cmほどの角レキを使用し、さらにその裏に直径10cmほどのグリ石を使用している。断面の観察からは石垣構築時は岩盤まで露出させて、その上から土を積みあげいったと思わせるものであった。

（2）Tr2の調査（第40図）

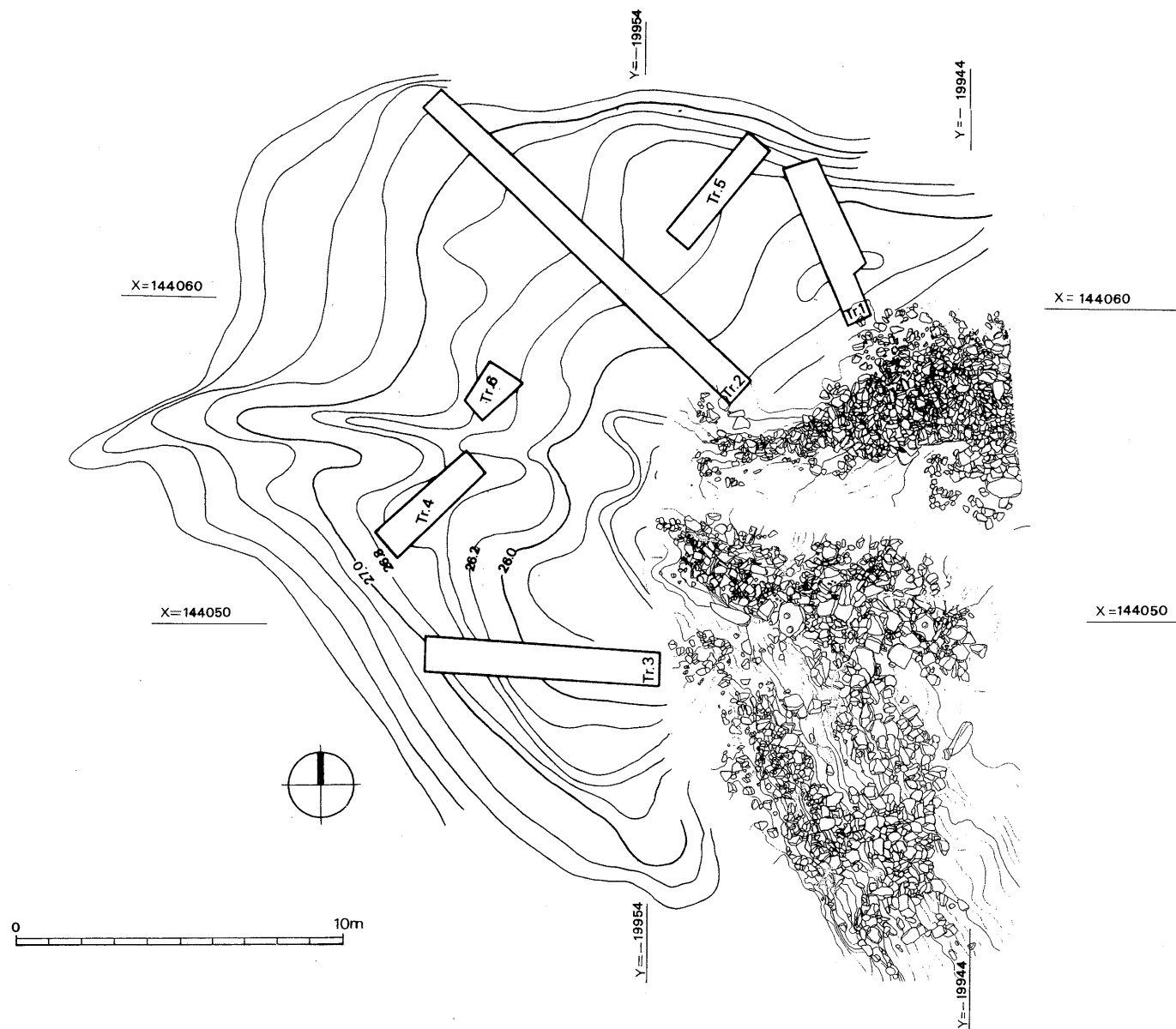
土層は第1層（表土・腐食土）、第2層（淡黄褐色粘質土層）はレキ混じりのバサバサした土である。須恵器などの遺物を包含する。トレンチの西側では旧表土とみられる有機物混じりの土層も検出した。おそらくこの層が石垣構築時の客土層であり、当時の生活面となっていたと推定される。石垣近くではこの層が落ち込んでおり、石垣構築時のカットと思われる。第3層（黄褐色砂質土層）は礫をあまり含まないサラサラとした土質である。本来の山土と思われる。

この第3層は自然堆積とみていたが、最深部からも遺物が出土する状況からして客土と判断した。第3層の土質は10cm前後の礫を含む砂質土で、サラサラ、バサバサしている。水はけはよいと推定された。サブトレをいれて観察したところ表土より1.8mほどで岩盤がでてきた。岩盤は北から南にむかって急激に傾斜している。ここでもトレンチ最深部より須恵器が出土することからみて、岩盤の上から客土しているものとみられる。第3層は下層の土よりわずかに粘質である。岩盤に近いためのか、客土する際に意図的に行ったのかは現状では判断できない。

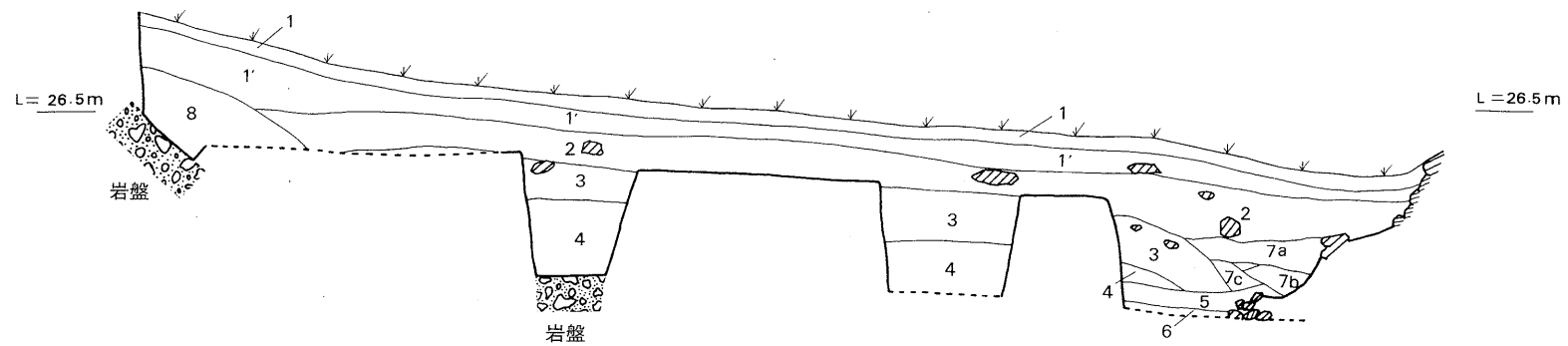
二の城戸の旧地形は岩盤の落ち方から、かなり深い谷であったと推定される。石垣の構築はまず、この硬い岩盤を露出させることから始められ、その上に客土することによって石垣の背後の平坦地をつくっていったと推定される。このことは岩盤の直上の土層から須恵器を出土することから判断され



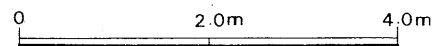
図版17 二ノ城戸の現状



第39図 ニノ城戸調査区設定図 (S = 1 / 200)



- 第1層 表土
- 第1'層 暗黄褐色土
- 第2層 黄褐色土
- 第3層 明黄褐色砂質土
- 第4層 混礫明黄褐色砂質土層
- 第5層 暗黄褐色砂質土層
- 第6層 明黄灰色砂質土層
- 第7層 第3層に類似
- 第8層 明黄褐色粘質土
- 第9層 石垣の裏込め
- 第10層 黄褐色粘質土層



第40図 ニノ城戸第2トレンチ土層図 (S=1/80)

た。さらに谷を埋めた土は砂質土でこれは水はけをよくするために選択的に用いられたものと推定される。

(3) 石垣とりつき部の調査。

Tr 2を1.7m下げたところで、突然円形の穴があいた。柱穴とはいえないが、石の隙間とも思えない。穴のまわりには裏込めのようにしてレキを充填しているところからみて、作業用の柱ないし杭跡とも想像される。

石垣は30～40cmの角レキの後ろにグリ石を配してつくられている。土層断面図の観察から表土下2mから締まった砂質土が水平に堆積する。これは版築状の土層になると思われるが、下層は未掘のため詳細は不明である。その上に2枚の砂質土をのせる。その上には黄褐色砂質土層（第3層）が斜めに堆積し、表面は硬く締められている。最後は黄褐色土（第2層）を一気に乗せている。

城戸の構築順序を復元すると、石垣・角レキ・グリ石を積みあげながら、表土より2m以下は版築構造で充填させ、その上は砂質土層（第3層）を乗せて水はけを考慮したものと推定される。第3層は石垣に向かって斜めに成形され、その後一気に第2層を乗せて石垣の安定を測ったものである。Tr 2の地山層はサブトレンチ1で確認したごとく対州層の岩盤および風化土層である。Tr 2の石垣付近ではこの地山層を確認することは未発掘のためできなかった。

Tr 2の西端をさらに掘り下げたところ、地山の岩盤を検出した。これによって城戸の石垣部を除く地山の傾き（旧地形）を確認することができた。

それによると二ノ城戸は地山加工や岩盤をカットするなどの人為的な地形改変をすることなく、旧地形の深い谷を埋めたてて構築しているようである。

二ノ城戸Tr 2の西端で岩盤の直上に黄褐色粘質土を確認した。岩盤の上に自然堆積したものと考えられるが、岩盤と同様に急角度で落ちる。

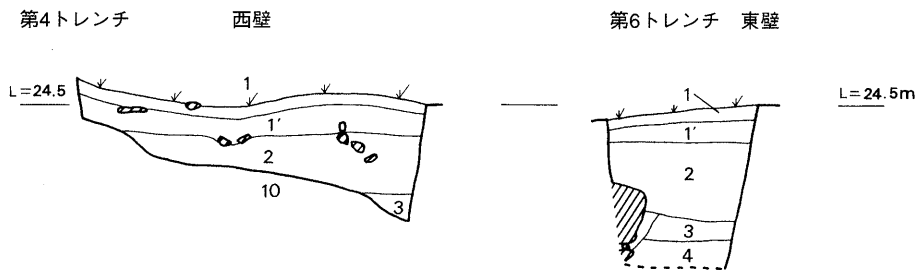
(4) Tr 3の調査（第41図）

トレンチの最高所では表土下30～40cmで地山の第3層（黄褐色粘質土層）があらわれた。石垣とりつき部ではTr 1・Tr 2と同様に角礫の裏込めの後ろにグリ石による裏込めを行っている。

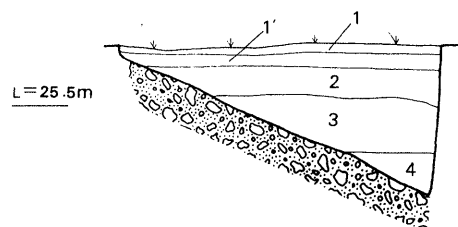
Tr 3で意外に浅いところから地山が現れたことによって、Tr 2でみられた岩盤まで露出させての客土はTr 3よりもさらにTr 2に近いところから始まっている可能性がある。Tr 1やTr 3のように比較的浅い地山直上ないしは岩盤直上からの石垣構築は、石垣構築時の工事方法とみられる。城門ないし城戸の主要部の後背地はTr 2でみられるごとく岩盤まで露出させて大量の客土をおこなう工事方法と考えられる。

Tr 3の状況はTr 1とよく似ており、地山ないし岩盤を成形することなく、大がかりな客土もおこなっていない。石垣にとりつく部分に向かって地山が落ちて（成形によるものかもしれない）、先端部に石垣を構築している。このことはこの部分の石垣が城戸の背後というよりも石垣の背後という場であることを示しているようである。

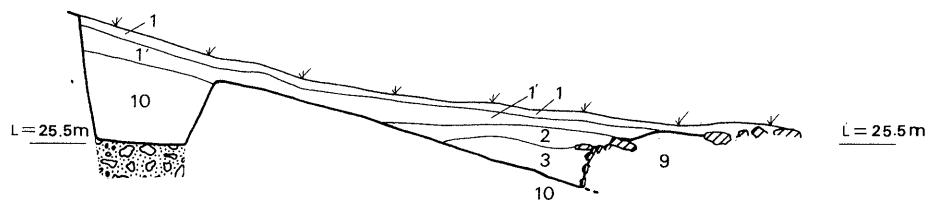
北側のTr 3は岩盤が急激に落ち込んでおり、このあたりから谷が始まることが理解される。



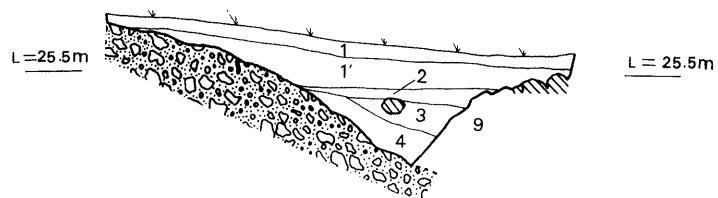
第5トレンチ 西壁



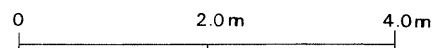
第3トレンチ 北壁



第1トレンチ 南西壁



※土層番号は第39図に一致



第41図 ニノ城戸第1, 3, 4, 5, 6トレンチ土層図 (S=1/60)

(5) Tr 4 の設定 (第41図)

南側の Tr 4 では地山はなだらかに落ちており、
北側の岩盤のように急激な落ち込みをみせない。

(6) Tr 5 の設定 (第41図)

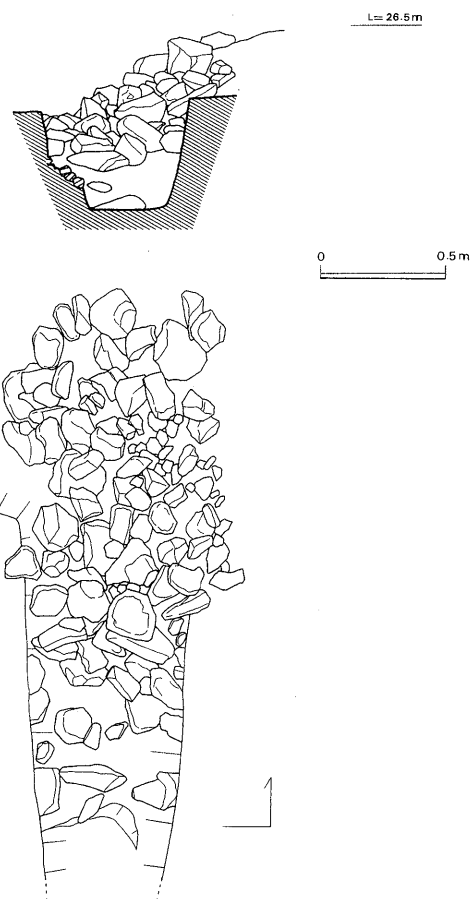
(7) Tr 6 の設定 (第41図)

Tr 6 を 2 m ほど堀下げたが地山を検出できなかった。

そこで Tr 4 を北へ延長するかたちで、地山の落ち込みを確認した。

それによると Tr 6 トレンチの 1 m 南側より地山の傾斜が変換し北へ落ちていくことが判明した。

旧表土は 2 層上面となる。



3. 遺物 (第43図)

(1) 須恵器

1 は宝珠つまみをもつ杯蓋で、二ノ城戸の第 1 トレンチ第 2 層より出土した。全体の 1 / 2 が残存する。復元口径は 8.4cm, 器高は 3.0cm である。宝珠つまみ部分はナデ, 天井部は回転ヘラケズリののちに回転ナデ調整である。かえり付近はナデ調整で, 天井部内面は回転ナデ調整である。色調は灰色で, 胎土は精良で焼成もよい。

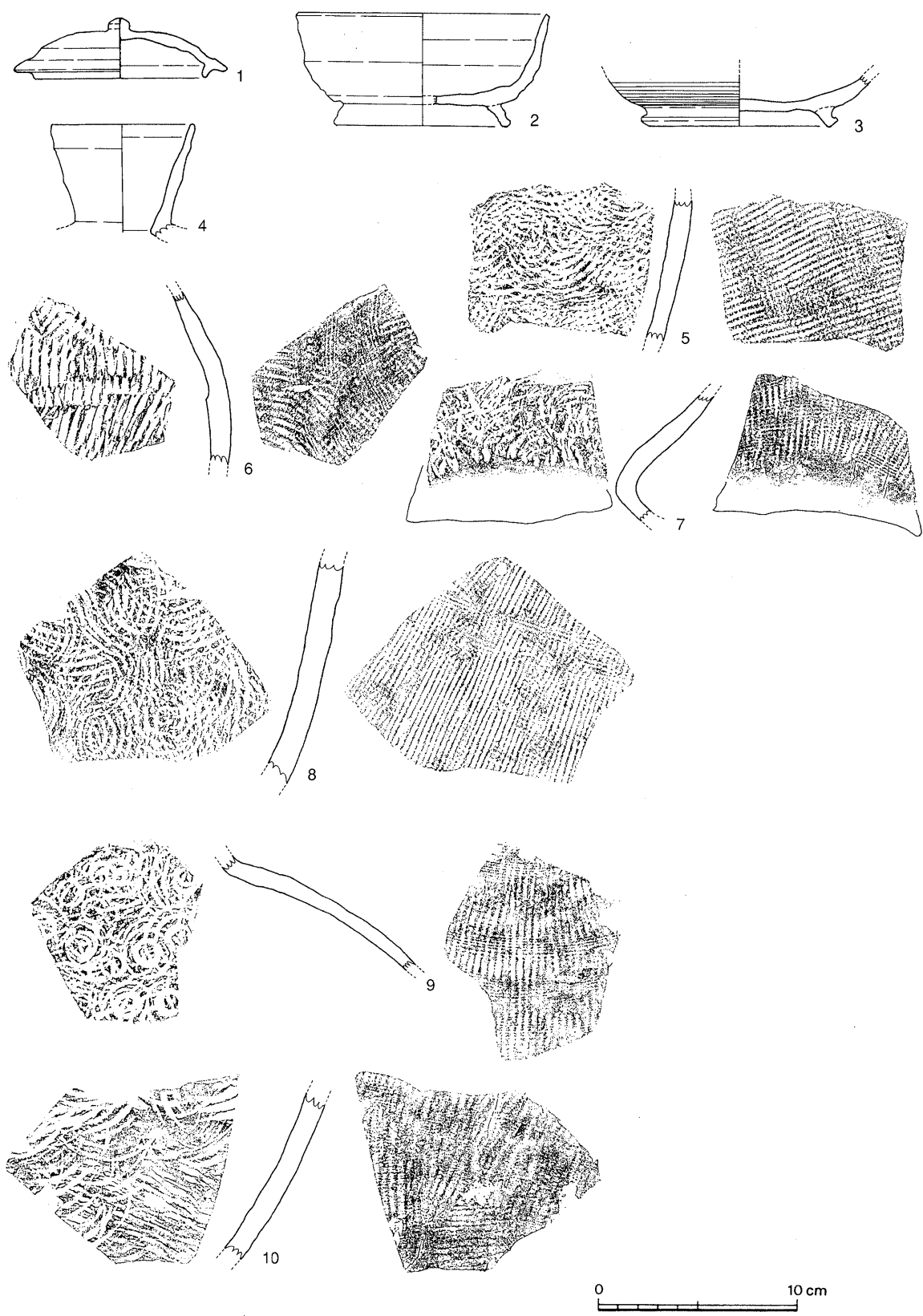
第42図 二ノ城戸第3トレンチ東壁 (S = 1 / 30)

2 は高台をもつ杯身で, 第 2 トレンチの第 2 層より出土している。全体の 1 / 4 が残存する。復元口径 12.5cm, 器高 5.5cm, 復元高台径 8.8cm, 高台高 1.0cm である。高台は内湾気味にふんばる。体部外面上半は回転ナデ, 下半は回転ヘラ削りののちナデ, 高台外面はナデ調整である。体部内面は回転ナデ, 内底部は静止ナデ, 高台内は回転ナデで, 高台の見込み部分は静止ナデ調整である。色調は橙色で, 胎土に白色砂や砂粒を含み, 焼成はあまい。

3 は壺の底部で, 第 5 トレンチより出土した。高台部分の 1 / 3 しか残存しない。復元高台径 9.8cm, 高台高 0.8cm である。体部外面はカキメ調整で, 高台はナデられている。内底部は静止ナデである。高台内面は回転ナデ, 高台見込部はカキメののちにナデ消している。

4 は瓶の口頸部で, 二ノ城戸第 1 トレンチの第 2 層より出土した。全体の 1 / 2 が残存し, 復元口径 7.0cm, 頸部径 2.6cm を測る。外面はナデ調整, 内面は回転ナデ調整である。外面の風化が激しい。胎土は精選されており, 焼成は良好である。色調は外面暗灰色, 内面は灰色である。

5 ~ 10 は甕類の胴部, 頸部, 肩部の一部である。5 は第 2 トレンチの第 2 層より出土した。外面は



第43図 二ノ城戸出土遺物実測図 (S=1/3)

平行タタキ、内面は同心円タタキが残存する。外面は暗灰色、内面は灰色で、断面はアズキ色である。胎土には小白色石を含むが焼成はよい。

6は第2トレンチの第2層から出土した。内外面ともに平行タタキをもつ。色調は外面で灰色、内面は青灰色である。胎土には細かい白色砂を含む。焼成は良好である。

7は第2トレンチの表土より出土した。内湾気味に頸部がたちあがる。外面上半は平行タタキ、下半はタタキののちに回転ナデ、内面上半は同心円状のタタキののちに静止ナデ、下半は静止ナデである。色調は暗灰色で、胎土は精選され、焼成も堅緻である。

8は第2トレンチの第3層より出土した。外面はカキメののちに平行タタキを施し、内面は同心円状のタタキを施す。色調は灰色で、胎土には白色砂を含む。焼成は良好である。

9は第2トレンチの第2層より出土した。外面は平行タタキののちに回転ナデ、内面は同心円状のタタキである。色調は内外面とも褐色である。胎土には小白色石を多く含むが、焼成はよい。

10は第2トレンチの第2層より出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円状のタタキである。色調は内外面ともに灰色である。胎土は緻密で焼成もよい。

4. 小 結

二ノ城戸の調査は、城戸の構造を解明すべく石垣に直交して3本のトレンチを設定した。城戸中央部付近に設定したT r 2は2 m以上下げても地山や基盤層を検出することはできなかった。2 m付近からは砂質土を突き固めた版築土層が確認された。版築層は石垣前面で斜めにカットして段を作り、石垣と版築層の間にレキ混じりの土を充填して城戸を構築している。したがって城戸の中央部は旧地形が深い谷となっており、この谷を版築によって埋め立て、その前面に石垣を構築していると推定される。

城戸周辺部（石塁部分のトレンチ）は地山ないし基盤層の落ち込みをそのまま利用し、版築した土層は存在しない。

第11節 二ノ城戸城門跡の調査

1. 二ノ城戸の現状

二ノ城戸付近は、標高24mに位置し、南北より石塁が迫る。南北双方の石塁は損壊が著しいが、とくに南側の石塁の損傷は激しい。北側石塁の現存する高さは28mであるが、中央付近は26mにその高さを減じている。南側の石塁のかつての高さは推定できないが、北側石塁との標高差が2 m存在し、南側の石塁は急激に標高を下げて中央の崩落部にいたる。

そもそも二ノ城戸付近には2つの柱穴（そのうちひとつは軸摺穴）をもつ礎石と、谷部に流出した礎石（1穴）が存在することから、かつてここに城門が存在したことが推定されていた。

しかしながら二ノ城戸の状況は、先述したように石垣部分の崩落が著しく、大小の崩落石が城戸全面に散在するという状況であった。

とくに、城門のあたりとおぼしきところは、崩落石がマウンド状に堆積し、その上にはカシの巨木が生えるというありさまで、調査前には主要な遺構は破壊されたものと推定されていた(巻頭カラー)。

2. 調 査

(1) 調査の概要

これまで二ノ城戸の先端部には、三個の巨石を積み上げた石積みがあり、原位置を動いていないと想定されていた。さらにこの石積みはその場所から判断して石塁の石垣の一方の角（コーナー）ではないかと推定された。調査はこの石積みを基点として、石積みの根石を露出させながら、南へ延長するところから開始した。崩落石や崩落土を除去していくと、南へ向かって側壁の根石の列が検出されたため、当初の想定通り、この三つの巨石の石積みは二ノ城戸の南側石塁石垣の角（コーナー）であると判断した。

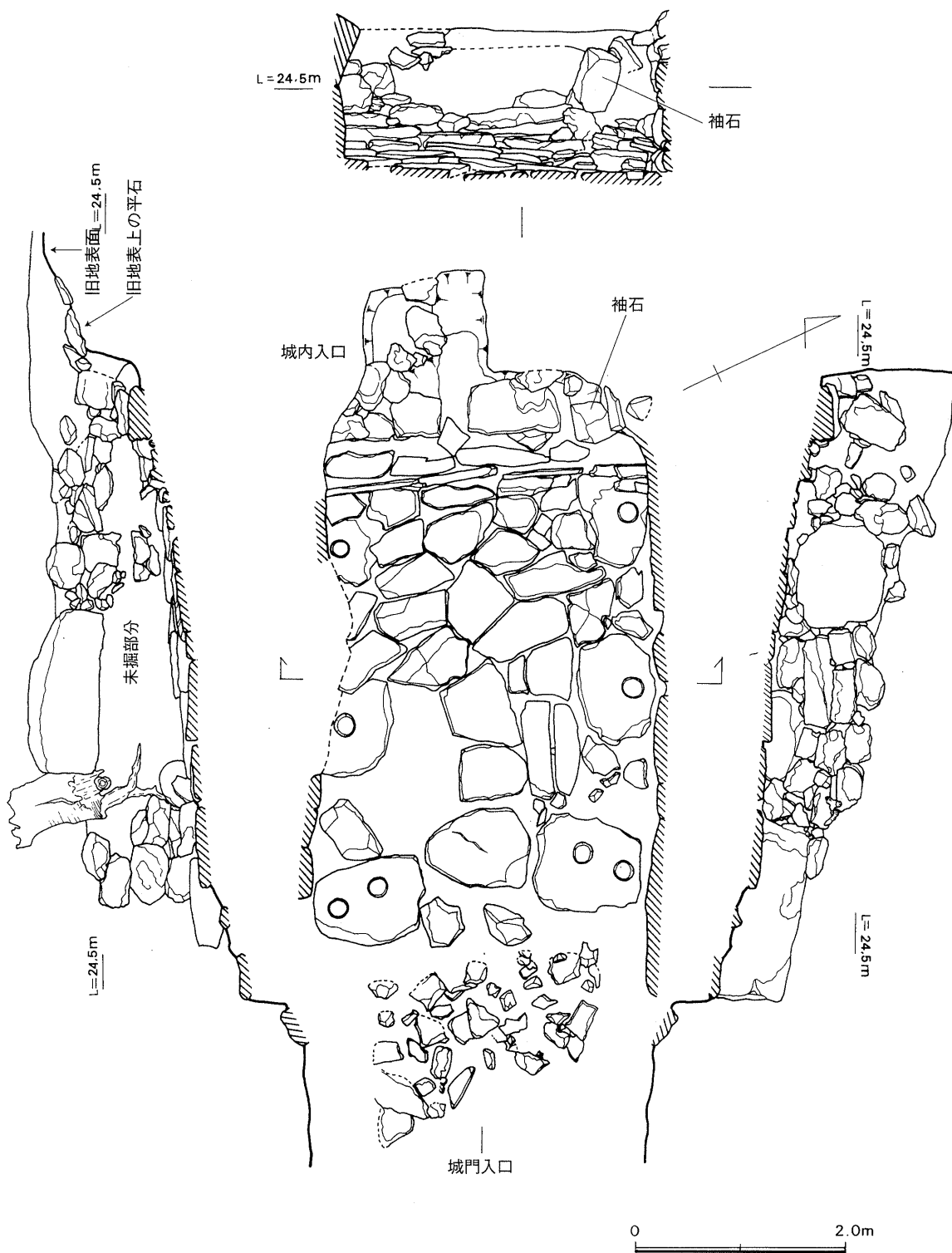
次に二ノ城戸北側の石垣部分の根石を検出すべく調査を継続した。すると現地表下1 m下より、原位置を保つであろうと推定できる根石を発見した。

さらに南側の石塁の角（コーナー）に対応した北側の石塁の角（コーナー）を検出しようと試みたが、原位置を保つ根石が発見できず、苦慮していたところ、城門の北壁に使用されたとみられる巨石が出土した。この巨石を中心に東西に崩落石を除去していくと、推定したとおり城門の北側の壁があらわれた。北壁は整然とした石垣で構成されていた。

この後、城門の床面は石敷であることが判明し、既存の門礎石と対になる礎石が検出された。さらに門柱の礎石が2対計4個、原位置を保って検出できた。また城内入り口部分は、袖石をつかって狭めていることもわかった。袖石部から城内への進入部には2段の石組み（階段）が残っていた。

(2) 城門の概要（第44図）

城門は床面先端部から城内入り口部の石段までの奥行きが4.0m、城門入り口の間口は南北壁間の距離とすると先端部で3.2mを測る。城内進入部は袖石によって狭められているが、現存する袖石間



第44図 二ノ城戸城門跡実測図 (S=1/60)

の幅は1.8mである。しかし南側の袖石に続く石が流出した可能性が高く、城内進入部分はさらに狭かったと推定される。このことは2段目の石段が1段目より幅が狭くなっているところから推定できる。したがって2段目の石段の幅を考慮して復元される袖石間の幅は1.4～1.6mである。

城門は1間×2間の掘立柱建物跡で6本柱と推定される。規模を柱穴の心々間によって測ると、東西方向は338cmと346cm、南北方向は279cmと280cmである。

(3) 遺構

①側壁

(ア) 北壁

城門入口部に高さ70cm、幅170cmの巨石塊をおく。その後方に石垣を築く。石垣は残存部で4段の石積みである。石英斑岩を用い、石塊の長軸を南北におき、小口を面としている。小口面は平滑に仕上げている。積み方はおおまかに目地をそろえるもので、石塊と石塊の間には角礫を入れて固定させている。根石は石敷によって不明である。

城内入口部より3mほど入ったところに高さ80cm、幅90cmの巨石塊をおく。これら城門入口部は石垣状ではなく、石畳と同じ積み方である。このことは南壁と同様である。

石垣の残存高は110cmである。石垣は若干土圧により城門内に傾く。

(イ) 南壁

城門入口部は石垣が構築されているが樹木により若干損なわれている。残存部の石垣は4段である。石材は石英斑岩で、ほぼ目地をそろえている。表面は面とりして平滑に仕上げている。石塊の間は角礫で充填し固定させている。根石部分は不明である。石垣の残存高は1m、南壁中央には高さ60cm、幅160cmの巨石が斜めになって座っており危険なため巨石下の部分は未調査である。城内入口部は石垣ではなく石畳の構築と同じ積み方である。充填土は突き固められたように締まっている。

②敷石

27個の偏平な石によって石敷が施されている。粘板岩と石英斑岩よりなる。粘板岩が多い。城内入口部分の方が城門入口部分より高く、床面は傾斜をなしている。この傾斜はもともとあったものと推定される。

城内北西部はやや陥没している。土圧か樹根によるものと思われ、当初は同じ高さにそろえられていたものと推定される。

城内入口部では2ヶ所に敷石が流出した部分がみられる。礎石は例外なく石英斑岩が使用されている。

③石段（城内入口部）

階段の一段目は粘板石の板石を立てている。土留めの機能をもつものであろうか。

北壁沿いの直立した板石は二重につくられている。幅3.1m。立石の後方は長細い砂岩の板石を4枚敷いている。2段目は石英斑岩によって段がつくられている。袖石によって幅が狭められている。推定幅2.0m。石段の中央部は残存しないが、前方に移動した石の可能性もある。3段目は石英斑岩を

立てている。南側には残存しない。旧地表を含めると計4段の石段よりなっていたと推定される。一段の高さは20～25cmである。

④袖石

城内入口部は袖石によって狭められている。北側の袖石は原位置を動いているものの、35×35×50cmの直方体である。北壁の石積みは袖石に向かって緩やかに回り込んでいる。根石も同様である。袖石の上部には50×50cmの板石を斜めに打ち込んで楔にして袖石を固定している。

南側の袖石は北側の袖石の半分くらいの大きさで隣にもうひとつの石があったものと推定された。これは石段の石がないことから証明される。南壁の石積みは袖石に向かってゆるやかにカーブした石が袖石の下に積まれている。

⑤城内の旧地表

表土下40cmほどで旧表土にいたる。20cm角ほどの石英斑岩を用いて石敷き状に平につくっている。旧地表は若干の傾斜をもって南北の各袖石に接続する。南側の袖石の後ろには2枚の平石が傾斜をもて袖石に向かっている。この平石は旧地表にのっていると考えられる。

⑥石段と旧地表の関係

城内入口部の石段は敷石部分との境に粘板岩の板石を立て、その後ろにやはり粘板岩の板石を敷いて一段目としている。二段目は石英斑岩の塊石を使用する。一段目と二段目の高さは25cmである。三段目も石英斑岩の塊石が使用され、二段目との高さは20cmを測る。三段目の塊石を踏んで旧地表の平石に至るものと考えられる。

⑦城門入口部斜面

石英斑岩を用いて斜面に打ち込むように石積みをおこなっている。石段の石材は流出しているが、偏平な石英斑岩を石段に用いていたと推定される。南側の残存した石などより4段の石段が推定される。

第12節 まとめにかえて

1. 出土遺物について

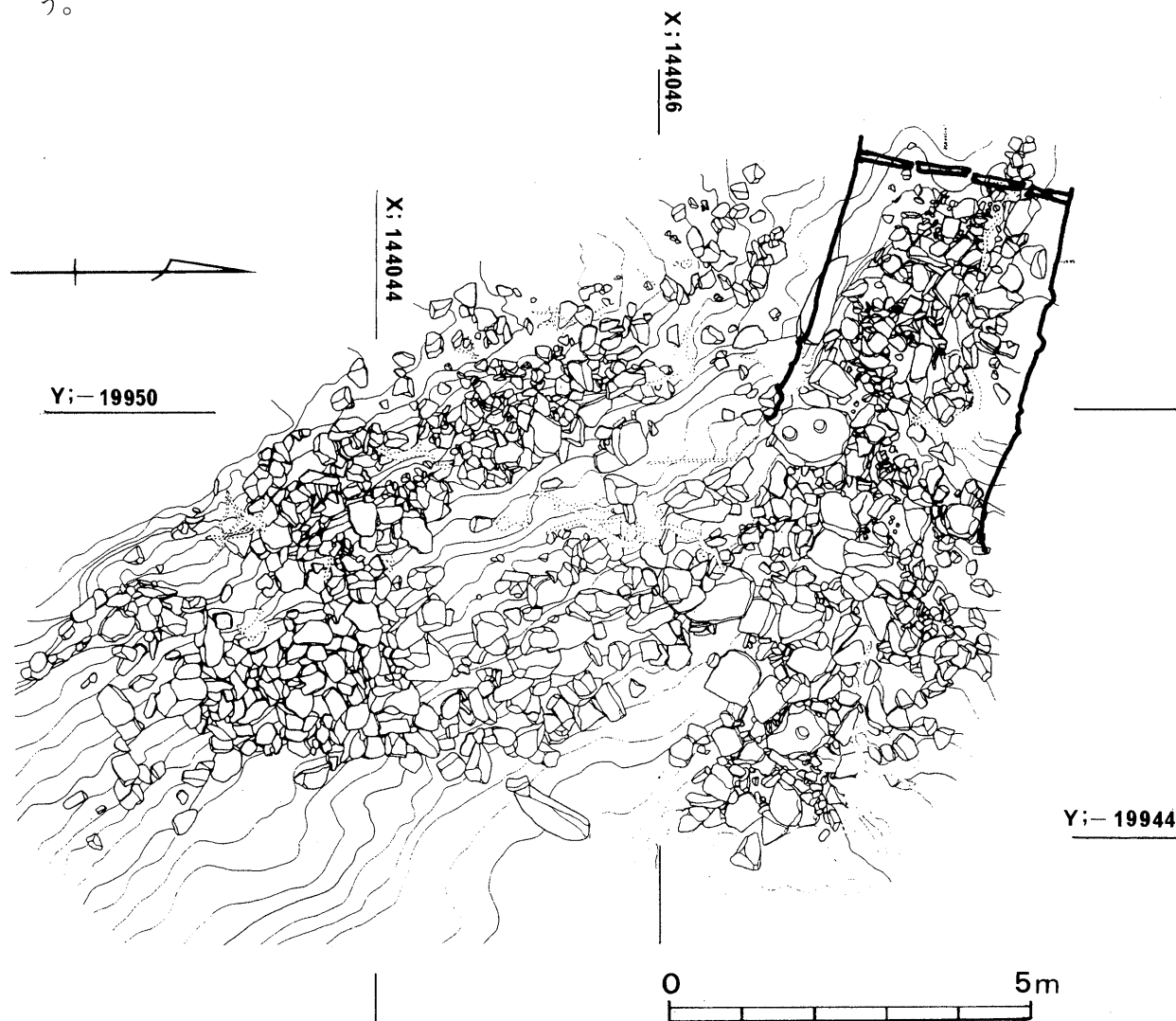
金田城から出土した須恵器の年代は、現状では2時期が考えられる。出土した供膳形態の形式のほとんどは7世紀の第3四半期におさまるもので、そのなかに7世紀の第3四半期古相のものがわずかに存在する。つまみがついた小ぶりの杯蓋で、7世紀第3四半期の古相に位置づけられる。新しい時期のものとしては、宝珠つまみの杯蓋で、つまみの頂部が平坦で、かえりのないものが存在し、7世紀の第4四半期に該当しよう。したがって出土須恵器が示す金田城の年代観は上限が7世紀第3四半期初頭、下限は7世紀第4四半期と考えられ、中心は7世紀第3四半期である。

2. 今後の金田城整備調査の課題

ーとくにビングシ門付近の補完調査についてー

ビングシ門付近の調査によって、2時期の遺構が確認された。新旧2時期の土塁とその関連遺構である。

現状では発掘によって出土したビングシ門は新しい時期に属する遺構の可能性が高い。したがってビングシ門に先行する門の存在も想定されるところである。調査計画のなかではビングシ山の調査は完了しているが、以上のような課題が残されていることから今後の補完調査も考慮されるべきであろう。



第45図 二ノ城戸城門跡 (S=1/100)

第 4 章 自然科学分析

第1節 自然科学分析

1. 目 的

金田城の調査では、当初、遺構に伴う出土遺物が少なかったので、遺構の年代の確定ができにくかった。周辺から出土する少量の遺物は7世紀のものがほとんどであったため、遺構もその時期であろうという漠然とした時期決定しかできなかった。そのため平成8年（1996）より放射性炭素測定年代を援用して遺構や土層の年代をより確実なものとすることにした。

その後、金田城の土塁に新旧ふたつの土塁が存在することがわかったが、土塁からは出土遺物がなかったため、新旧の土塁の築造年代を把握するために平成9・10年も継続して分析をおこなった。

なお分析結果はあくまでも放射性炭素による年代であり、実年代や暦年代とは異なっており、実年代や暦年代を考えるうえで参考資料のひとつであることはいうまでもないことである。

2. 分析方法

年代測定をおこないたい試料（主に炭化物）を株式会社古環境研究所に依頼し、試料によって β 線計数法と加速器質量分析（AMS）法によって分析をおこなった。いずれの方法をとるかは古環境研究所に一任した。

3. 各年度の調査における測定結果

（1）平成8年度調査の測定結果

第1表が平成8年度の測定結果である。土層中の炭化物を2点と柱穴内から出土した炭化物1点を分析した。7世紀代の放射性炭素年代N o 2の試料を出土した土層は旧表土と判断した土層である。N o 3の遺構出土試料ともあわせ、7世紀前半におさまる放射性炭素年代を示した。

（2）平成9年度調査の測定結果

第2表が平成9年度の測定結果である。新旧土塁の出土にともない、その暦年代の参考とするため分析したものである。

しかし旧土塁の分析結果に比べると、新土塁の年代は採取した試料（N o 3）が不適切であったために参考となる結果が得られなかった。旧土塁から採取した2点の試料のいずれもが、68%の確率を示すとされる 1σ の数値が6世紀後半から7世紀前半であった。

（3）平成10年度の測定結果

第3表が平成10年度の測定結果である。平成9年度に測定できなかった新土塁の年代の参考とするため、新土塁中の炭化物（N o 2）を分析したが、旧土塁よりも 1σ の数値幅が古くなるという結果であった。今回の分析でも新土塁の年代には参考となる数値をえられなかった。

旧土塁については 1σ が6世紀後半から7世紀前半という結果で、平成9年度の旧土塁から採取した2点の試料と同じ数値幅を示した。旧土塁の放射性炭素年代はだいたいこの幅におさまるものと考えられる。

4. 測定結果の評価

測定結果より7世紀前後の年代を示した試料のうち、68%の確率を示すとされる1 σ の結果をひろいあげると下記ようになる。

615～655（平成8年度試料 No 2）

600～650（平成8年度試料 No 3）

540～630（平成9年度試料 No 1）

590～650（平成9年度試料 No 2）

550～645（平成10年度試料 No 1）

450～600（平成10年度試料 No 2）

これらの数値をみるかぎり、放射性炭素年代は『日本書紀』に記された築城年代（西暦667年）より古い数値を示している。実年代ではないが、参考として放射性炭素年代を考慮した場合、『日本書紀』に示された年代は築城開始年代というよりは、金田城がひとまず機能的に完成した年代を意味しているのではないかという推測ができる。

また金田城から出土する遺物の年代観では、ほとんどが7世紀後半の資料であり、6世紀や8世紀の遺物を含まない。したがって遺物からみるかぎり、金田城の築城開始年代は、7世紀を遡るものではないと考えられる。7世紀後半の出土遺物が多いことは築城後、まさに城としての機能を果たし始めた金田城の状況を反映したものと考えられる。

第1表 平成8年度 美津島町 金田城における放射性炭素年代測定結果

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
N o 1	W第3区 東拡張トレンチ第3層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β 線法 (長時間測定)
N o 2	W第3区 東拡張トレンチ第4層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析 (AMS) 法
N o 3	W第3区 北ピット列中央ピット	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄	加速器質量 分析 (AMS) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1σ)	測定 No (Beta)
N o 1	890 $\pm$ 80	-27.7	840 $\pm$ 70	A D1220 (A D1165~1270)	101240
N o 2	1480 $\pm$ 40	-28.2	1430 $\pm$ 40	A D640 (A D615~655)	101241
N o 3	1490 $\pm$ 40	-27.6	1450 $\pm$ 40	A D630 (A D600~650)	101242

第2表 平成9年度 美津島町 金田城跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
N o 1	旧土塁サンプルA	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
N o 2	旧土塁サンプルB	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法
N o 3	土塁内	木杭	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	加速器質量 長時間測定

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 交点 (1 σ)	測定 No (Beta)
N o 1	1520 $\pm$ 50	-26.1	1500 $\pm$ 50	A D 590 (A D 540~630)	114250
N o 2	1490 $\pm$ 50	-27.6	1450 $\pm$ 50	A D 630 (A D 590~650)	114251
N o 3	280 $\pm$ 70	-28.1	230 $\pm$ 70	A D 1665 (A D 1640~1680) (A D 1745~1805) (A D 1935~1960)	114252

第3表 平成10年度 美津島町 金田城における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	前期土塁	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	β 線計測法
No 2	黄土層（第2層）	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	加速器質量 分析（AMS）法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 B P)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 B P)	暦年代 交点 (1 σ)	測定 No (Beta)
No 1	1530 $\pm$ 60	-28.0	1480 $\pm$ 60	交点：AD605 1 σ : AD550~640 2 σ : AD440~665	125383
No 2	1520 $\pm$ 50	-23.7	1540 $\pm$ 50	交点：AD550 1 σ : AD450~600 2 σ : AD420~638	125384

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1960年 A D）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。その値は標準物質（P D B）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体別分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

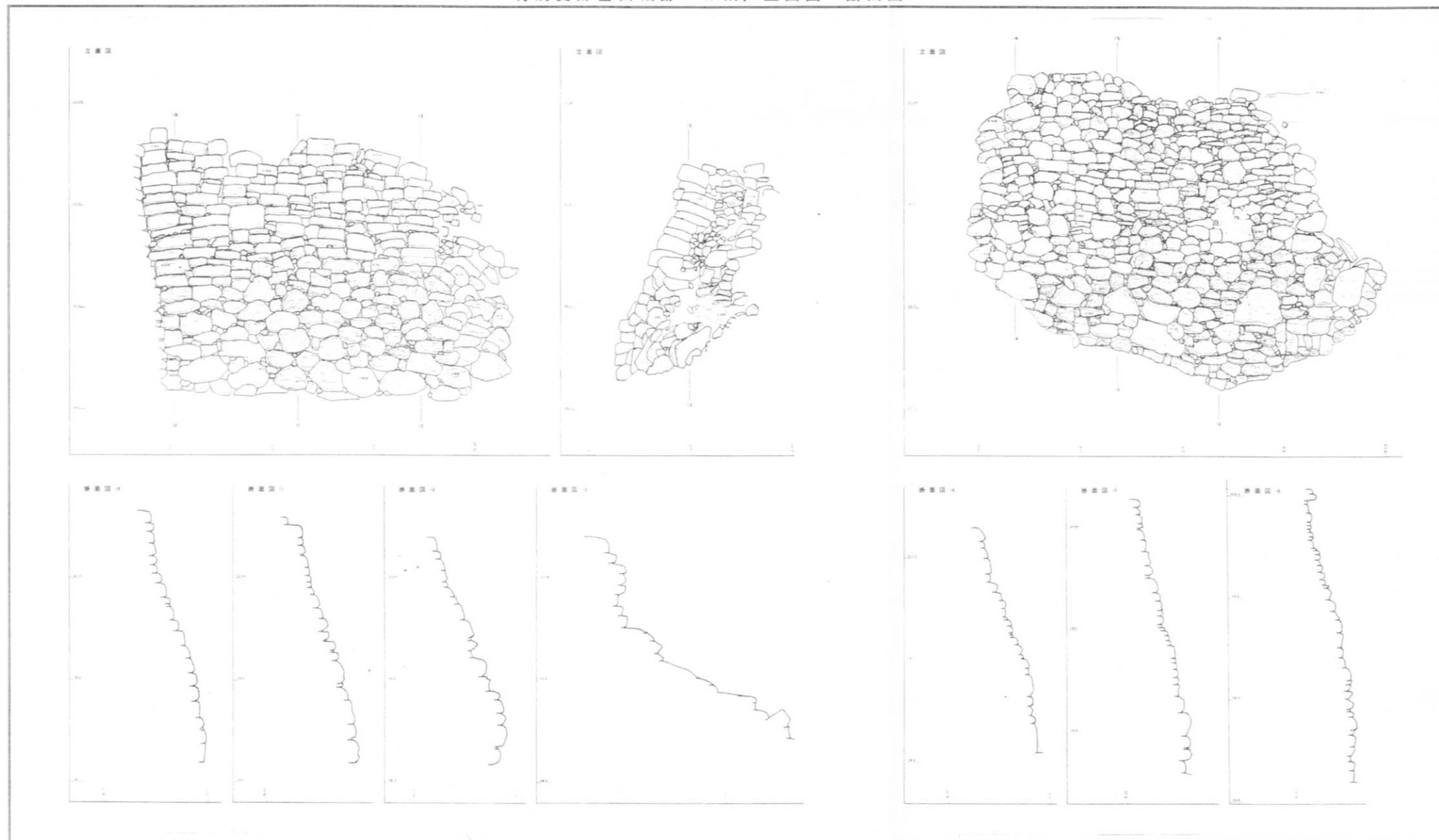
4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には年代既知の樹木年齢の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年B Pより古い試料には適用できない。暦年代の交点とは補正 ^{14}C 年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。

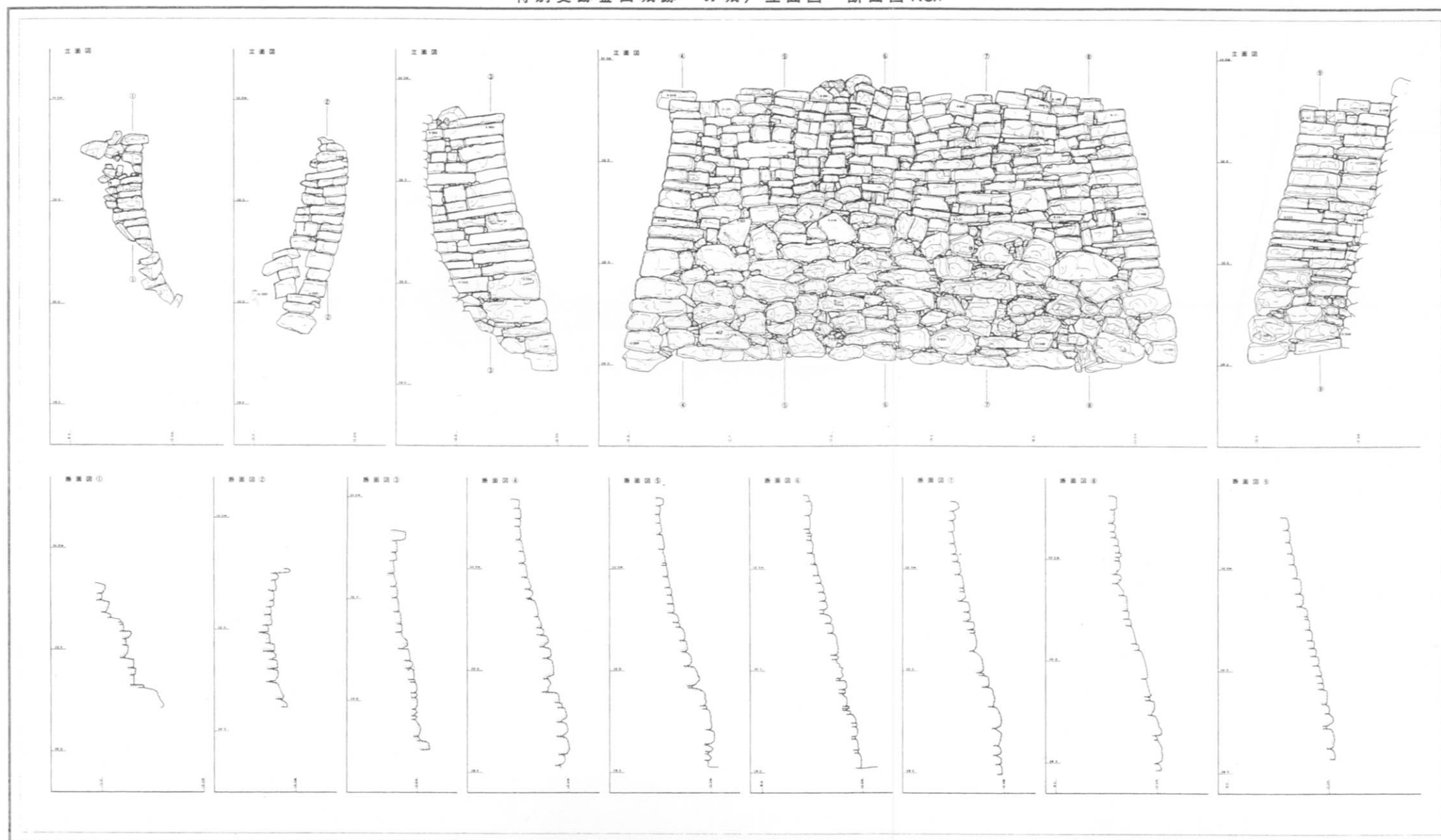
1σ （68%確率）・ 2σ （95%確率）は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

第 5 章 測 量

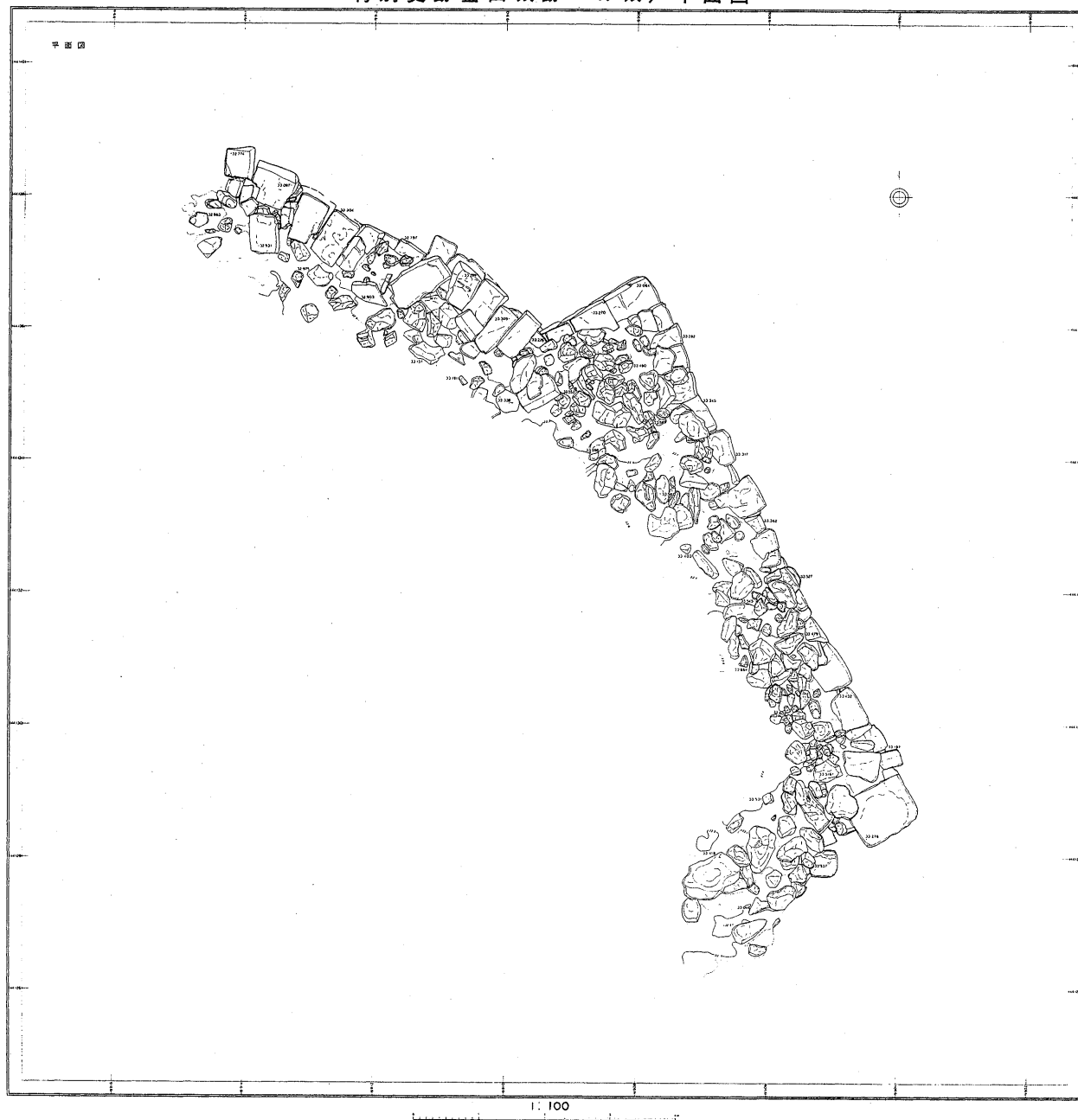
特別史跡金田城跡一の城戸立面図・断面図



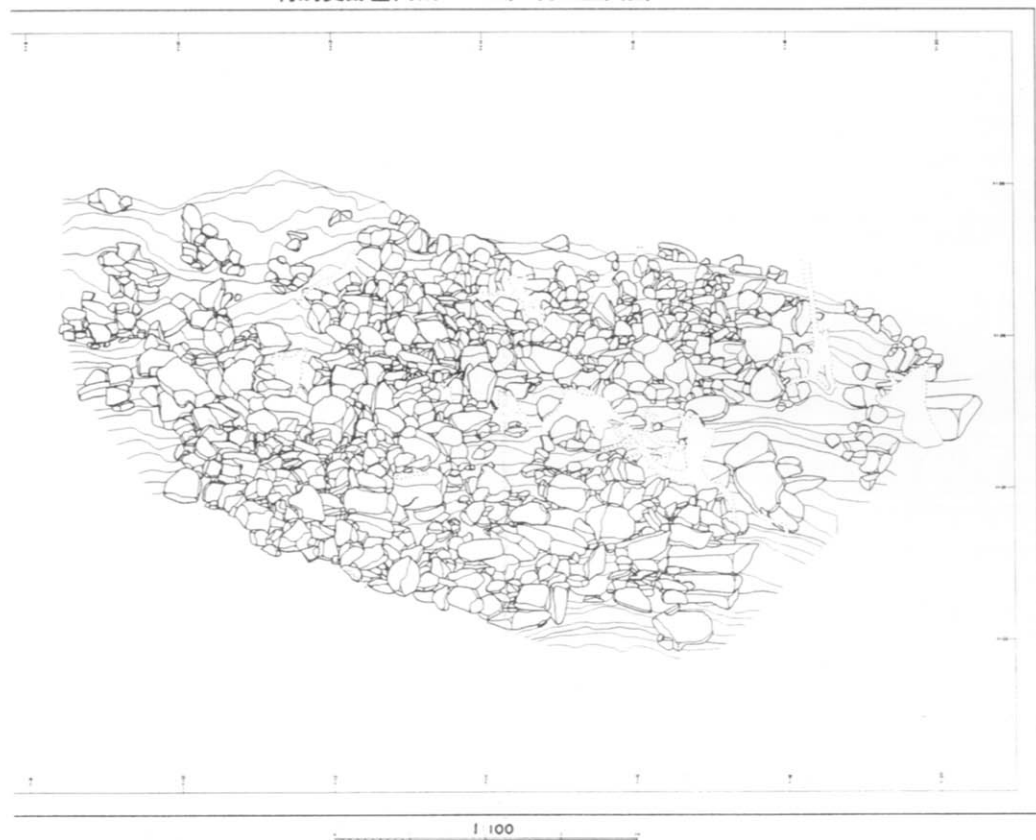
特別史跡金田城跡一の城戸立面図・断面図 NO.1



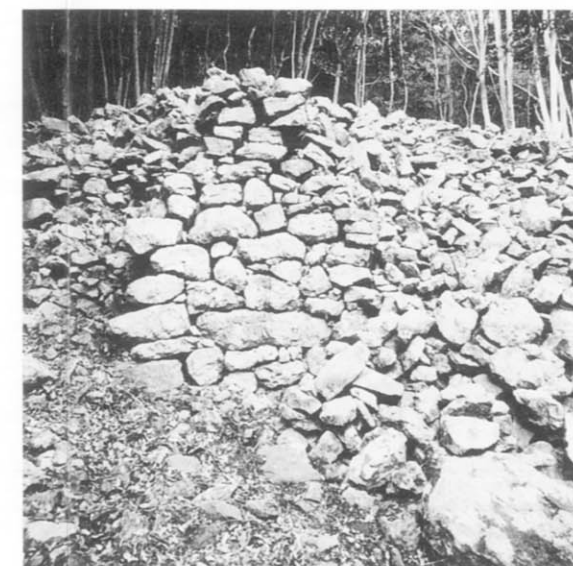
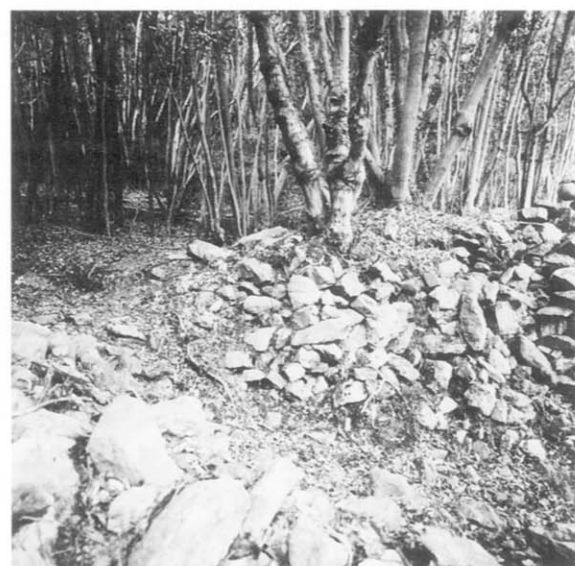
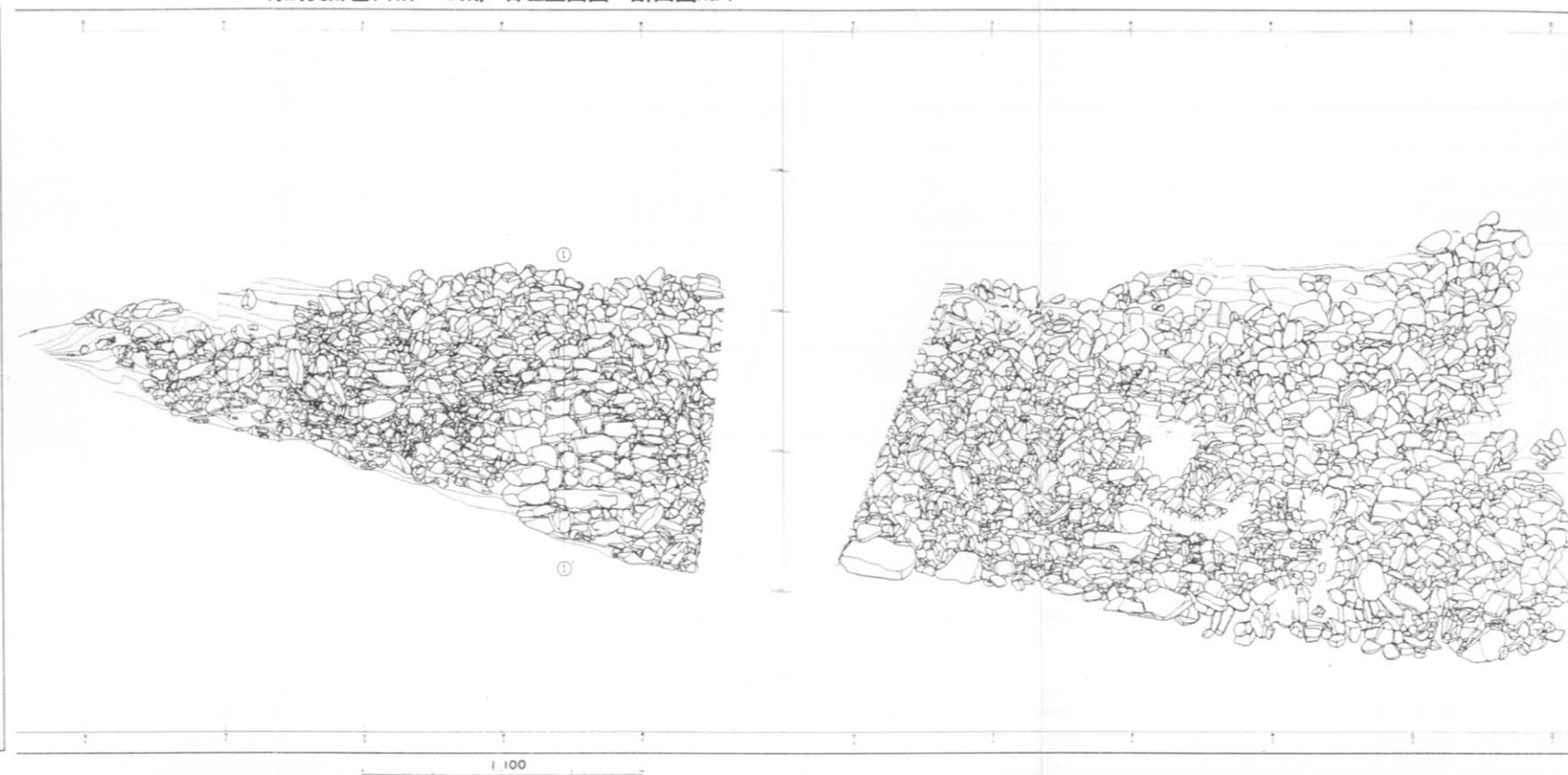
特別史跡金田城跡一の城戸平面図



特別史跡金田城二の城戸石垣立面図No. 2



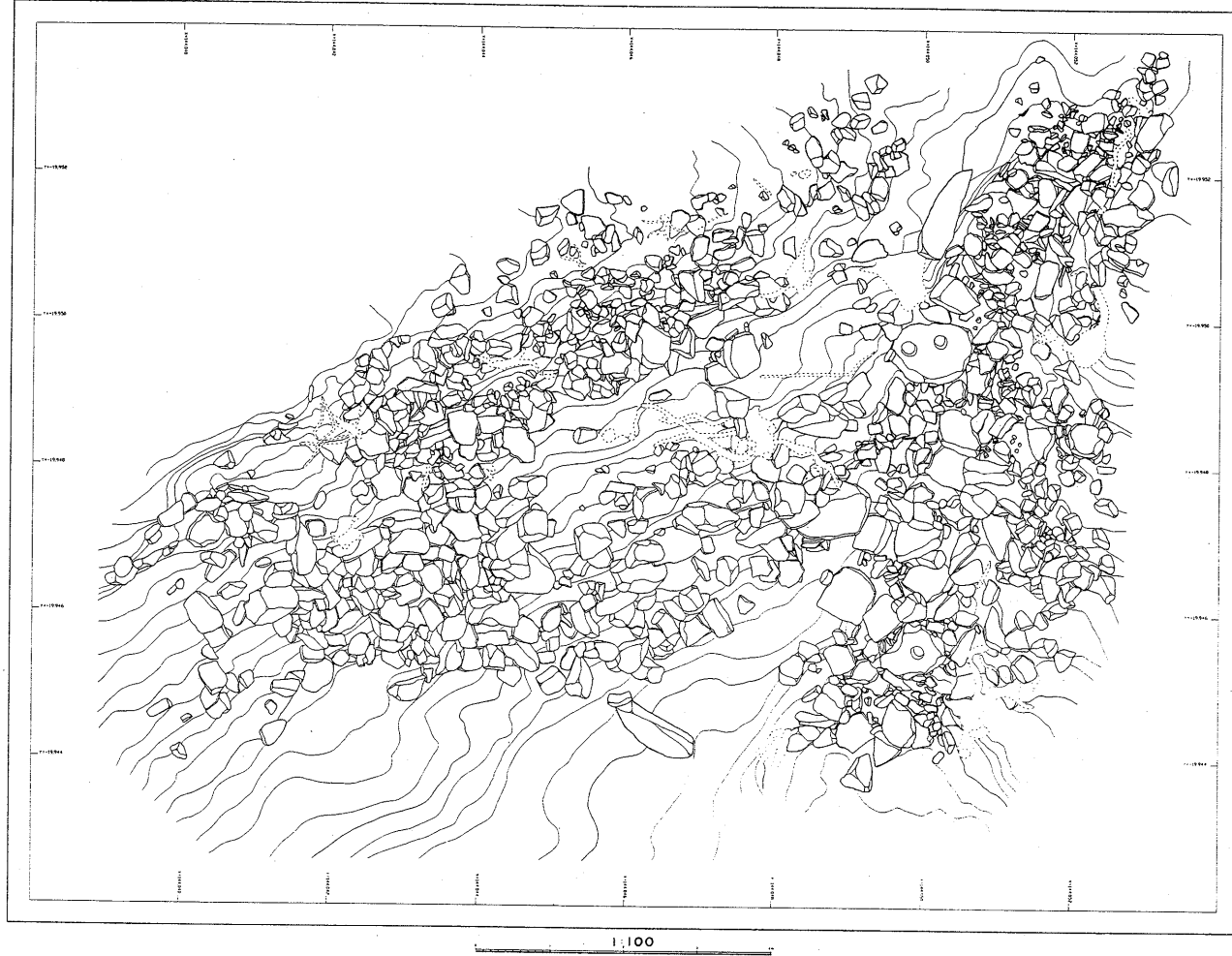
特別史跡金田城二の城戸石垣立面図・断面図No. 1

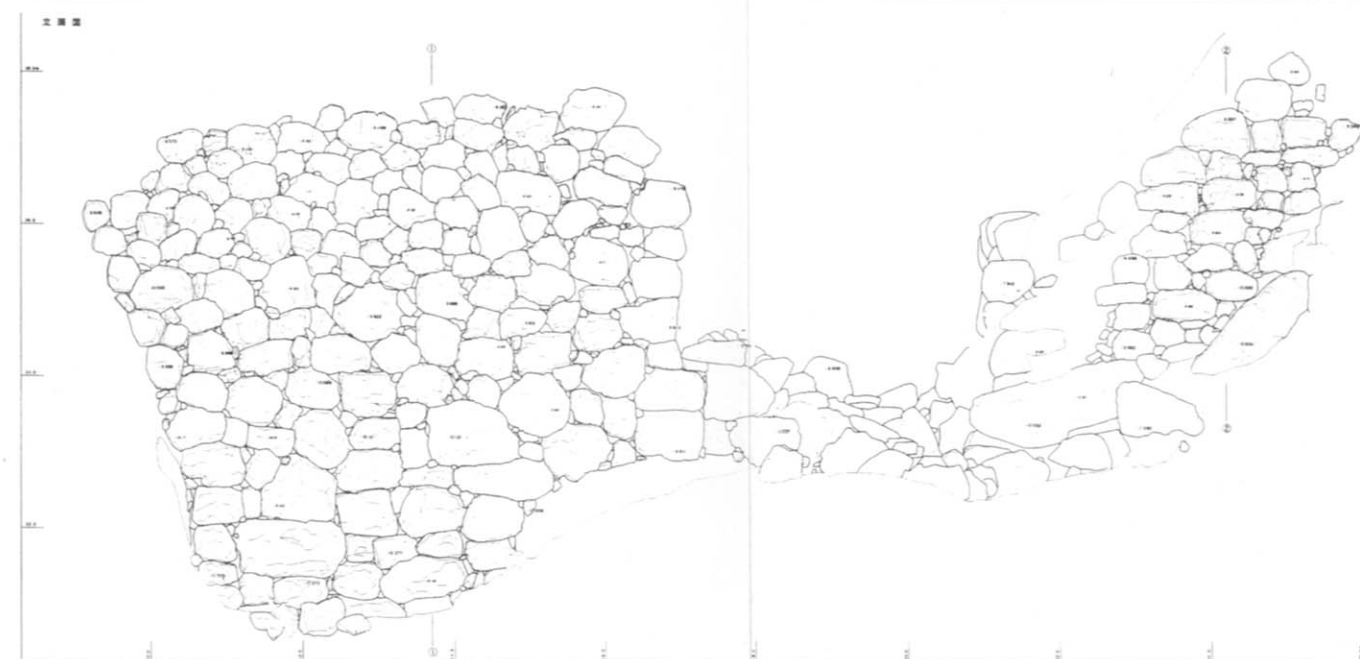
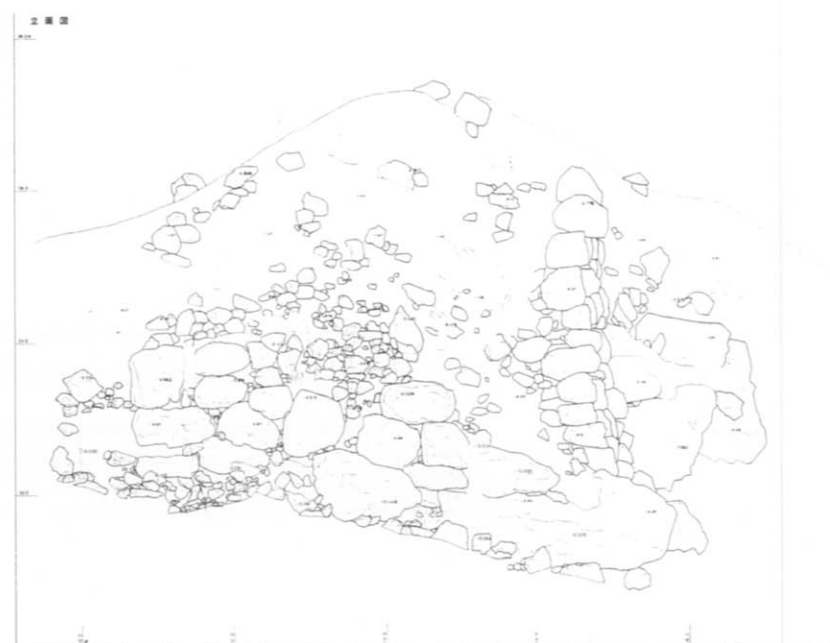
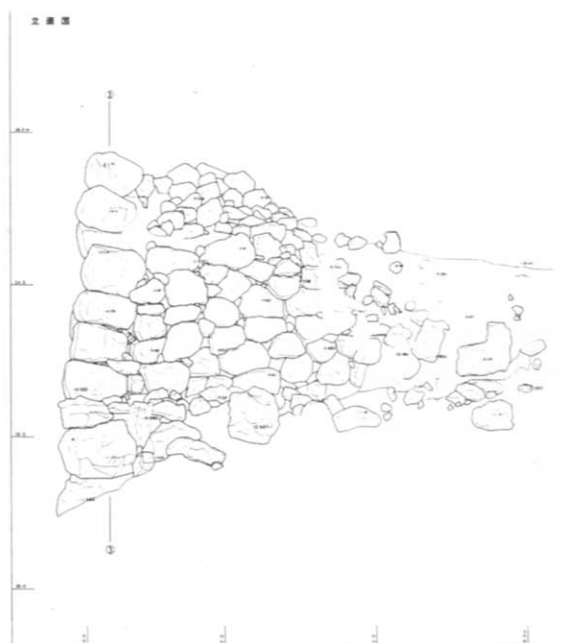


特別史跡金田城二の城戸石垣平面図No. 1

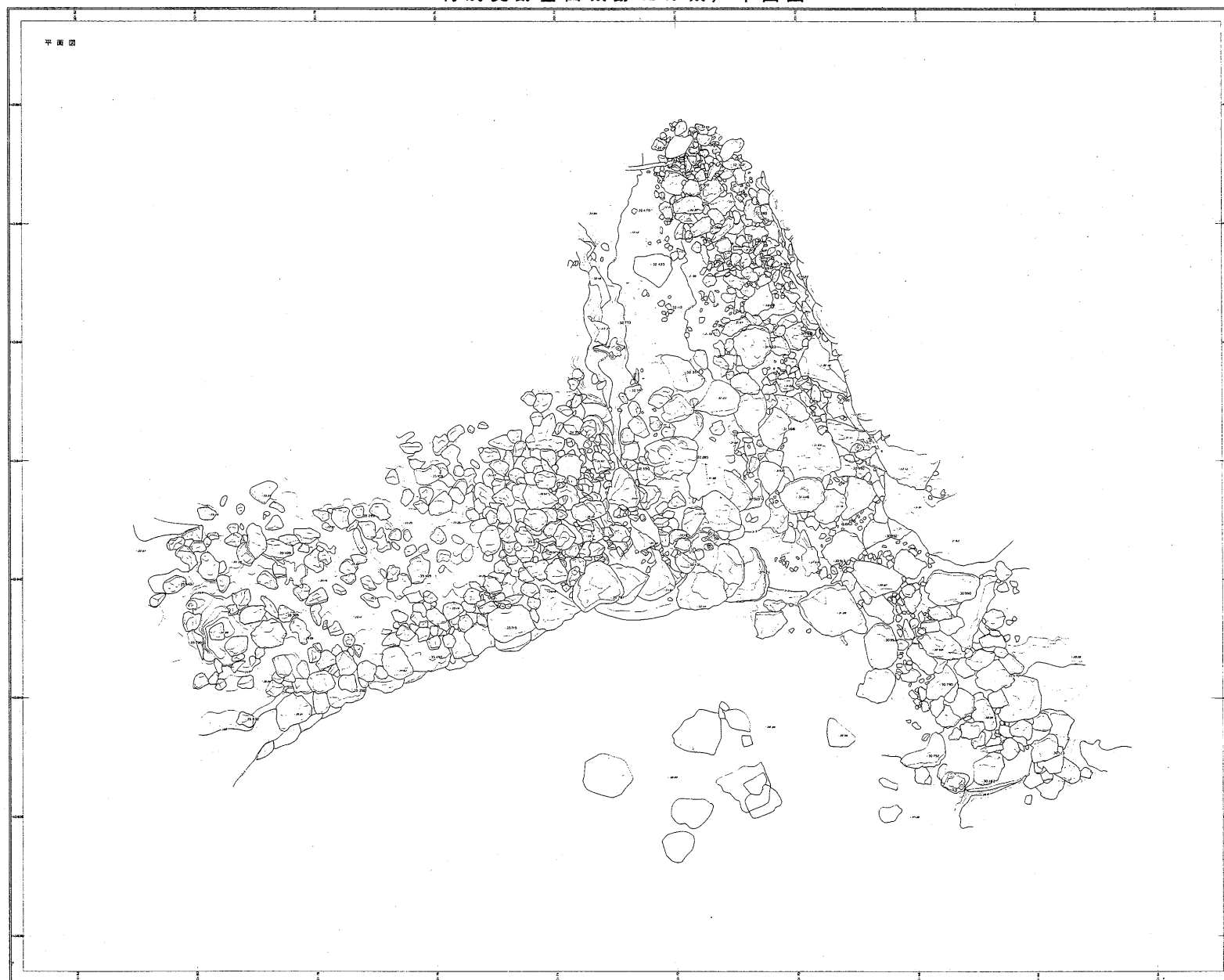


特別史跡金田城二の城戸石垣平面図No. 2

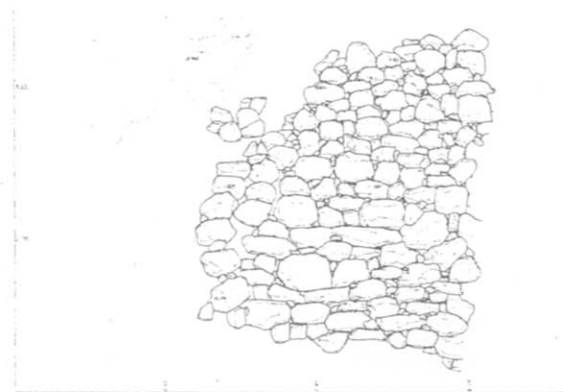




特別史跡金田城跡三の城戸平面図



立面図



断面図①



立面図

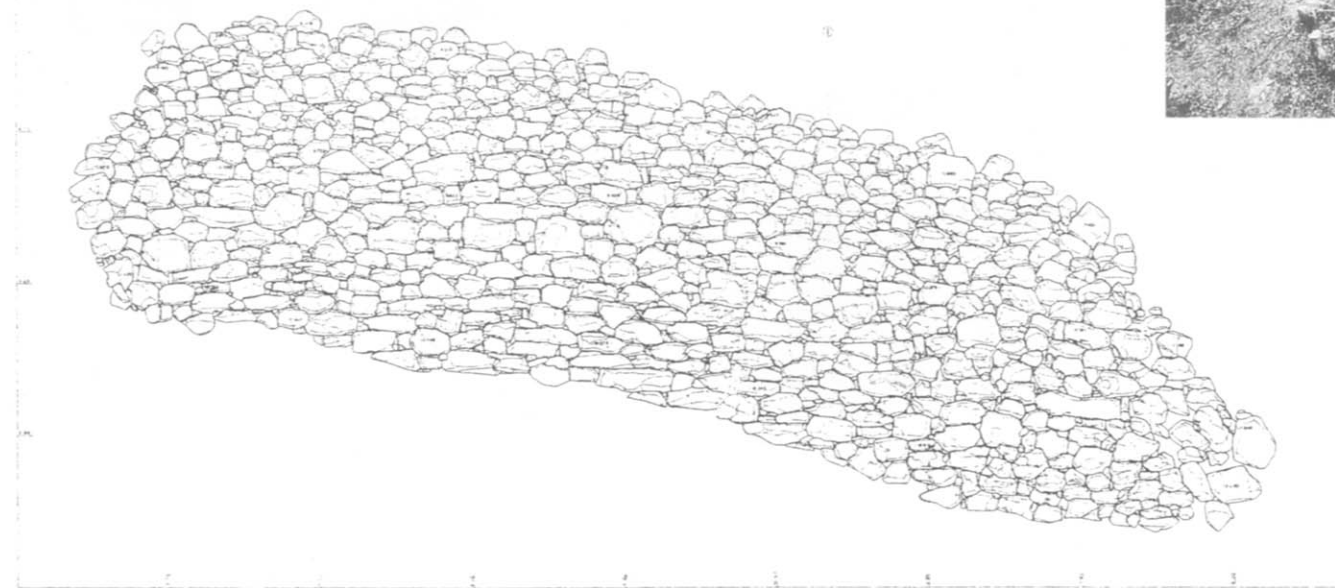


圖 版



ピングシ山遠景

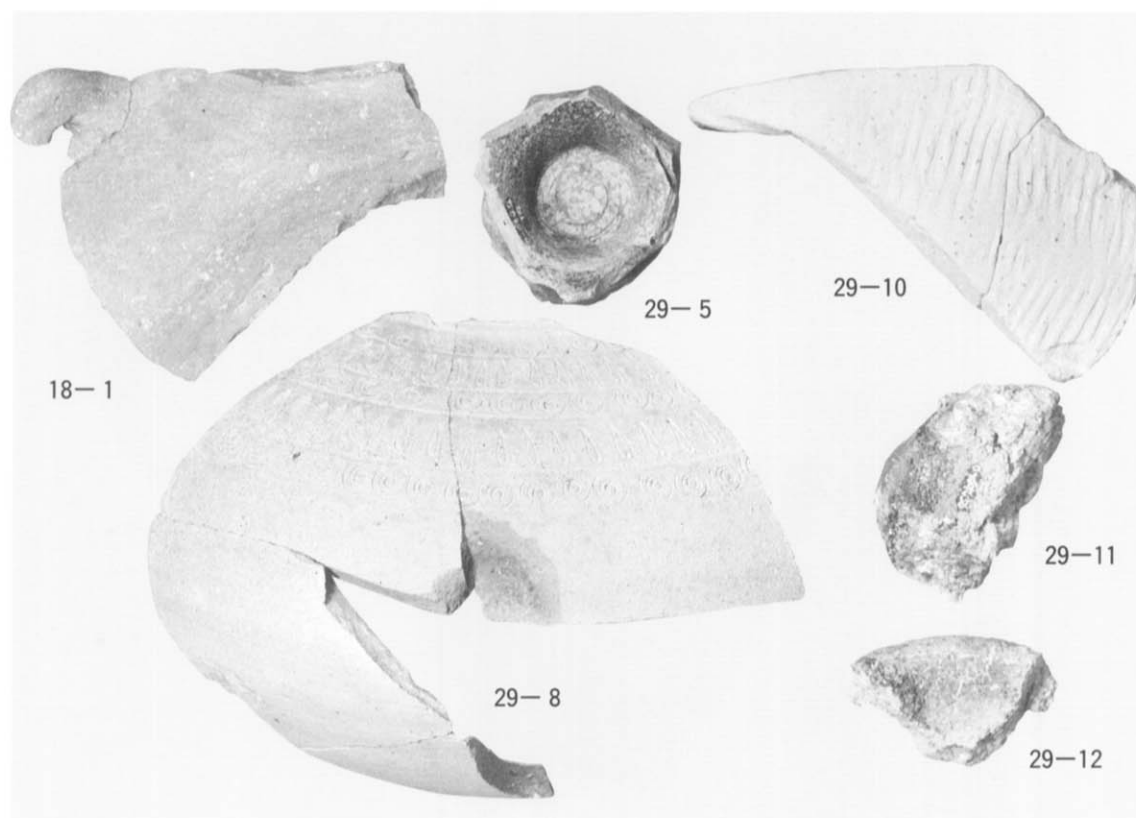
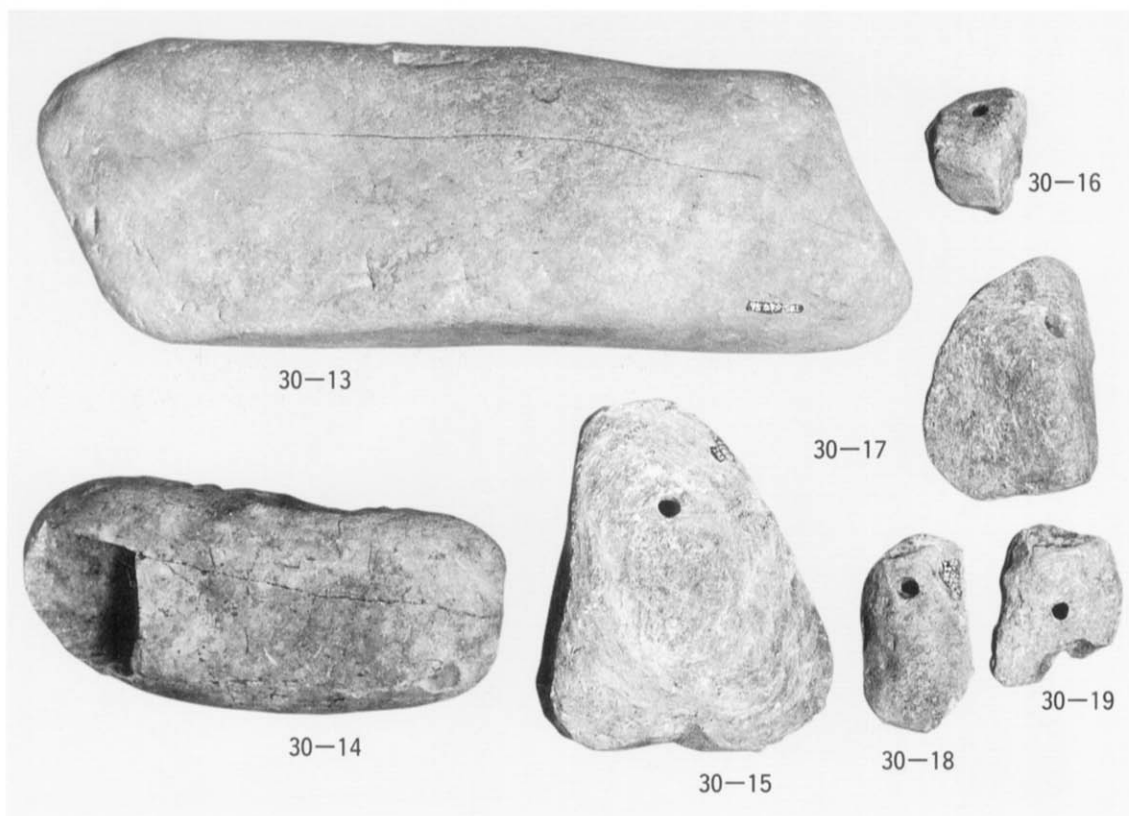


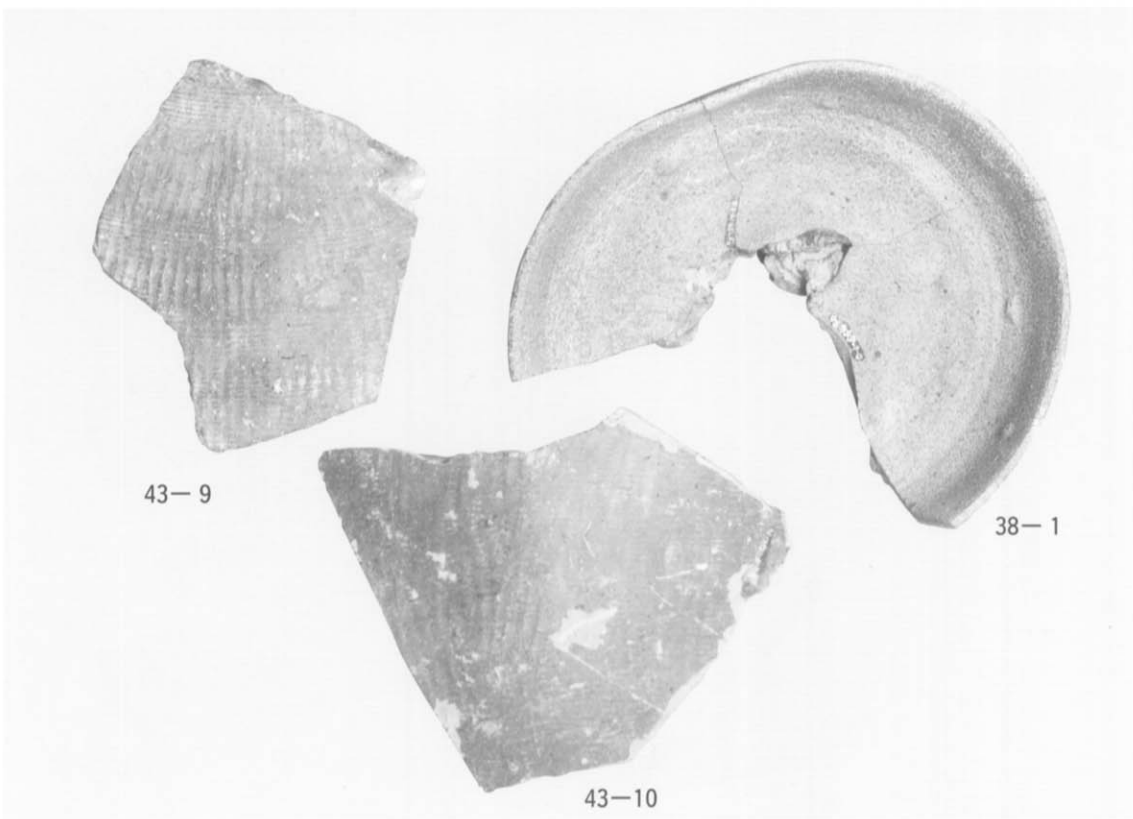
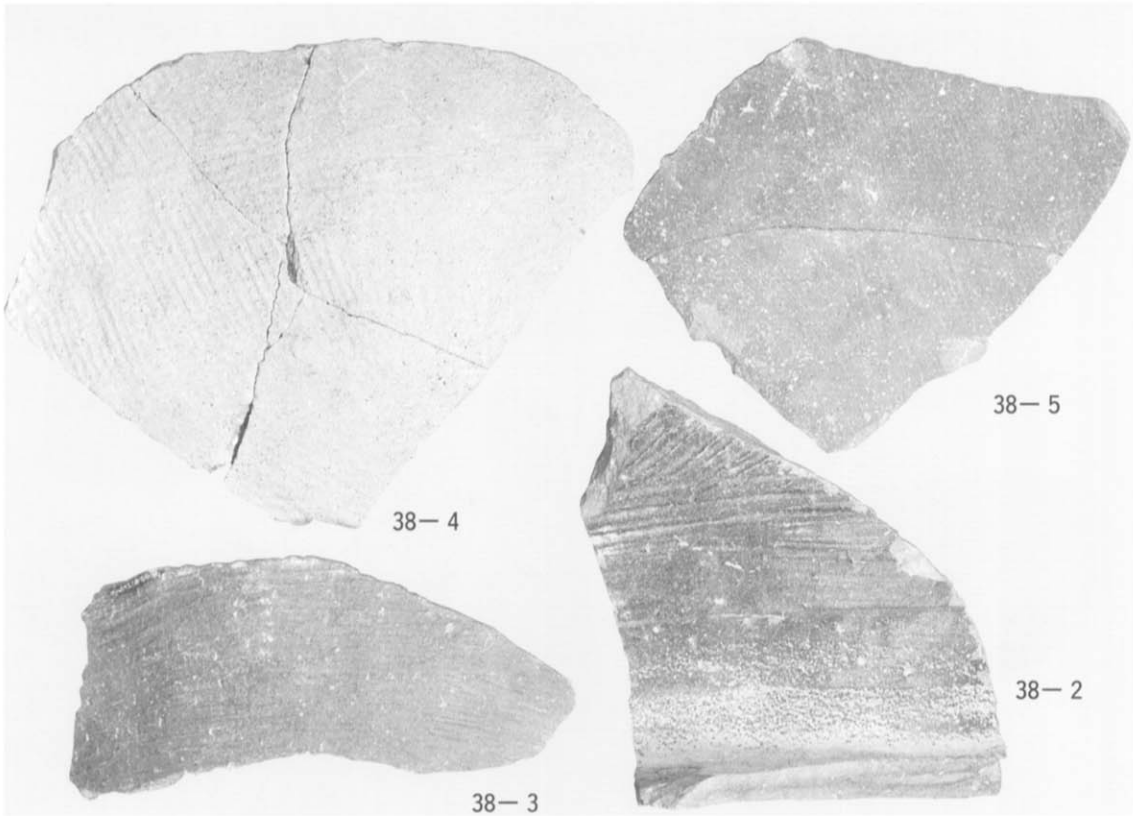
鋸割岩

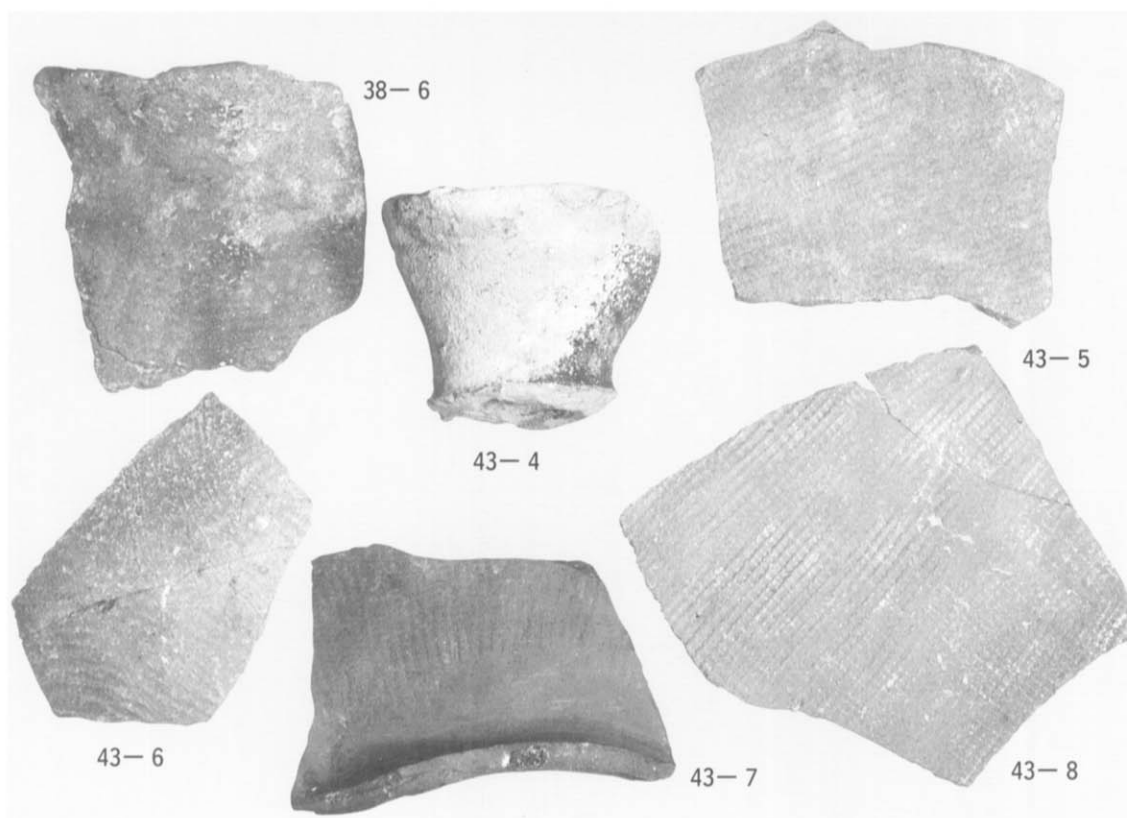
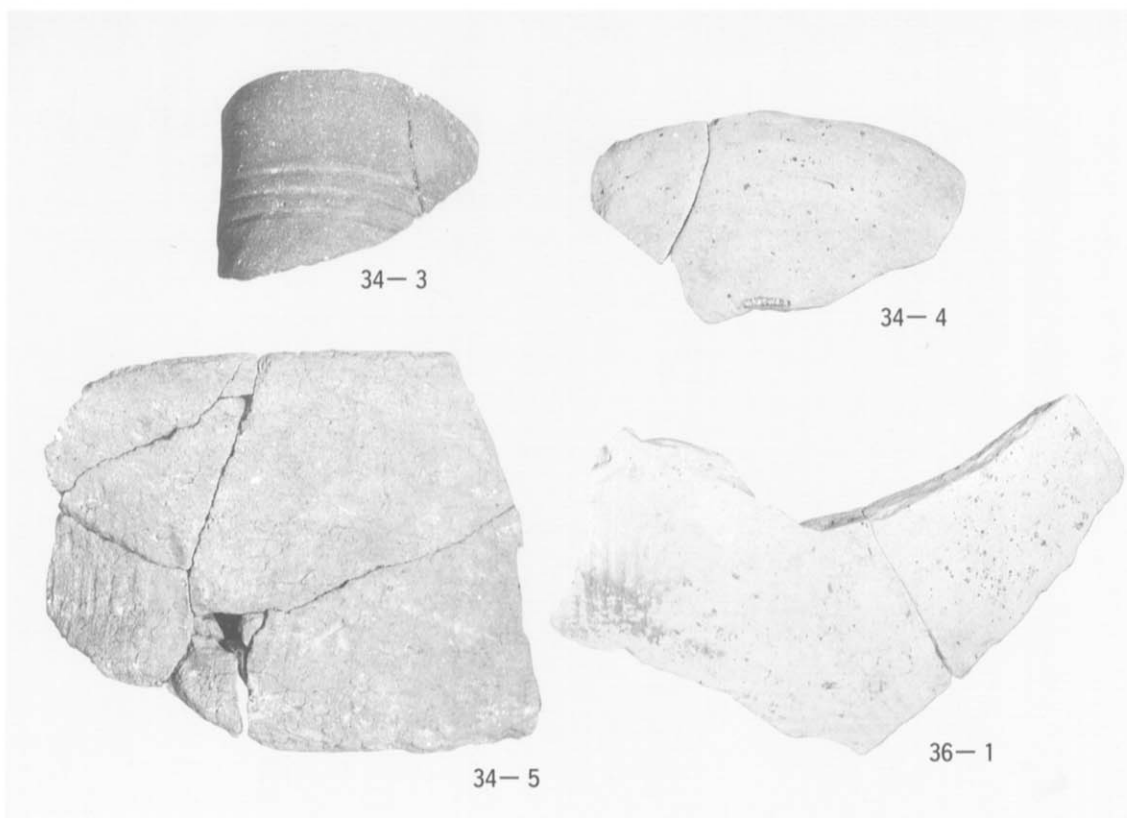


大吉戸神社の大祭









報告書抄録

ふりがな	かねだじょうあと							
書名	金田城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	美津島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	古門雅高・本田秀樹・田中淳也							
編集機関	美津島町教育委員会							
所在地	〒817-0322 長崎県下県郡美津島町大字雞知甲 550番地 2							
発行年月日	西暦2000年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かねだじょうあと 金田城跡	長崎県 しもあがたぐん 下県郡 みつしまちょう 美津島町 くろせ 黒瀬および みのかた 箕形	442	12	34°	129°	1993/ 9 -11	122㎡	遺跡整備
				17′	16′	1994/ 9 -11	210㎡	
				51″	35″	1995/ 9 -11	150㎡	
						1996/ 9 -10	150㎡	
						1997/ 9 -11	200㎡	
						1998/ 9 -11	150㎡	
						1999/ 9 -10		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金田城跡	古代山城	古代	土塁 掘立柱建物跡 炉跡 城門跡		須恵器 土師器 砥石 温石 羽口 るつぼ		国指定特別史跡	

美津島町文化財調査報告書第9集

金 田 城 跡

2000年3月31日

発行 美津島町教育委員会

長崎県下県郡美津島町大字雞知甲550-2

TEL 09205-4-2271

印刷 (株) 昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007-2

TEL 0957-22-6000